

府内城・城下町跡 7

第18次調査報告書

ホテル建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

2009

大分市教育委員会

序 文

本書は、ダイワロイネットホテル建設に伴って実施した府内城・城下町跡第18次調査の報告書です。

今から約400年前、府内藩主であった竹中重利により、現在の大分中心市街地の基盤となる城下町が整備されました。江戸時代の絵図には、堀で区画された敷地の中に40以上の町が広がっていた様子が描かれています。

今回報告する地点は、武士の居住地である三ノ丸の中に位置しており、蔵屋敷や府内藩に勤仕する家臣の屋敷が存在した場所がありました。発掘調査では、府内藩が成立した頃の建物跡、道路跡や火災後の片付けの痕跡が発見されるなど、武家屋敷の一画を示す貴重な成果を得ることができました。

本書が文化財保護への理解と認識を深める一助となり、また、市民の皆様に郷土史学習の研究資料として、広くご活用いただければ幸いです。

最後になりましたが、発掘調査から報告書刊行に至るまで、御理解と御協力をいただきました地権者様並びに関係各位に対し、心から感謝申し上げます。

平成21年3月31日

大分市教育委員会

教育長 足立 一馬

例　　言

1. 本書は、平成19年度に大分市教育委員会が大分市荷揚町26番においてホテル建設に伴い、荻本義雄氏より委託を受けて実施した府内城・城下町第18次調査の発掘調査報告書である。
2. 調査は、大分市教育委員会が調査主体となり、掘削埋め戻し業務については有限会社九州文化財リサーチに委託した。
3. 調査は、佐藤道文、三嶋桂司（大分市教育委員会文化財課嘱託職員）が担当し、遺構図、遺構写真撮影等の記録資料の作成は全て佐藤、三嶋が行っている。記録作成に関しては、九州文化財リサーチの方々に一部協力いただいた。
4. 出土遺物の整理作業は、遺物実測図・拓影・デジタルトレース図の作成については株式会社大成エンジニアリングに主に委託し、遺物の実測図は一部佐藤・三嶋・山下朋紀（大分市教育委員会文化財課嘱託職員）が行った。
5. 遺構図及び遺物は三嶋、廣瀬育子（大分市教育委員会文化財課嘱託職員）・青木里水・秋山かおる・稻穂美香・小島愛・永井勝代・中山麻里子・佐藤良子（大分市教育委員会文化財課臨時職員）がデジタルトレースを行った。
6. 遺物の写真撮影は、担当者である佐藤、三嶋が行い、五十川雄也の協力を得た。
7. 本書の執筆は、佐藤が行った。
8. 本書の編集は、高畠、佐藤、三嶋が行っている。
9. 出土遺物、記録資料は、大分市顕徳町文化財資料室（大分市顕徳町3丁目2-43）・鴫野文化財倉庫、旧植田支所2Fに収蔵・保管している。

凡　　例

1. 本書に用いた方位はすべて座標北（G.N）である。また基準点の座標値は国土調査法第Ⅱ座標系による。
2. 本書に用いた遺構略号は、SB：掘立柱建物、SA：柵跡・柱穴列、SE：井戸遺構、SF：道路状遺構、SD：溝状遺構、SK：土坑、SP：柱穴遺構、SX：性格不明遺構を表している。
3. 土師器の名称については古代のものと中世以降のものを識別するため、前者については「土師器」、後者については「土師質土器」としている。
4. 第V章に掲載する図版に関しては、大分大学付属図書館（第58図）、大分県立図書館（第59・60図）より史料提供をいただいた。
5. 本書を作成するにあたり以下の文献を参考とした。

九州近世陶磁学会	2000	『九州陶磁の編年』
平凡社		別冊太陽『古伊万里』
中世土器研究会	1995	『概説 中世の土器・陶磁器』
大分県教育委員会	1993	『府内城三ノ丸遺跡』
		－大分県共同庁舎（仮称）建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－
大分県教育委員会	1996	『府内城三ノ丸北口跡』
		－大分中央警察署本部別館庁舎新築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－
大分県教育委員会	1996	『机張原遺跡 女狐近世墓地 庄ノ原遺跡群』
		－九州横断自動車道関係埋蔵文化財発掘調査報告書(5)-
大分県教育委員会	1999	『中尾近世墓地』
		－国道10号線旦の原交差点拡幅に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書－
杵築市教育委員会	1987	『杵築小学校 校内遺跡』
		－豊後杵築藩武家屋敷関連遺跡の発掘調査報告書－

目 次

序 文		
例言・凡例		
第Ⅰ章 はじめに	1	
第1節 中心市街地の埋蔵文化財	1	
第2節 調査に至る経緯	2	
第3節 調査組織	2	
第Ⅱ章 立地と環境	3	
1. 大友氏の除国	3	
2. 府内城の築城	3	
3. 竹中氏による府内城・城下町の建設	3	
4. 街中に残る、江戸時代の面影	3	
第Ⅲ章 府内藩の様子	6	
第1節 江戸時代後半～終わり頃の府内藩主	6	
第2節 府内藩で起きた主要な出来事など	6	
1. 城詰米の見分と巡見使の来見	6	
2. 困窮する府内藩の財政	7	
3. 府内の商人	7	
4. 学業の振興	7	
5. 仙石橋の架け橋	8	
第Ⅳ章 調査の成果	13	
第1節 調査の概要	13	
第2節 基本層序	13	
第3節 A区の遺構と遺物	14	
A 第1面の遺構	14	
(1) 井戸跡	14	
(2) 道路状遺構・石列・暗渠遺構	14	
(3) 土坑	17	
(4) 性格不明遺構	21	
B 第2面の遺構	23	
(1) 建物跡・柱穴列	23	
(2) 井戸跡	23	
(3) 溝状遺構	26	
(4) 土坑	26	
C 第1面の遺構からの出土遺物	26	
(1) 井戸跡出土遺物	26	
(2) 柱穴遺構出土遺物	26	
(3) 道路状遺構・溝状遺構出土遺物	30	
(4) 土坑出土遺物	30	
(5) 性格不明遺構出土遺物	33	
D 第2面の遺構からの出土遺物	33	
(1) 掘立柱建物・柵跡・柱穴出土遺物	33	
(2) 井戸跡出土遺物	34	
(3) 溝状遺構出土遺物	34	
(4) 土坑出土遺物	41	
(5) 性格不明遺構出土遺物	41	
(6) 搅乱坑・試掘坑・土層他出土遺物	41	
第4節 B区の遺構と出土遺物	52	
A 遺構	52	
(1) 井戸跡	52	
(2) 柱穴遺構	53	
(3) 便所遺構	53	
(4) 道路状遺構	53	
(5) 石組み遺構	53	
(6) 土坑	53	
(7) 性格不明遺構	54	
B 出土遺物	59	
(1) 石組み遺構出土遺物	59	
(2) 柱穴遺構出土遺物	59	
(3) 土坑出土遺物	59	
(4) 性格不明遺構出土遺物	61	
(5) 包含層出土遺物	62	
第V章 まとめ		
第1節 絵図からみる調査地点	76	
第2節 時期別変遷	77	
古代	77	
中世	78	
近世前半	78	
近世後半①	79	
近世後半②	79	
明治時代	80	
第3節 17世紀代の非ロクロ系の土師質土器について	80	

挿 図 目 次

第1図 大分市街地の様子	1	第39図 出土地不明、淡茶灰土、表土出土遺物	52
第2図 周辺遺跡・文化財位置図	4	第40図 SE144、SP140、SW131・132、SV130実測図	55
第3図 府内城・城下町復原図及び調査地点位置図	5	第41図 SK103 (114)・108実測図	56
第4図 第1面 A区B区遺構略図	9	第42図 SK119・121・124・128・129実測図	57
第5図 第2面 A区遺構略図	10	第43図 SK143・146・147・151～153実測図	58
第6図 A区 遺構全体図	11	第44図 SV130、SP107・142出土遺物	59
第7図 B区 遺構全体図	12	第45図 SK103 (S103・114) 出土遺物	63
第8図 SE042・080・092、SX070実測図	15	第46図 SK103・121出土遺物	64
第9図 SF005・SV010実測図	16	第47図 SK121出土遺物	65
第10図 SK001・011～014・016・022・023・026・034・035実測図	18	第48図 SK121・124出土遺物	66
第11図 SK041・052・055・059・061・064実測図	19	第49図 SK128・129・146・147・151・152出土遺物	67
第12図 SK060実測図	20	第50図 SX105・110出土遺物	68
第13図 SK073実測図	21	第51図 SX111・101出土遺物	69
第14図 SX033・043・044・045・067実測図	22	第52図 SX101・102出土遺物	70
第15図 SB100実測図	24	第53図 SX106・126出土遺物	71
第16図 SB120、SA135実測図	25	第54図 SX139・104出土遺物	72
第17図 SA145実測図	26	第55図 SX104・112・118・123出土遺物	73
第18図 SE085・175実測図	27	第56図 SX123・134出土遺物	74
第19図 SD090・SK094実測図	28	第57図 淡茶灰土出土遺物	75
第20図 各ベルト土層図	29	第58図 付箋慶長十年 府内城下絵図	76
第21図 調査区（A区）東壁土層図	31・32	第59図 天明5年（1785）の絵図	76
第22図 SE042・SE092（SX070）出土遺物	35	第60図 享和2年（1802）の絵図	76
第23図 SF005・SD007・053・058・069・077出土遺物	36	第61図 大分市街地の古代遺跡分布図	77
第24図 SK021・034・035・041・055出土遺物	37	第62図 近世前半段階	78
第25図 SK060出土遺物1	38	第63図 近世後半①段階	79
第26図 SK060出土遺物2	39	第64図 近世後半②段階	80
第27図 SK060・064・073出土遺物	40	第65図 県内の遺跡出土非クロ系土師器質土器（近世）	81
第28図 SP018・020・036・051出土遺物	41		
第29図 SX032・033(033・043・044)出土遺物	42		
第30図 SX033・045・046出土遺物	43		
第31図 SX021・054・056・067出土遺物	44		
第32図 SX068・075出土遺物	45		
第33図 SB100・120、SP091・169・173・196・199・204・207出土遺物	46		
第34図 SE085出土遺物1	47		
第35図 SE085出土遺物2	48		
第36図 SE175出土遺物	49		
第37図 SD090・SK094・SX097出土遺物	50		
第38図 掘乱、試掘トレーナー、遺構検出時出土遺物	51		

表 目 次

府内城・城下町第18次A区遺構台帳 第1面	… 82、83	府内城・城下町第18次A区出土遺物観察表	… 85～89
府内城・城下町第18次A区遺構台帳 第2面	… 83、84	府内城・城下町第18次B区出土遺物観察表	… 89～92
府内城・城下町第18次B区遺構台帳	… 84		

写 真 目 次

A区全景（第1面）	… 93	調査区東壁土層全景（西より）	… 97
A区全景（第2面）	… 93	調査区東壁土層詳細（西より）	… 97
A区全景（第1面）その2	… 94	B区全景（西より）	… 97
SE042土層観察時（北より）	… 94	B区全景（南より）	… 97
SE080完掘時（北より）	… 94	B区全景（北より）詳細①	… 98
SE092土層観察時（北より）	… 94	B区全景（北より）詳細②	… 98
SF005、010検出状況（南より）	… 94	SW128～132検出（南より）	… 98
SF005全景（南より）	… 94	SV130黄色土詳細（南より）	… 98
SF005全景	… 94	SV130完掘状況（南より）	… 98
SF005土層（北より）	… 94	SK124土層（南より）	… 98
SF005土層縦断面（東より）	… 95	作業風景	… 98
SV010砂利検出状況（東より）	… 95	府内18次遠景	… 98
SV010完掘状況（北より）	… 95		
SV010完掘状況（南より）	… 95	遺物写真	… 99～100
SK060土層観察時（東より）	… 95		
SK060土層詳細（北東より）	… 95		
SK060完掘状況（東より）	… 95		
SK073土層観察時（南より）	… 95		
SK073完掘状況（西より）	… 96		
SK073完掘状況（南より）	… 96		
SK073使用イメージ（西より）	… 96		
SX033白色粘土検出状況（北より）	… 96		
SX033礫出土状況（西より）	… 96		
SX033礫出土状況2（南西より）	… 96		
SE085井筒検出状況（南西より）	… 96		
SE085井筒近景	… 96		
SE085作業風景	… 96		
SE175土層観察時（西より）	… 97		
SE175完掘時（西より）	… 97		
SD090完掘状況（東より）	… 97		

第Ⅰ章 はじめに

第1節 中心市街地の埋蔵文化財

中心市街地には、大規模・高層な建物が所狭しと建ち並び、文字とおり中核都市大分市の中枢としての顔を覗かせている。

大分市中心部は、主に江戸時代の城下町が形成された場所である。よって、確認される遺跡の大部分は、江戸時代以降がメインとなる。

文化庁次長通知【埋蔵文化財の保護と発掘調査の円滑化】（平成10年9月29日付 庁保記第75号）中の、「埋蔵文化財として扱う範囲の原則」の中で、「近世に属する遺跡については、地域

において必要なものを対象とすること」「近現代の遺跡については、地域において特に重要なものを対象とすることができる」とある。

大分市では、府内藩の中心部である府内城とその城下町及び熊本藩の出先施設が置かれた「鶴崎」（鶴崎町遺跡群）を上記の対象エリアと定めている。府内城・城下町は、現在の市街地の基礎であることを鑑み、重要遺跡として位置づけている。しかし、先の文化庁次長通知を受け、府内城・城下町の城下町部分の調査指針について検討した結果、城下町に該当する地域の中で500m²未満の開発を行う場合は、その取り扱いを緩和する方向で進めている。

府内城・城下町で開発に伴う発掘調査は現在18地点で行われている。城下町の調査では長い時間にわたり人が生活していることから生活の痕跡も数多く見つかっている。よって調査の期間や費用が莫大にかかり、民間事業者の負担が大きくなっていたことを考えると、上記規制緩和は、中心市街地の開発を促すこと及び事業者負担を軽減することができ、開発・経済的措置等の観点から配慮した内容といえる。

平成19年度文化庁の【文化審議会文化財分科会企画調査会報告書】の中で、地域の文化財を総合的に把握し、保存活用を行いながらまちづくりの核としようという、いわゆる「歴史文化基本構想」が提言され、この基本構想を定める上で、新旧含めた文化財総てを調査・把握することが必要とされている。また、歴史や文化財を活かしたまちづくりを促進させる「歴史まちづくり法」も平成20年5月に制定されている。これらは、文化財（埋蔵文化財など総てを含む）に対する認識・意識が新たな段階に進んだものだと考えられる。

大分市においても、中心市街地の活性化に取り組む中で、府内城とその城下町が活用され始めるなど、江戸時代の城下町・遺跡を見直す動きが生じていることから、先に記した500m²未満の取り扱いについては再検討する段階にきていると思われる。

発掘調査は、人々の生活の様子や文化など貴重な情報を得ることができる。但し、調査を行うには必ず費用・期間という問題が発生するので、この点は明確な設定を明示できるよう、我々も努力する必要がある。



第1図 大分市街地の様子

第2節 調査に至る経緯

平成18年度に、調査地点の埋蔵文化財に関する照会があり、申請地が周知遺跡「府内城・城下町」の三ノ丸内に該当することから、開発と遺跡の取り扱いについて度重なる協議を行った。その結果、申請建築物の建物面積（1F床面積）が500m²を超えることから、規制緩和の対象とは成り得ず、よって発掘調査の実施が必要となった。平成19年4月26日に申請者と調査費用等の協議を行い、平成19年5月11日付けで協定書並びに契約の締結に至った。その後、遺跡の残存状況の把握、そして発掘調査掘削埋め戻し業務委託の設計を作成するにあたり事前の確認調査を行う方針を定め、平成19年6月4日～6日にかけて実施した。エレベーターピット及び立体駐車場が配置される地点を中心に8本のトレチを設定したところ、戦後の火災処理層の下位に近代、近世の順で遺構検出面が存在し、道路状遺構、火災処理土坑、廃棄土坑等が存在していることが判明した。調査については、近代の遺構検出面には同時に昭和時代以降の建築物跡も見られることから、主として近世に該当する遺構面から対象にした。

本調査地点は、平成19年5月末まで駐車場として利用されていたが、それ以前については、昭和30年代の地図を見ると弁護士事務所や商店、材木置場があり、戦前は個人住宅などがたち並んでいた。

第3節 調査組織

<調査主体> 大分市教育委員会 <調査責任者>大分市教育長 秦 政博（平成19年～4月）
足立一馬（平成19年5月～）

平成19年度（調査）

文化財課	【課長】 玉永光洋	【参考】 渋谷建治
管 理 係	【係長】 安東時男	【主査】 幸俊昭 桑原治
	【指導主事】 植木和美 姫野公徳	【主任】 栗田博之 加藤キヌ 加悦真理
文化財係	【係長】 塔鼻光司	【専門員】 坪根伸也 池邊千太郎
	【主任】 高畠 豊 河野史郎 塩地潤一 中西武尚 永松正大	
	【主事】 佐藤道文（調査担当） 五十川雄也 古川匠 長直信	
	【嘱託職員】 五十川慎也 井口あけみ 上原翔平 奥村義貴 佐藤孝則 羽田野達郎 羽田野裕之 碇田智美 三嶋桂司（調査担当）	
	山下朋紀 山本哲也 若林善満	

平成20年度（整理・報告書刊行）

文化財課	【次長兼課長】 玉永光洋	【参考】 岩田祐治
管 理 係	【課長補佐兼係長】 福田誠一	【主査】 幸俊昭 桑原治
	【指導主事】 植木和美 姫野公徳	【主任】 栗田博之 加藤キヌ 竹中智美
文化財係	【課長補佐兼係長】 塔鼻光司	【専門員】 坪根伸也 池邊千太郎
	【主任】 高畠 豊（整理作業総括） 河野史郎 塩地潤一 中西武尚 永松正大	
	【主事】 佐藤道文（整理担当） 五十川雄也 古川匠 長直信	
	【嘱託職員】 五十川慎也 井口あけみ 上原翔平 奥村義貴 佐藤孝則 仲町憲治 羽田野達郎 羽田野裕之 碇田智美 廣瀬育子 三嶋桂司（整理担当） 山下朋紀 山本哲也 若林善満	

第Ⅱ章 立地と環境

1. 大友氏の除国

天正15年（1587）、豊臣秀吉により九州は平定される。大友宗麟の子、義統（吉統）が豊後一国安堵を命ぜられ治めていたが、朝鮮の役での失態により秀吉から勘当され、領地を没収されることとなる（1592年）。その後、豊後は秀吉の直轄領（太閤蔵入地）となった。

2. 府内城の築城

早川長敏の後任として、石田三成妹婿福原直高（当時臼杵城主）が府内に入る。彼は、府内入府の際、秀吉から「豊府（府内）は（豊後）国中の咽喉也、汝要害を見立改築すべきの由」を命ぜられたと云われる。

福原直高は、大分川の河口で舟荷を積み下ろしていた荷落を築城地と決め、工事を始めた。建築資材の調達は大分郡の他、土佐国にも求められた。また、石垣等に使用される石材も高崎などから運ばれただけでなく、他国の商船にも運搬させる。

慶長4年（1599）には二ノ丸の東三重櫓、三ノ丸家臣屋敷もほぼ完成する。地名の荷落の「落」を忌み、「荷揚」と改め、新城は「荷揚城」と名づけられる。

3. 竹中氏による府内城・城下町の建設

福原直高の改易後、早川長敏が再入府するが、早川氏は関ヶ原の合戦で西軍に味方したため徳川家康から取り潰される。合戦の後、府内藩主となつたのは豊後高田の領主であった竹中重利であった。竹中重利は、秀吉の軍師竹中半兵衛の従兄と伝えられる。

竹中氏は入府後すぐに城郭の増築に取り掛かる。慶長7年（1602）に天守、櫓、武家屋敷が完成すると、城下町建設を行う。東西10町（約1,100m）、南北9町（約1,000m）、その中を40余りの町に区画し、外堀と土塁で囲まれる総構えの城下町であった。

【特徴など】

- ・大友時代の府内から町屋や寺院を移した
- ・城下町の一部は大友時代の町域と一部重なり、城の東エリアは旧時代の施設を利用している
- ・城の西北に商船出入りのための堀江を開き、「堀川」と名づけ、堀川入口に「京泊」と称す港を設置する（慶長12年：1607）
- ・笠和口から南へ通じる道路をつくり、大道の掘り切りを切り開く
- ・町屋の外側に外堀を掘る（慶長10年：1605）
- ・府内城は北方が海に面した平城で、天守を主とした本丸を中心に水（海水）堀で東丸、西丸（二ノ丸）を配し、さらに水堀で仕切り、北側に山里丸、北丸を設ける。城の西、南に三ノ丸（武家屋敷）を配置し、総構えとする。城下への入口は、東口・北口・中島口の三箇所。

福原氏により城・城下町の土台が築かれ、竹中氏によって、福原氏段階の城下が発展し、現在の大分市街地の基となる府内城・城下町が完成する。

4. 街なかに残る、江戸時代の面影

【松栄神社】

<祭神> 大給近正（大給松平家の氏祖）とその子一正・・・・近正大明神

明治維新後、旧藩士一致崇敬の神社とすることとなり、明治2年「松栄神社」と改称。松平一家の靈廟から一神社格になり、やがて村社格に昇進後、郷社に。

<堀川町に遷宮>

一廟神は一神社と変わり旧藩士、旧領民の景仰の象徴として旧船奉行跡地に明治18年に遷宮した。(現在、銀行敷地内にある大樹はこの時の植え込みといわれる)

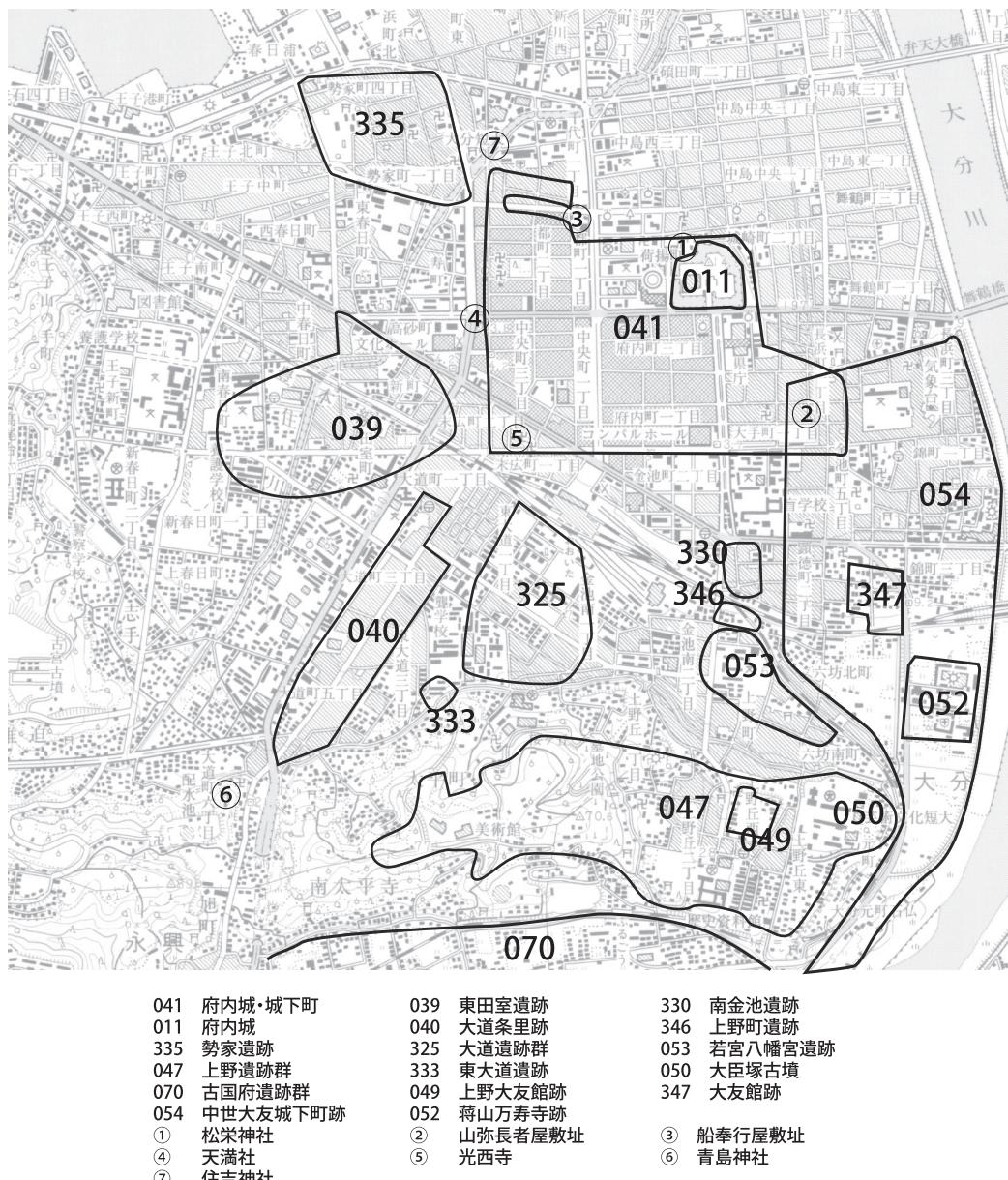
<旧山里に還宮>

増沢氏が春日浦の旧御茶屋跡に移転するに及び、近正公の靈廟が有った地に還り、現在の松栄神社となる。

【青島神社】

明治14年に府内商人橋本五郎左衛門の功労に報いるために、町民が浜の市杵原社御旅所内に小さな祠を建て、明治23年に農商務大臣品川彌次郎来県の際、青島神社と称し、扁額を奉納した。現在地に移ったのは明治41年7月。橋本五郎左衛門は自ら琉球に渡り、蘭草の苗を持ち帰って栽培し、加工して豊後表を作り上げる。そして兄の八左衛門は豊後表を実用向けの大衆品として普及させる。

* 豊後表・・・七島蘭で織った畳表のこと。七島表、琉球表、青筵など呼称は多い



第2図 周辺遺跡・文化財位置図 (1/25000)

【京泊新港】

正徳年間（1711～1715）に築港したものを古升形という。その後、文化3～4年（1806～1807）にかけて、北側に新升形が築港された、土砂の堆積に悩まされ続けた堀川京泊の代用港であった。現在残るのは新升形で、小船が利用している。

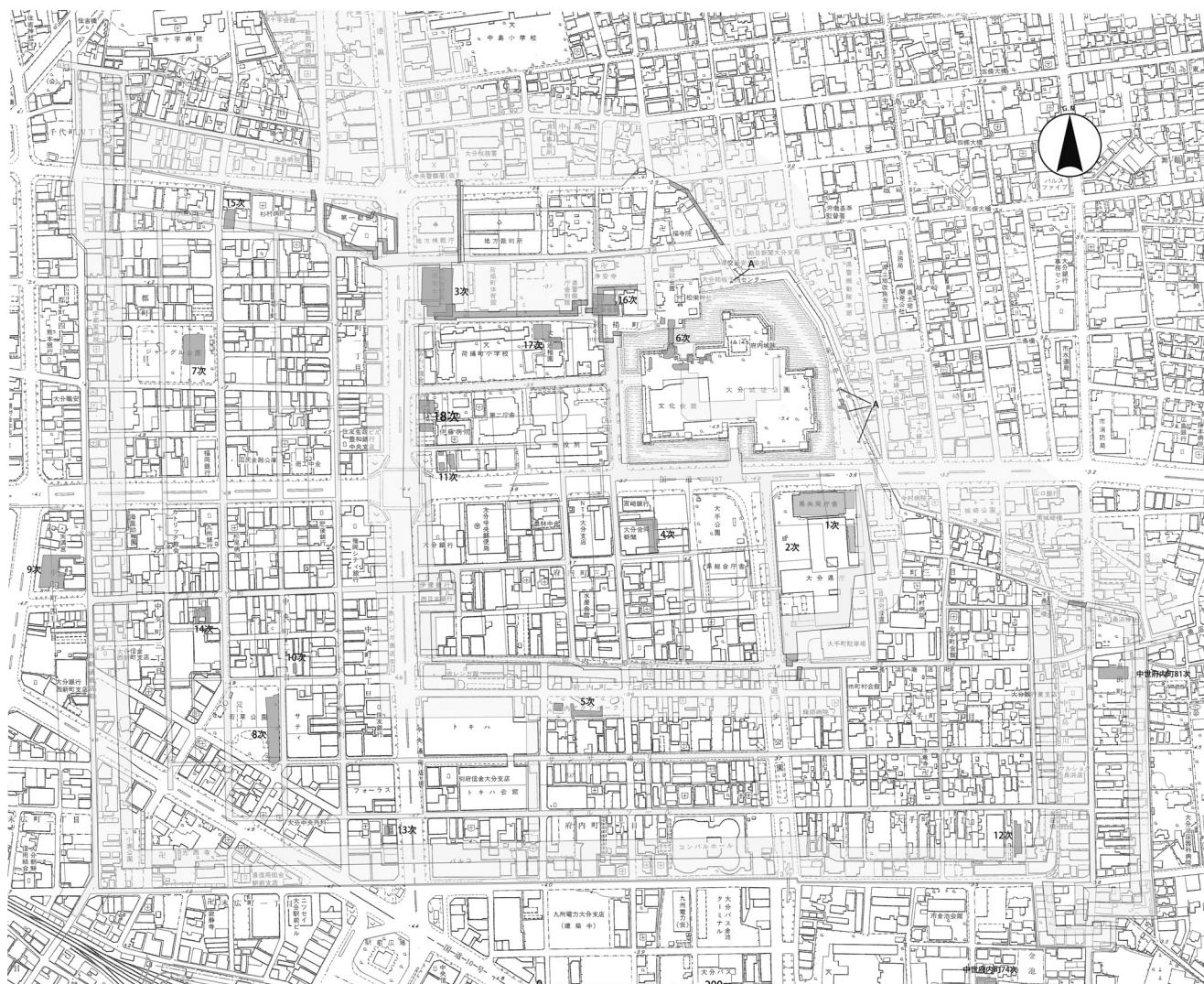
【山彌長者の屋敷跡】

山彌長者こと守田三弥之助は、府内町の万屋町にいた大富豪で、井原西鶴の『日本永代蔵』卷三のモデルとも云われる（「國に移して風呂金の大臣」）。

邸宅は豪華広壯で、万屋町と胡町の2町にまたがり、座敷は硝子貼り天井で、そこに金魚を飼っていたと云われる。しかし、時の藩主日根野吉明の勘気にさわり、一族とも処刑されてしまう。

現在、金池町の大智寺に山彌長者が造立した逆修塔が、金剛宝戒寺には寄進した石灯籠が置かれる。

* 参考文献 『大分市の文化財 I』（1971）
『大分市史』上巻（1955）



第Ⅲ章 府内藩の様子

第1節 江戸時代後半～終わり頃の府内藩主

今回の調査により、江戸時代の範疇で捉えられる時期の主体は18世紀後半頃から幕末にかけてである。よって、本節ではこの時期（以下、松平時代後期とする。）における府内藩の様子を簡単に記したい。

昭和30年の『大分市史』によると、松平時代後期は、5代藩主近形～10代藩主近説に至るまでとされる。

＜府内藩主＞

【松平近形】 享保8年（1723）に府内で生まれる。延享2年（1745）に府内藩主となり、宝暦4年（1754）9月、初めての紙幣を発行する。明和6年（1769）7月28日に大地震が起き、2層櫓3基が破壊される。同年8月朔日の大風雨により、川水1丈2尺を増し、75戸の家が潰れる。安永2年（1773）6月10日に没す。

【松平近傭】 近傭は宝暦4年に府内に生まれる。明和7年（1770）に府内藩主となる。明和8年（1771）2月2日、606戸の家が延焼する火災が発生する（柳町より失火）。寛政11年（1799）8月朔、神祠を牧村松榮山に作り、近正大明神と称す。天保11年（1840）2月16日、江戸で没し、傳通院に葬られる。

【松平近義】 近形の第3子。文化元年（1804）に藩主となるが、同4年（1807）8月27日、駿州岡部で没し、傳通院に葬られる。

【松平近訓】 近傭の第2子。文化4年に藩主となる。天保2年（1831）に隠居し、嘉永5年（1852）3月20日に江戸で没す。傳通院に葬られる。

【松平近信】 天保2年に藩主となり、同12年（1843）に府内で没し、淨安寺に葬られる。

【松平近説】 天保12年に最後の府内藩主となる。隠居中の閑山（近訓）の後ろ盾の下、岡本主米、廣瀬久兵衛らに財政改革を任せ。学業振興にも力を注ぎ、日田から廣瀬淡窓を呼び、また安政元年（1854）には初めて医学校を興す。医学校は慶応元年（1865）に唐人町に移り、稽古館と称す。安政元年11月の地震により校舎は崩れるが、同2年（1855）に再建する。同4年（1857）12月、北郭に遊焉館が落成する。慶応元年12月、王政復古により幕府職を辞す。

第2節 府内藩で起きた主要な出来事など

1. 城詰米の見分と巡見使の来見

この間、府内藩では城詰米の見分や幕府からの巡検使の来見など大きな行事が起きている。

城詰米の見分は享保17年（1732）の大飢饉の年と宝暦3年（1753）に行われている。前者の見分においては、藩の蔵に城詰米が無かったことから、府内商人や周辺各村、他藩に依頼し、何とか3000石の米を準備することができた。後者の見分の際、年貢上納督促を各地に差出、見分詳細の打ち合わせのため日田に役人を派遣している。協議では藩の現状等を報告し、様々な根回し等を行った結果、府内は九州見分の最後とするよう日程変更が決まり、城詰米の準備の時間を得ることができた。

江戸時代、將軍の代替わり毎に幕府から巡見使が派遣され、各地を視察するのが恒例であった。寛文7年の令によると、巡見使の責任者は若年寄、その若年寄の支配下にあった使番を1名正使として、小姓番と書院番をそれぞれ副使として1名ずつ派遣することになっている。旗本の目付もしくは目付格であったことから、諸藩にとつては圧力となり、その接待や対応は大いに襟を正すべきものであった。

『豊府指南』には、寛文7年（1666）、天和元年（1681）、宝永7年（1710）、享保2年（1717）、延享3年（1746）、宝暦11年（1761）、寛政元年（1789）、以上7度巡見使が来た記録が残る。巡見使一行の人数であるが、寛政元年の際は上下総勢98人であったことから、100名前後であることが想定できる。寛政元年の際の宿舎は、伊丹屋（万屋町か）、俵屋（米屋町）、光西寺が利用された。これだけの人数の止宿や賄い等は藩民が負担し、そ

れは莫大であった。幕府から幾分の費用負担はあったが、殆どは藩や民衆にとって痛みを生じさせるものであった。ちなみにこの伊丹屋であるが、貝原益軒の『豊国紀行』によると山彌長者が処刑された後、その屋敷に伊丹屋なるものが住むようになったとの記述がある。伊丹屋は、藩の接待場所として使用され、府内藩の御用達とされていたが、その伊丹屋と同一ではないかと考えられる。現在、大手町2丁目界隈に山彌長者の屋敷跡なる石碑が建っているが、実際屋敷跡がその場所であったかは定かではなく、今後の課題事項として挙げられる。

2. 困窮する府内藩の財政

府内藩の財政逼迫は、17世紀後半段階から始まっていた。城米の見分の際に町人からの協力を得たことで何とか解決することができた。それ以前には、府内及びその周辺で活躍する19人の商人に御用銀100貫目の供出を求めており、家臣に対する給与扶持米についても藩から支出が厳しくなったため、有力商人に引き受けさせている。藩の財政の中でも大きな負担となっているのが江戸藩邸への仕送りである。これらについても、藩民が支援している。安政2年（1855）の4月～8月までの、江戸月送り金1ヶ月250両宛て、道中金600両を府内商人16名が申し付けられている。しかし、度重なる財政支援で府内商人も厳しい状況が生じたため、府内藩は近藩や大坂の銀主に頼ることとなった。

このような状況下で、藩は文化5年（1808）に借財整理に着手する。これ以前にも、宝永年間に整理を行っているが、さらに返済資金や借財として、町や郷中に對し借用銀の差出を命じており、それは町民や村民にとって大きな負担であった。

3. 府内の商人

府内藩の城詰米の一件や借財整理で、城下町にいる商人たちは東奔西走し、様々なネットワークを駆使し、日田や大坂、江戸の商人らから資金を調達していた。その整理のために背負わされた負債により、潰れる商家も現れることとなる。

菊屋仁兵衛（西小路町）、松屋彌七郎、梅屋喜兵衛（塗師町）、粕屋長兵衛（東町）、俵屋又右衛門（米屋町）、升屋市兵衛、橋本屋喜左衛門（上柳町）、播磨屋利右衛門（京町）、櫻屋助右衛門（室町）、八百屋八右衛門（竹町）、大津屋善四郎（上紺屋町）、橋本屋八左衛門（櫻町）。

上記の人々は、主に松平府内藩時代に活躍した府内商人である。これらの中で、櫻町の橋本屋八左衛門は、江戸中期以降、豊後の特産となる豊後表（琉球表）の普及に努め、最初に大坂商人と取引をした人物である。彼の弟橋本五郎左衛門は、七島蘭の栽培・加工にかけ、豊後表を作り上げた人物で、現在では商売の神として大分市大道の青島神社に祀られる。

文化7年（1810）、伊能忠敬が「大日本沿海與地図」作成の測量のため府内にやって来た際、櫻町の橋本屋八左衛門邸を止宿場所として活動を行う。『測量日記』に「家作佳にして大に広シ」と書き記していることから、広く立派な屋敷であったことが想像できる。橋本屋敷跡は大分市中央町2丁目の一画と推定される。

府内商人の屋敷は、藩の接待場所や幕府要人の宿舎として度々使用されており、その度に商人たちに負担は大きくのしかることになる。

府内藩は積極的に商業・産業の育成・発展に政策を実施したとは言い難く、上記に掲げた商人たちに追随していく様であり、藩の運営は府内商人や職業人たちにより支えられていたといつても過言ではない。

4. 学業の振興

府内藩学校として正式に存在したのは采芹堂であるが、それ以前から学問所として機能する施設は存在していた。寛政2年（1790）、是永分会安孝という人物が学問所の教授として任用された（久多羅木儀一郎『大分市の

文化財 I』）ことで、本格的に藩学が開始され、寛政 4 年（1792）11月からは、毎月 7 日・12 日・24 日の 3 日間、論語の講義が催された。寛政 7 年頃（1795）になると稽古場学問所で講義が行われる。しかし天保11年（1842）の火災により、施設も被災し、仮舎で運営されていたようである。その後、稽古場は天保13年山彌屋敷跡の西側に新築され引越しするが、学問所は仮舎のままであった。しかし、弘化 2 年（1845）4 月に、三ノ丸内に新たな学問所が落成し、藩主松平近説、隠居松平閑山（近訓）が列席する中、竹内量平（淡軒）が講義を始め、10 日には開講記念事業とも見られる講義が、広瀬淡窓により実施される。来府の際、淡窓は堀川町酢屋平右衛門宅を止宿としている。学問所は嘉永元年（1848）から采芹堂と命名される。

采芹堂は安政元年（1854）の大地震により大破したので、儒官大渡周作の屋敷が仮学舎として利用された。安政の大地震により藩主松平近説が仮寓していた北ノ丸から東ノ丸に移ったことで、そこに文武の学問所が新築され、遊焉館と名付けられた。その後、慶応元年（1865）4 月、遊焉館は中島（知事公舎あたりか）に移転し、運営されることとなる。

5. 仙石橋の架け橋

東の坊ヶ小路渡し、西の仙石橋は府内城下町の出入り口として機能していた。仙石橋については『豊府指南』に記されている。

天正14年に仙石権兵衛を饗應するために新たに土橋をつくり、これが仙石橋と名づけられる（但し古くから土橋があったとも云われる）。承応 2 年（1653）に木橋と成り、堀川町幸松與右衛門らが渡り初めをする。その後度々修造が行われ、寛延 3 年（1750）に再び土橋と成る。宝暦 3 年（1753）に石橋となり、塗師町の梅屋喜兵衛が渡り初めを行う。『府内藩日記』にも元禄 4 年（1691）の架け替えの記録があり、室町の櫻屋助右衛門らが町人の中から渡り初めをする者として選ばれている。助右衛門は渡り初めに出る際、東丸の玄関に出頭し拝謁し、御樽 1 荷と鯛 5 尾を頂戴したとある。宝暦 3 年の際も同様で、仙石橋の改修・付け替えは町民にとって注目されることであったことが分かる。

* 【江戸時代の府内藩について記す代表的な史料・文献】

『府内藩記録』466冊 乙・丙

府内藩政史料のうち検地帳・物成帳・御金銀勘定帳などの藩財政関係史料と日記以外の史料。承応 3 年～明治13年までの記録を収める

『府内藩日記』437冊

松平氏の府内藩政史を知る根本史料。天和 3 年～明治 3 年にわたり藩役所が書留とめた年毎の御用留日記を中心とし、郡代日記・勘定所日記・江戸藩日記などを含む。

『雉城雑誌』14冊 阿部淡斎著

府内藩の儒学者阿部淡斎の編集といわれる。本書は、大友氏22代と府内藩主の略伝、府内藩領内の寺社・名所旧跡などの由緒を記す。

『豊府紀聞』（豊府聞書）7冊 戸倉貞則著

元禄11年に成立。大友家22代から江戸時代前期の府内領主である早川氏・福原氏、府内藩主竹中氏・日根野氏の事績について述べる。近世初期の府内の領主について記述した数少ない史料。

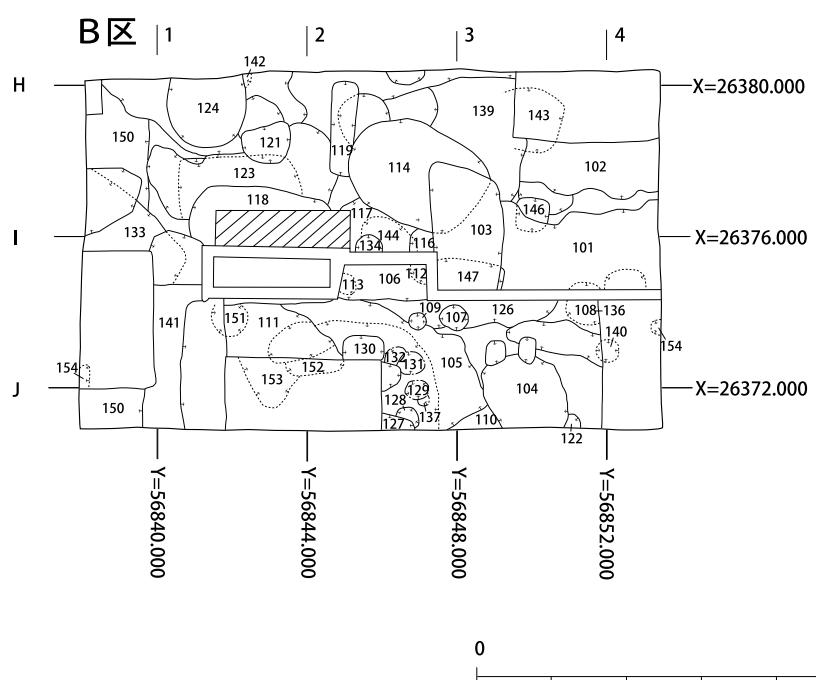
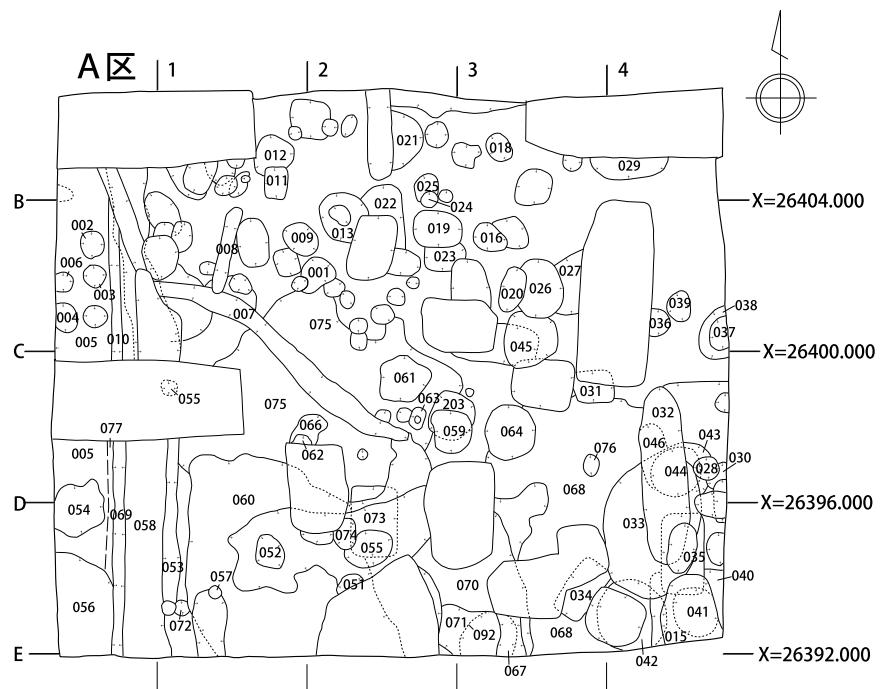
『豊府指南』1冊

延享 3 年に成立。府内城下町の家数・人口・職人軒数、町の諸施設、町人の負担などを中心に府内藩領の人口・家数などを書き上げる。延享3年の幕府巡見使來訪に際し、回答書として作成されたと考えられる。

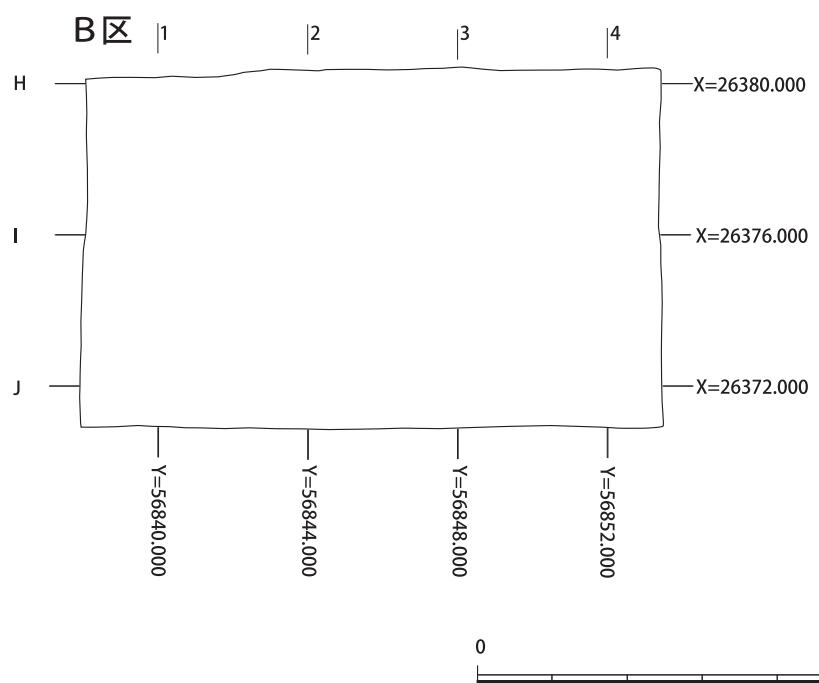
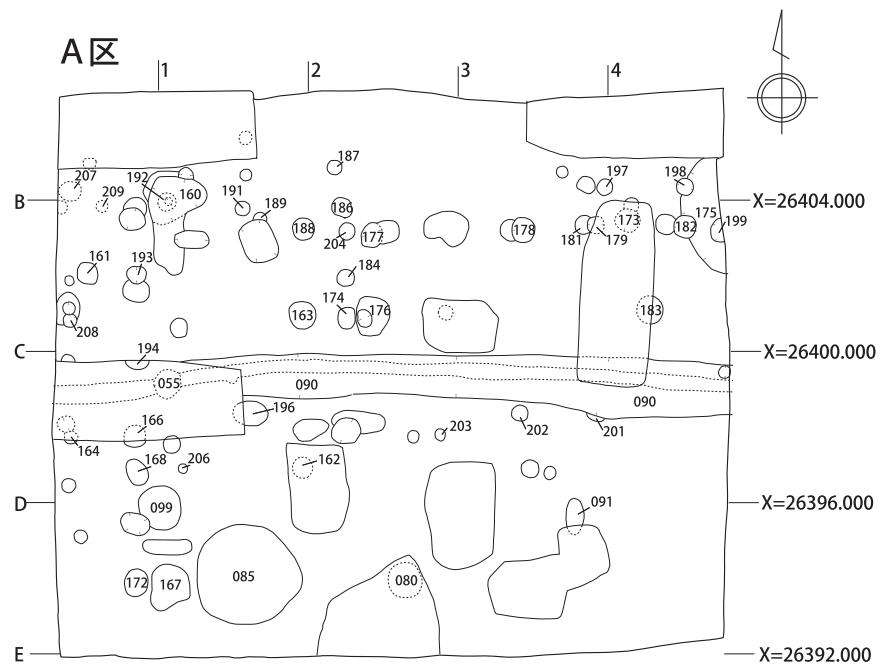
『大分市史』2冊 昭和30年・31年刊

上巻は地質時代～藩政時代（府内藩日記の内容を基に江戸時代の府内藩の様子を記す）、下巻は市勢史・経済史・文化史・教育史・切支丹史・社寺志・民俗志・人物志について詳細な説明がなされる。

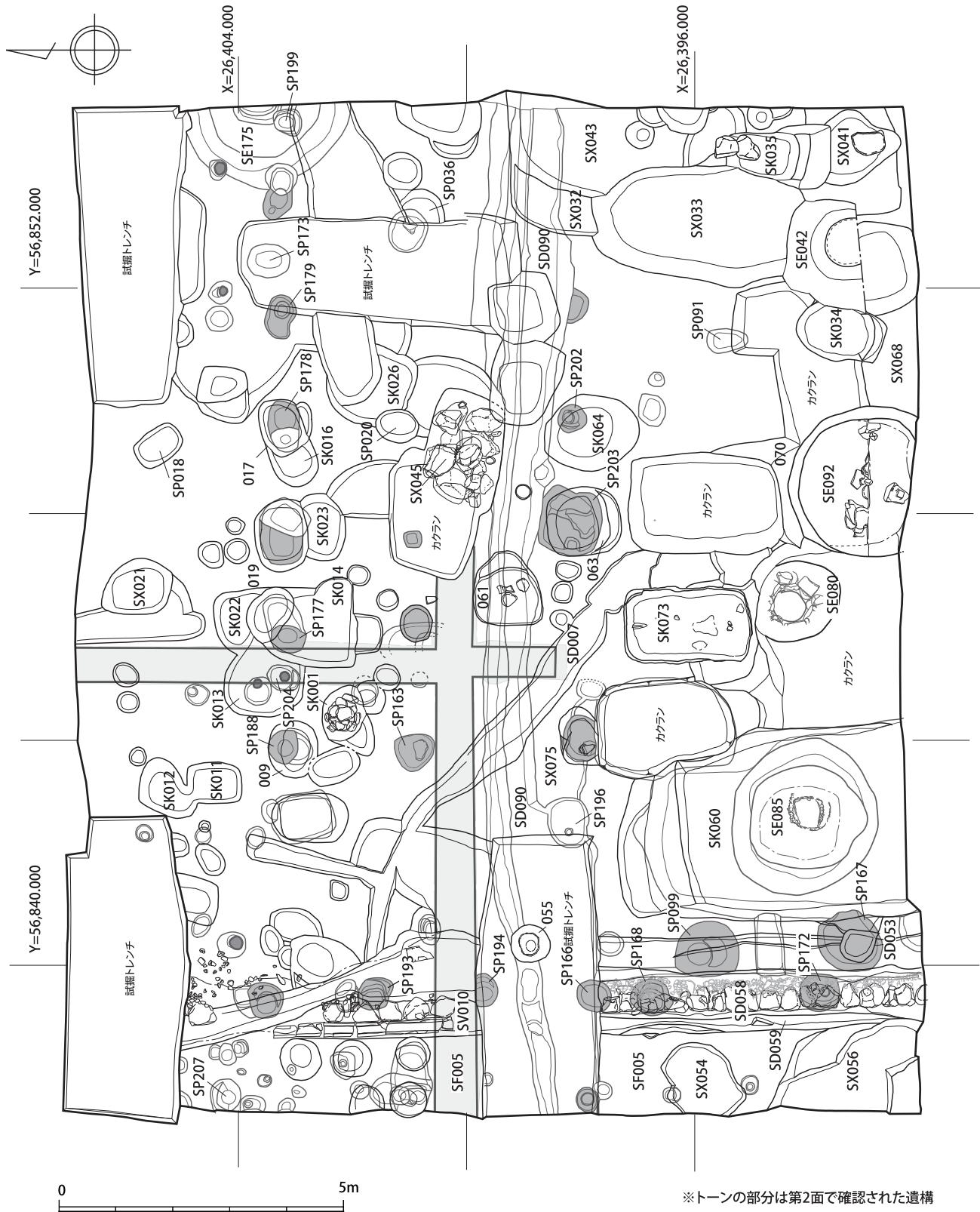
昭和30年以前の大分市の情報が書かれており、現在に消滅した遺跡や自然、まちなみを把握できる貴重な史料である。



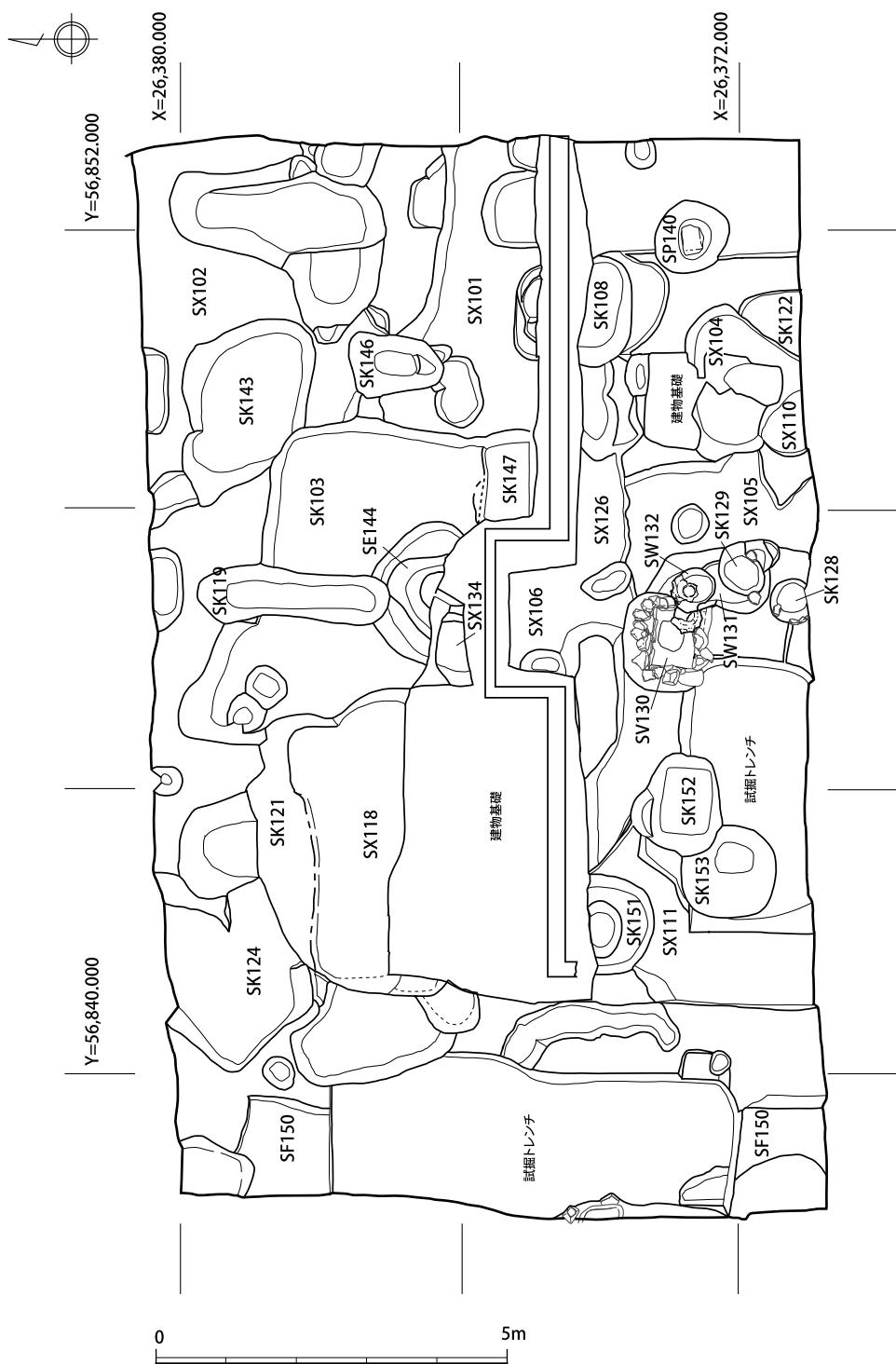
第4図 第1面 A区B区遺構略図 (1/200)



第5図 第2面 A区遺構略図 (1/200)



第6図 A区 遺構全体図 (1/100)



第7図 B区 遺構全体図 (1/100)

第IV章 調査の成果

第1節 調査の概要

今回の調査は、調査区を2つに分けて実施しており、その結果、それぞれの調査区で遺構の内容が異なっていることが判明した。まず、敷地北側のA区では、掘立柱建物跡、井戸跡、道路状遺構など生活の表空間的様相が濃い。南側のB区においては、便所状遺構、大型の廃棄遺構などが顕著で、生活の裏空間として使用されたエリアであることが想像できる。

調査にあたっては、事前に決定した調査対象区に、日本座標系（国土第II座標系）の基準座標を使用し、土量測定用の10mメッシュを作成し、それを基準として実測図作成用の4mメッシュを組んだ。

調査は、まず重機による機械掘削を行い、それにより表土並びに近代の盛り土（戦災後処理層等）を除去した後、人力掘削を開始した。

A区においては一部近世後半段階の火災処理土坑を、戦後の火災処理層と誤認し重機で掘り起こしてしまっている。その埋土中には瓦類が多数含まれていたことを記しておく。

実測図に関しては、遺構検出後まず1/100スケールで遺物取り上げ用の略測図を作成した。掘り下げが進むにしたがって、報告書に掲載必要と判断される遺構は1/10・1/20スケールで個別実測を行った。断面図及び見透し図の作図は精度を保つことを重要視し、原則現場で行っている。遺構全体図は1/20スケールで現場の進捗状況に合わせて実施した。また、記録作成に関しては、掘削業務の委託先である九州文化財リサーチの方々に多大なるご協力をいただいた。

第2節 基本層序

A区では、大きく3回の整地土が確認される。最も新しい整地は、駐車場に伴うアスファルト及び砂利を除去した後に現れる（整地1）。この暗茶褐色土には、角礫やコンクリート基礎の断片などが混入していることから近代以降の整地土と考えられる。この下位には水平に堆積する土層が観られ、その状況から埋め立て・造成によるものと推測される（整地2）。整地2を除去すると、最も古い段階の整地土層が検出される（整地3）。整地3は、調査時に第2面として位置づけ検出した遺構群を埋め立てるものである。この第2面の遺構群には建物跡や溝状遺構などがあるが、当初は基盤層（砂層）の上位に堆積する暗茶褐色土を近世段階の整地と判断し、掘削後に砂層から検出されたと認識していたが、各土層の検討を行ったところ、暗茶褐色土から掘り込まれていることが分かった。検討結果をもとに、改めて第1面で見つかっている遺構の分布状況を確認したところ、特に掘立柱建物の柱穴の配置と土坑等が重なり合う様子が窺え、よって、第2面として調査を行ったものの大部分は1面上に帰属する可能性が極めて高い（報告は、第1面・2面として行っている）。

A区の中央から南側を中心に広がる暗茶褐色土であるが、古代の井戸が同層を基盤として造られており、このことから長い時間をかけて形成された自然堆積層（遺物包含層）と考えられる。調査区の中央～北西にかけては土質が異なっており、この地点は部分的な整地が行われたとも判断される。また、表土掘削後に近世段階の京都系土師器がほぼ口縁を上に向か出土した。何らかの意図のもと置かれたと推測されるが、そうであれば遺物の検出面より上位の整地に伴うものであろう。但し、本調査区内においては、中世末から近世前半（遺物が見られるが）の整備等に際しての明確な整地は検出されなかった。

B区では近代の整地土を除去した後に、大型の廃棄遺構等が重複して穿たれた状況が看取されたが、面的に広がる整地層は認められなかった。遺構群はほぼ砂層もしくは砂質土を基盤として構築されていた。

第3節 A区の遺構と遺物

A 第1面の遺構

(1) 井戸跡

SE042（第8図） 調査区の南東部分で確認され、遺構の約1/2が区外へと広がる。平面形は径約2mを有する円形を呈し、深さは1.7m以上を測る。検出された場所が、調査区の南壁沿いであることから安全性を考慮し、完掘には至っていない。現段階の最下層において、井筒プランが認められ、内には粘土層が堆積していた。但し、井戸枠などの施設は認められない。土層観察から掘り返し痕跡が見られるため井戸廃絶後、土坑等の別遺構が形成されたものと推測される。

SE080（第8図） 調査区中央南側付近で検出される石組み井戸で、乱積みされた石組みの一部には五輪塔の地輪部分が転用される。井筒部からは結桶の部材が出土している。構造等から判断し、中世段階のものと推測される。

SE092・SX070（第8図） 調査区南側中央付近で検出され、SE042に隣接して造られる。規模は径約2.6mを有し、平面円形を呈す。掘り下げを進めると、内部から人頭大もしくはそれ以上の礫が大量に出土すること、それが壁面沿いに位置することから、安全性を考慮して深さ約1.4mの部分で掘削を中止している。礫の量から判断すると石組み井戸であった可能性が考えられる。石組みの中には五輪塔の火輪が混入していた。また、上位には掘り返し層が認められ、井戸廃絶後のごみ処理等の遺構（SX070）と判断される。土層を観ると東から西方へと瓦等を廃棄した可能性が高い。

(2) 道路状遺構・石列・暗渠遺構

SF005（第9図） 調査区西側に帯状に確認でき、B区まで続く。検出幅約1.85m、検出長約23m（B区と合わせて）を測る。その構造であるが、道路として使用されていた5・6層は砂質を主体とし、非常に硬化している。また、砂質土と硬質の茶色土がセットになるものと思われ、大きく2セット見られることから1度造り替えが行われている。最上位の暗茶褐色土は近代の便所甕が見られるなど生活エリアとして使用されていた可能性が高いことから、近代以降の整地土と思われる。

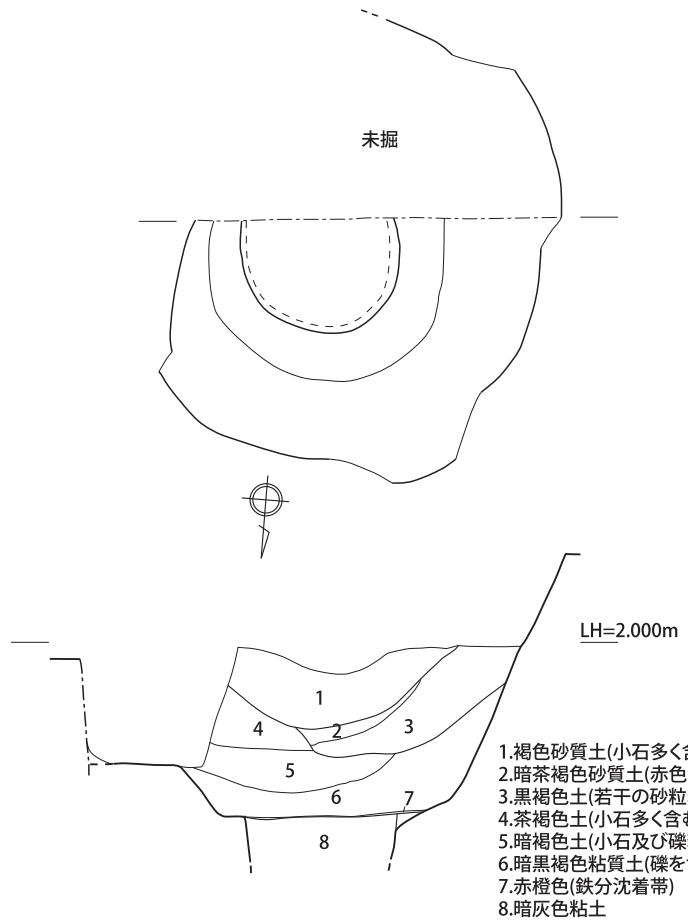
その時期であるが、道路は19世紀以降に構築されたと推定される。最上位の整地土についてであるが、出土遺物から19世紀後半以降に造成されたと判断され、明治6年（1873）に中・外堀が埋め立てられていることから、この頃に行われた整地ではないかと考えられる。

SV010（第9図） 道路状遺構に沿って形成される。石列は人頭大もしくはそれ以上の大きさをもつ四角形に近い形状の礫を西側（道路側）に面を揃え、上面は平坦になるようにして並べられていた。石積みは基本1列で、高さ調節のためか、一部でやや小振りの礫が重ねられていた。また、部分的に礫には三和土が付着しており、これは、礫同士を固定するための接着剤的な役割を担っていたものと思われる。因みに、検出した段階では石列上位には砂利石が帶状に広がっていた。周辺に残る土壠の様子から見て、SV010は土壠の基礎部分に該当するものと考えられ、本来はもう一段もしくは二段の石積みの存在が想定される。

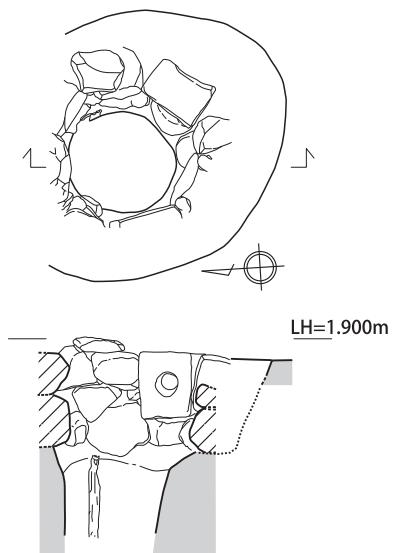
石列北側において、凝灰岩製の暗渠が存在する。暗渠は上下組み合せ式で、出土したものはその下位部分で断面はU字状を呈している。暗渠はSF005を掘り込んでいるものの同時期である可能性も想定され、昭和時代と思われる土管製の暗渠と新旧関係が生じている。

道路と石列・暗渠の関係であるが、これらは全て同時期に存在した可能性が高く、近代の整地がなされた段階で撤去され、埋められたものと推測される。

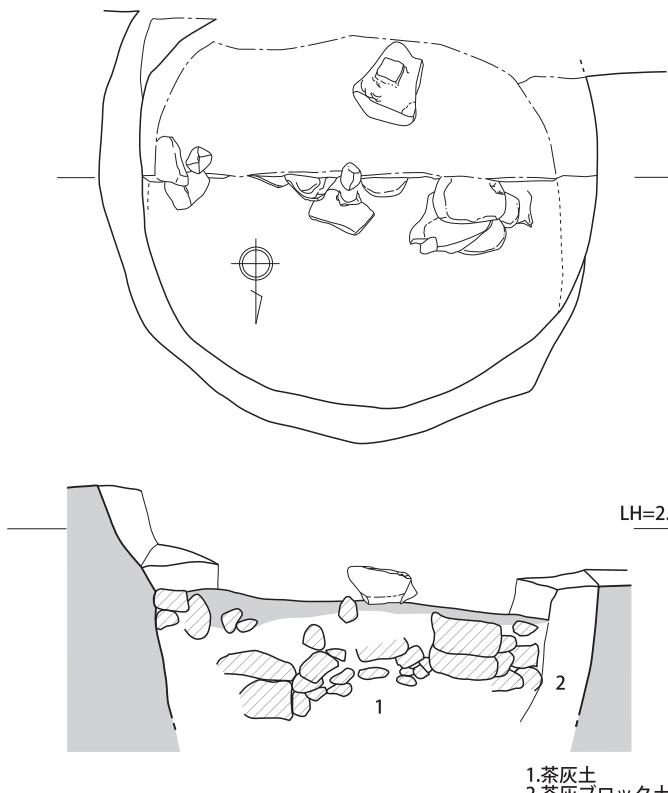
SE042



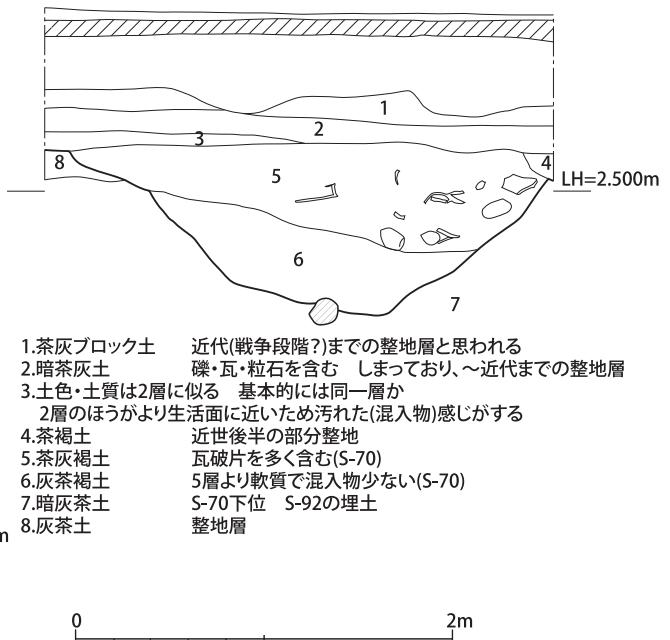
SE080



SE092

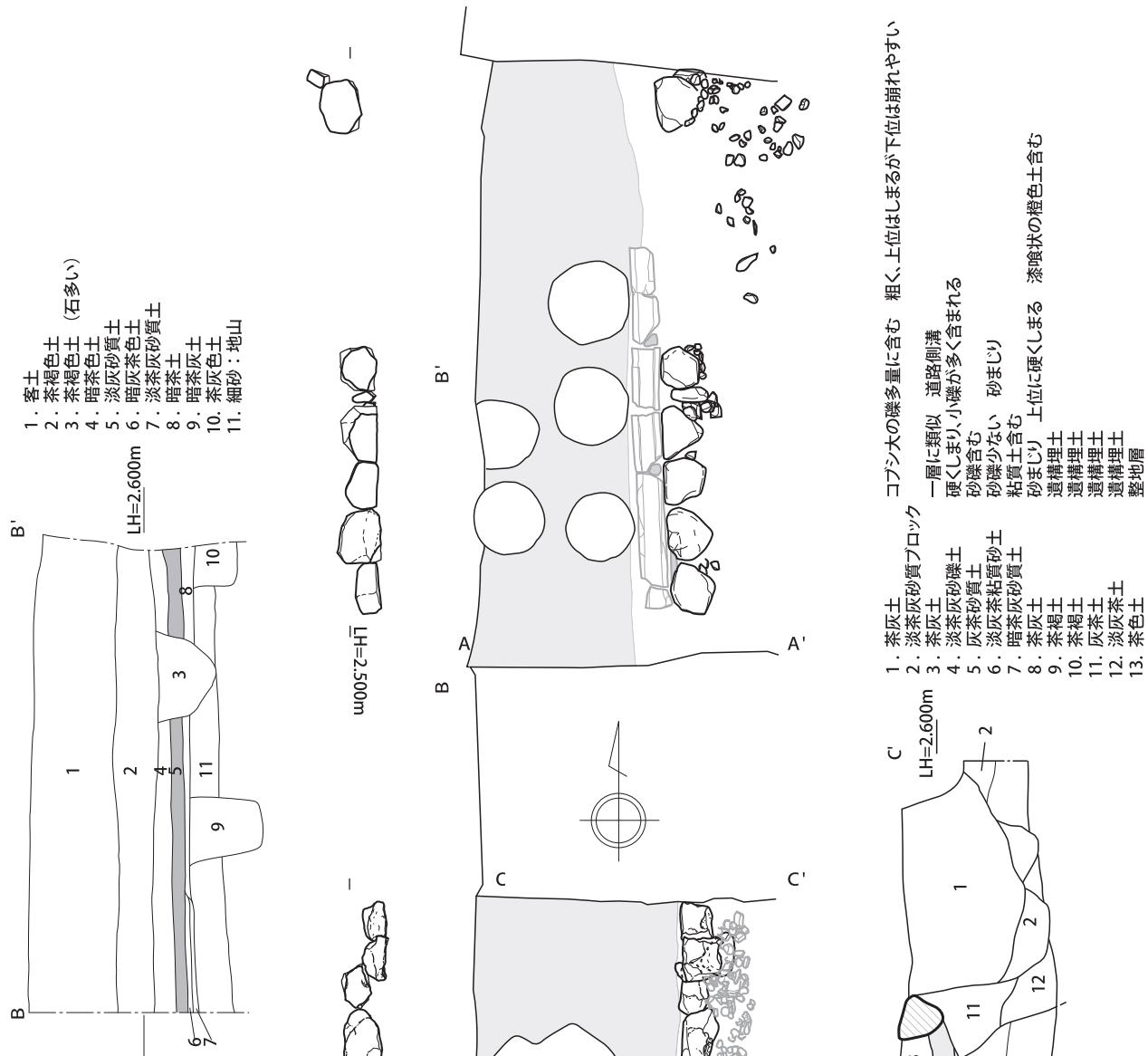


SX070

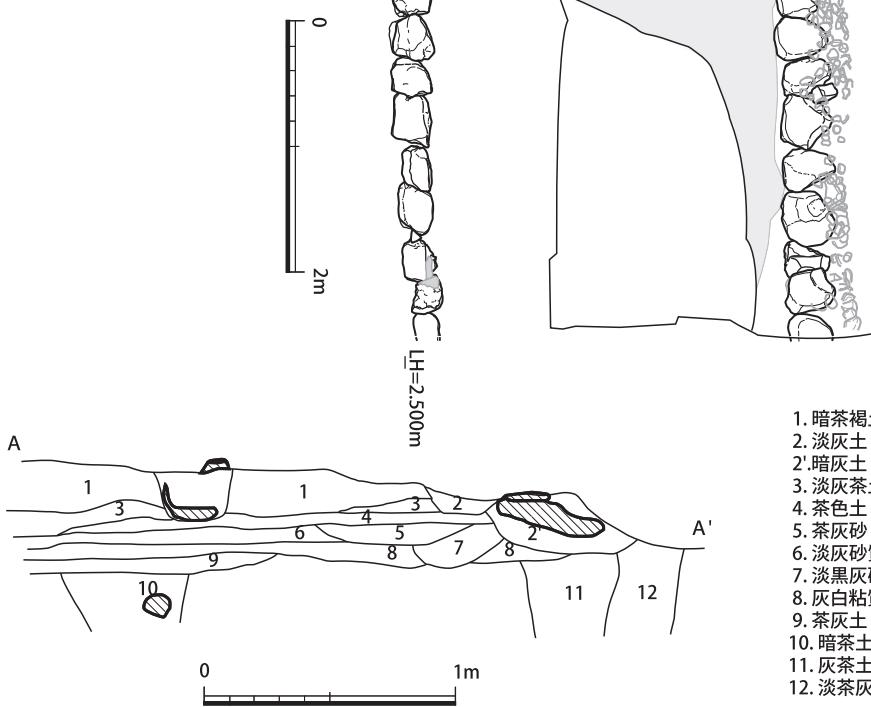


第8図 SE042・080・092、SX070実測図 (1/40)

SF005 南北土層図



第9図 SF005・SV010実測図
(1/60、土層図は1/30)



(3) 土坑

SK001 (第10図) 調査区中央付近で検出され、径約0.95m、深さ約0.4mを測り、平面円形を呈す。内部には集石が見られ、建物等の基礎部分と考えられる。

SK011 (第10図) 調査区の中央北寄りで確認され、長辺約1m、短辺約0.8m、深さ約0.3mを測り、平面長方形を呈す。

SK012 (第10図) SK011に掘り込まれて検出される。長辺約1.2m、短辺約0.8m、深さ約0.15mを測り、平面不整形ながら隅丸長方形を呈す。出土遺物には土師器壺aや椀など古代に該当するものが中心となる。

SK013 (第10図) 調査区中央、SK022を掘り込み検出される。径約1.4m、深さ約0.1mを測り、平面円形を呈す。

SK014 (第10図) 調査区中央付近で検出される。深さ約0.2mを測り、平面は円形を呈すと思われる。

SK016 (第10図) 3トレンチ付近で確認され、径約0.8m、深さ約0.2mの規模を有し、平面円形を呈す。建物を構成する柱穴になる可能性がある。

SK022 (第10図) 調査区中央で確認され、攪乱坑や別遺構により掘削され規模等は不明である。深さは約0.2mを測る。

SK023 (第10図) 調査区中央で検出され、攪乱坑、SB100を構成するSP019に掘り込まれる。径約1.2m、深さ約0.2mを測り、平面円形を呈すものと思われる。

SK026 (第10図) 3トレンチ付近で検出され、1辺約1.4～1.6m、深さ約0.25mを測り、平面一部不整形な方形を呈す。

SK034 (第10図) 調査区南東部で確認され、SE042や攪乱坑に掘削される。長辺約1.5m、短辺約1.1m、深さ約0.2mを測り、平面橢円形を呈す。

SK035 (第10図) 調査区南東部で確認され、長辺約1.8m、短辺0.8～1.2m、深さ約0.35～0.6mを測り、平面不整形な長方形を呈す。断面形はテラスが見られ、段掘り状をなす。埋土は灰色ブロック土を多く含む黄灰砂質土が主体となる。この埋土は周辺にある遺構のものと類似しており、SX033・043・044を掘り返した後、埋め戻されたと考えられる。

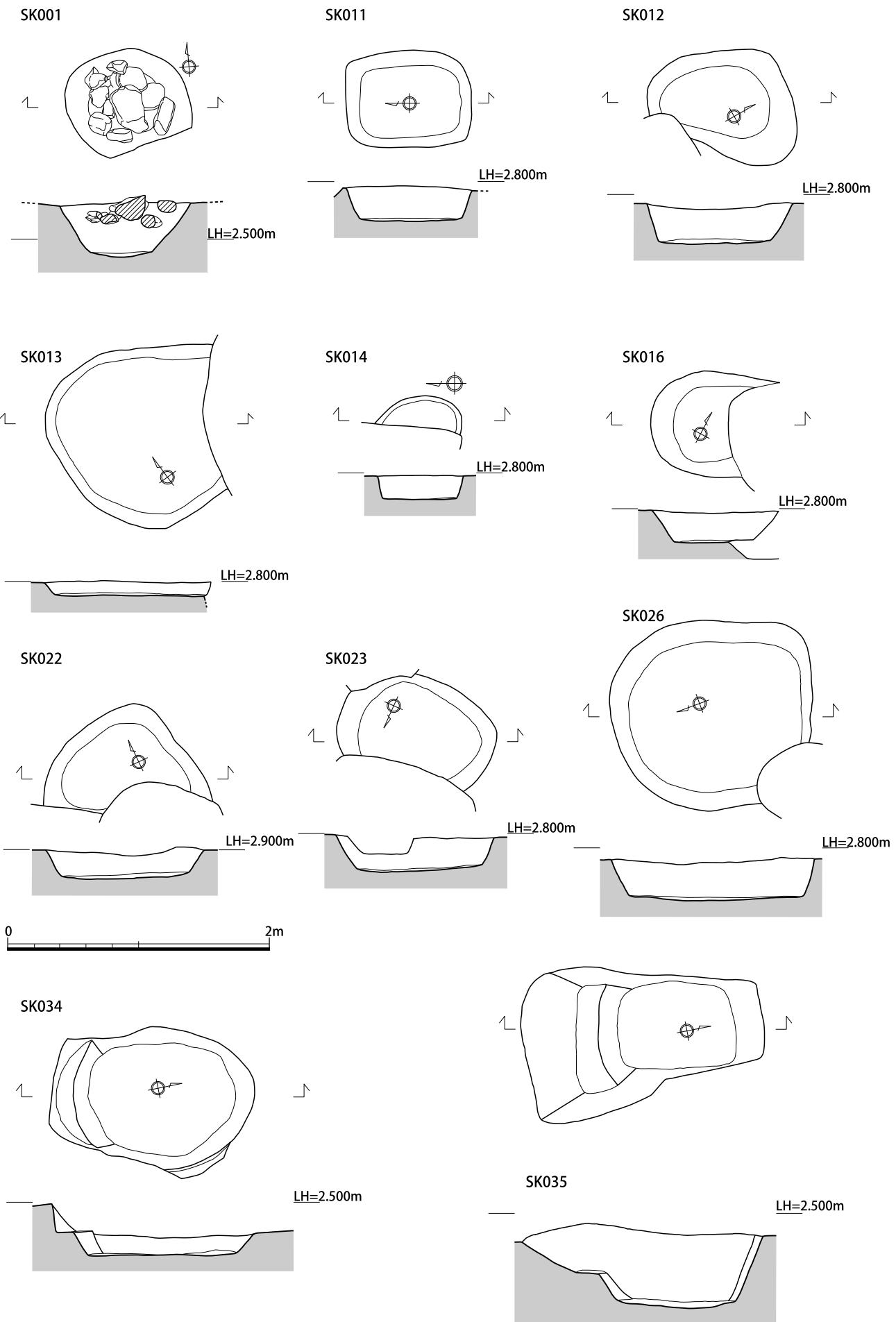
SK041 (第11図) 調査区南東隅で検出された窪み状の遺構で、人頭大程の礫が置かれる。この礫から約2.5mの距離をおいて、同規模・同じ材質のものが北側に見られ、何らかの施設を形成するものと推測される。

SK052 (第11図) 調査区中央西寄りで確認され、長径約1.1m、短径約0.8m、深さ約0.18mを測り、平面橢円形を呈す。新旧関係からSK060より新しく位置づけられる。

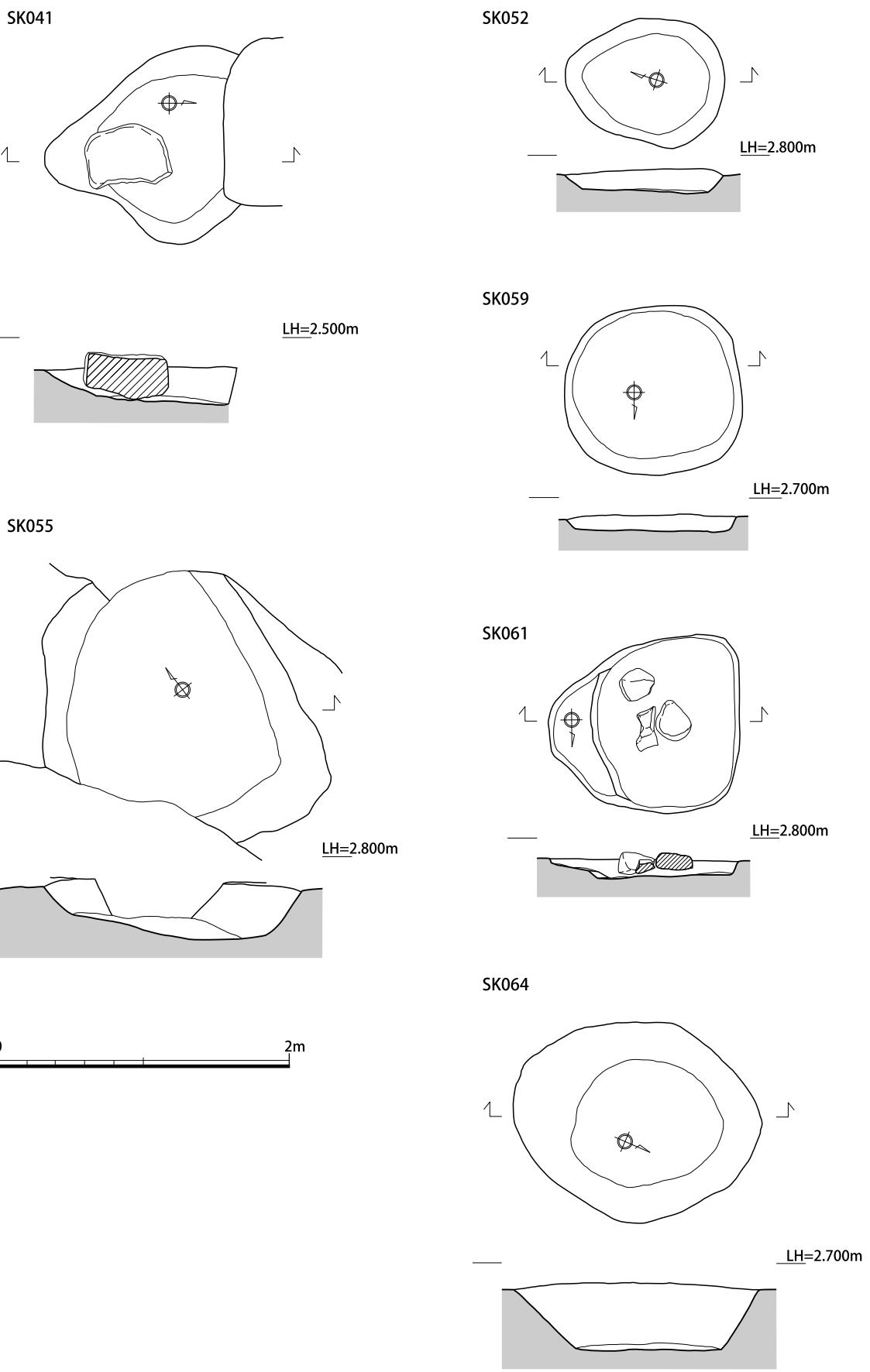
SK055 (第11図) 調査区中央で検出され、長辺約 $1.95\text{m} + \alpha$ 、短辺約1.7m、深さ約0.4mを測り、平面長方形を呈すと推測される。断面形から底面は西から東へ緩やかに傾斜する。ある程度掘り下げた段階で砂利が大量に現れ、砂利を除去すると瓦類が多く認められた。小規模な廃棄遺構と考えられる。

SK059 (第11図) 調査区中央付近で確認され、径約1.2m、深さ約0.1m、平面円形を呈す。SB100に伴う柱穴に関係する可能性がある。

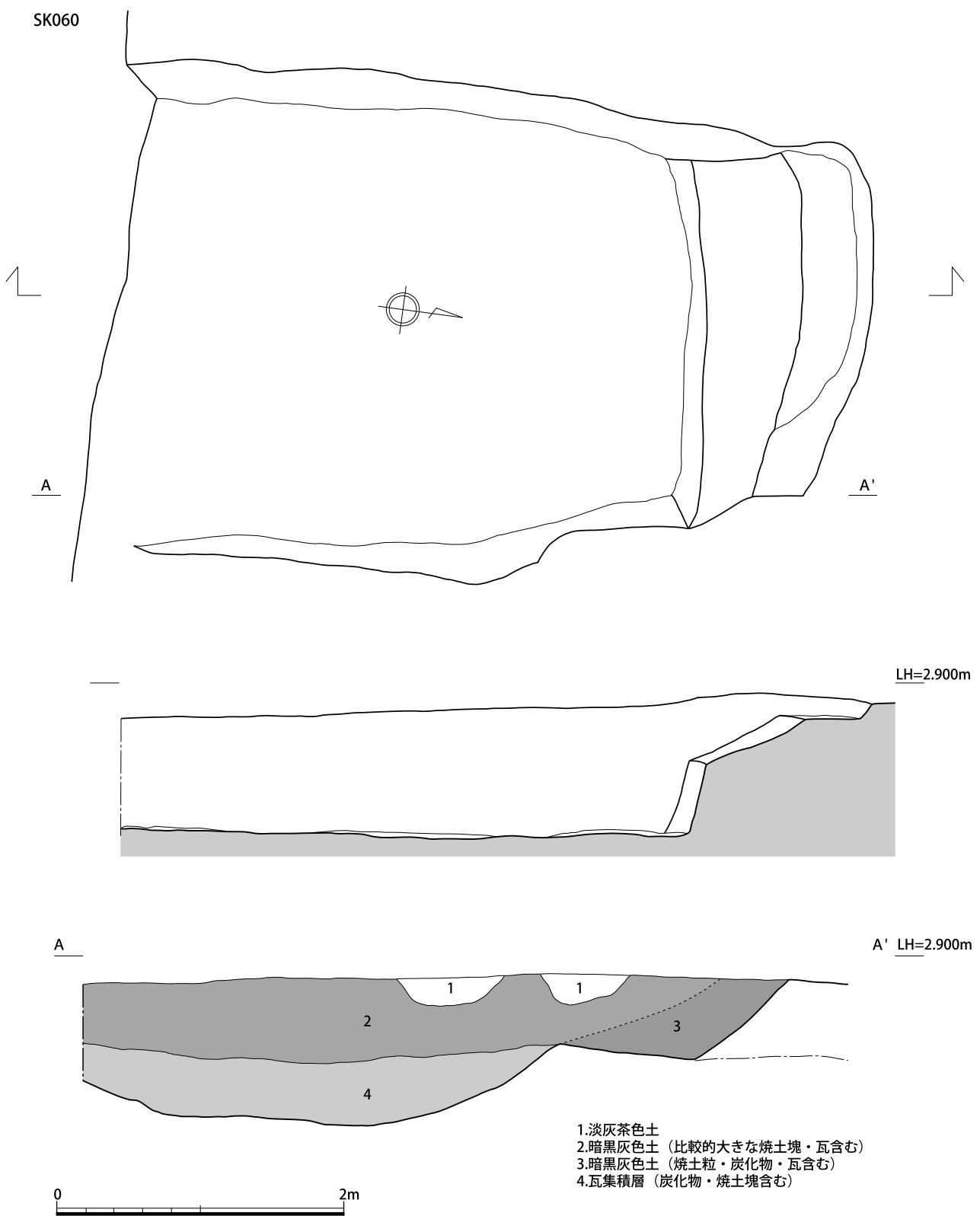
SK060 (第12図) 調査区南西付近で確認される大規模な火災処理土坑である。現況では南北約 $5.3\text{m} + \alpha$ 、東西約3.4m、深さ約0.9mを測り、平面長方形を呈す。表土剥ぎの段階で戦災処理と誤認していたことから一部攪乱坑として掘り下げを行ってしまった。よって、上記規模より大きくなることが確実であり、調査区南壁に広がる焼土層の広がりから東西が約6mとなることが推測される。土層から、土坑を掘り、瓦礫類を隙間なく廃棄処理した後、大量の焼土ブロックを含む土で埋め戻している。断面形は平坦になっているが、これは基盤が砂層であるため調査時に掘り過ぎが生じ、そう仕上げられたものである。土層図を見ると本来はレンズ状になっていたと考えられる。



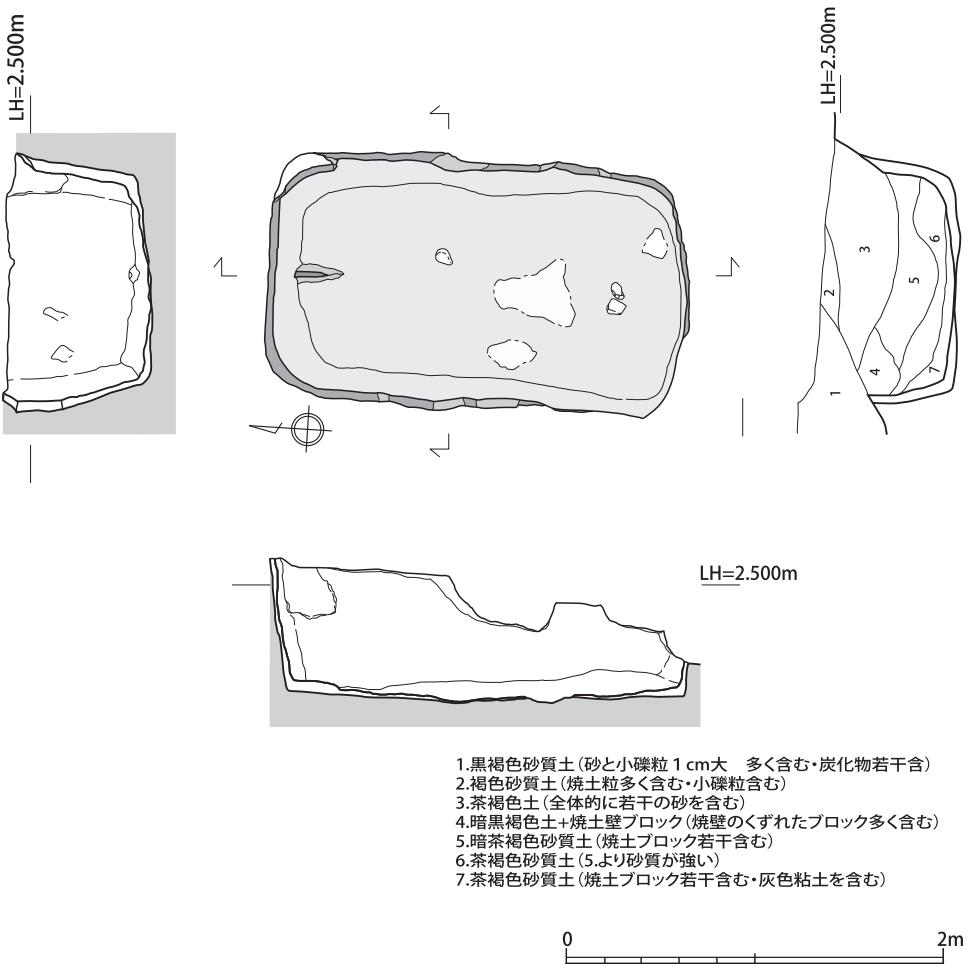
第10図 SK001・011~014・016・022・023・026・034・035実測図 (1/40)



第11図 SK041・052・055・059・061・064実測図 (1/40)



第12図 SK060実測図 (1/40)



第13図 SK073実測図 (1/40)

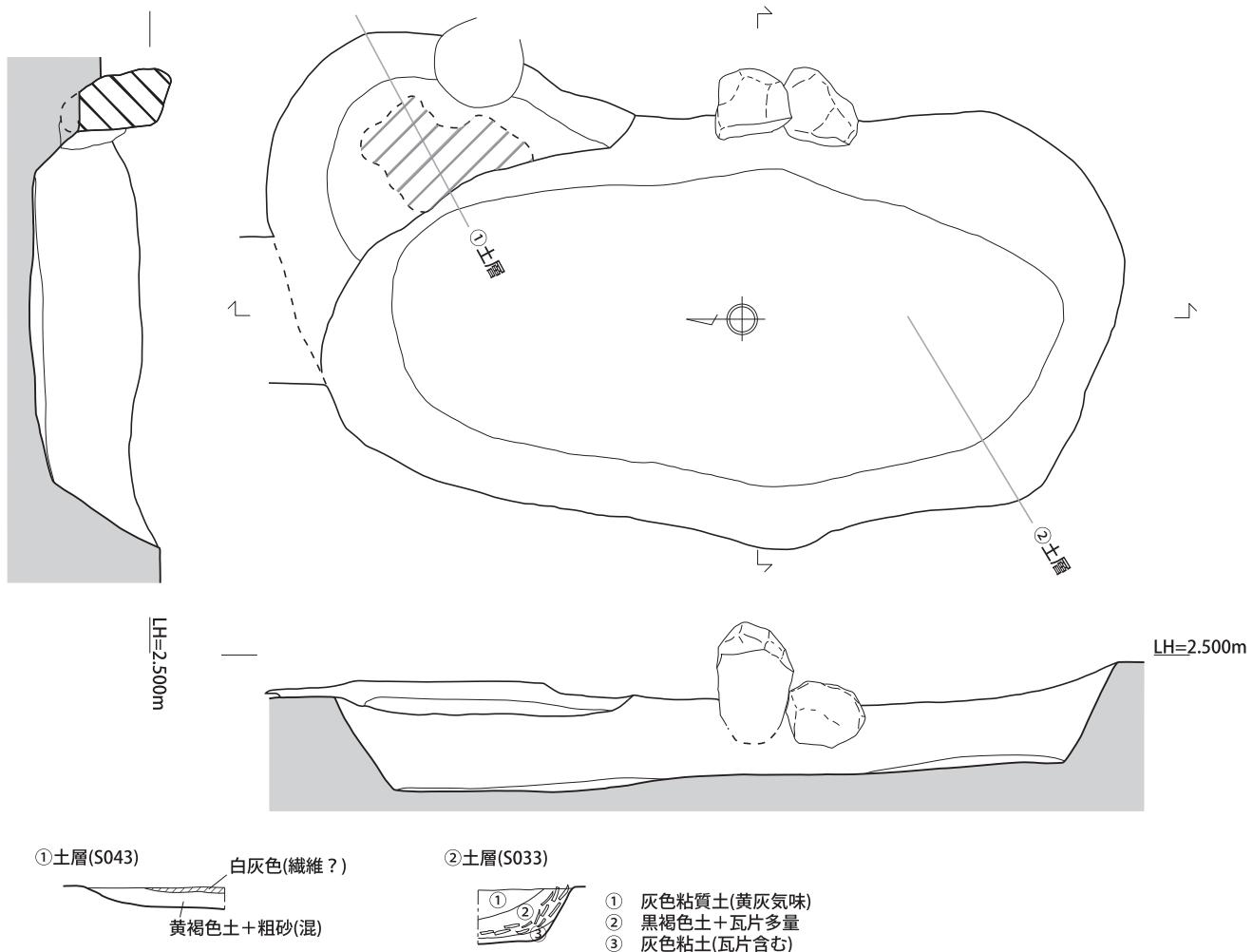
SK073 (第13図) 調査区中央で検出され、長辺約2.25m、短辺約1.35m、深さ約0.8mを測り、平面隅丸長方形を呈す。壁面から底面全てにおいて、厚さ約5cmの黄橙色粘土を丁寧に貼られており、他の土坑とは様相が異なる。土層から、ある程度埋まった後、別遺構もしくは掘り返しにより完全に壊されていることが分かる。その構造から地下蔵の可能性が考えられる。

(4) 性格不明遺構

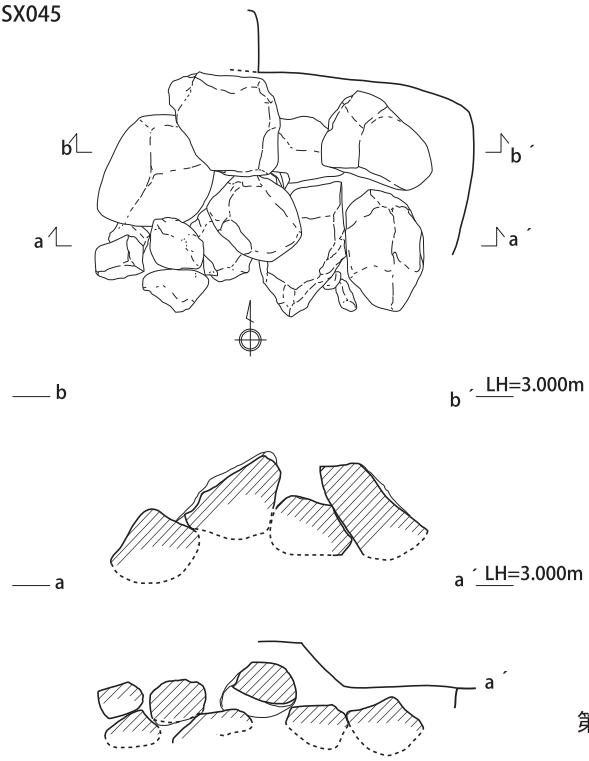
SX021 (第6図) 調査区の北側で検出される掘り込みである。出土遺物には古代に該当するものが多い。

SX033・043・044 (第14図) 調査区の南東部分で確認される。長径約4.7m、短径約2.3m、深さ約0.5~0.6mを測り、平面歪な橢円形を呈す。本遺構内及び周辺では土質・土色の違いから複数のプランを確認しているが、基本的に埋土の堆積状況を平面で表したものと考えられることから、全ては同一遺構と判断される。埋土は灰色粘質土及びシルト質土を主体としており、水気を多く含み、脆弱である。遺構北東部において白色の纖維質（粘土か）が広がっていた。残存が悪いことから不明な点が多いが、有機質が腐食した痕跡と思われる。また、上面及び中途から大型の礫が出土し、一部は立石の様をなす。埋土や礫の出土状況から、池状遺構となる可能性を指摘しておきたい。

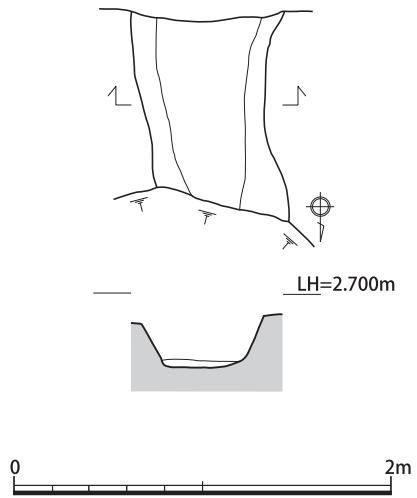
SX033・043・044



SX045



SX067



第14図 SX033・043・044・045・067実測図 (1/40)

SX045（第14図） 調査区中央西寄りで検出されるが、攪乱坑等により規模・プランは不明確である。50cm以上の大きさの礫が重なるように廃棄されていた。礫の重さが人力の限界を超えていたことから掘り下げを断念した。

SX054・56（第6図） 調査区西側で検出され、SE005よりも新しい。埋土からは瓦製の配水管やミニチュアの急須が出土している。

SX067（第14図） 調査区南側中央付近で確認される溝状を呈す遺構で、断面逆台形をなす。SE092より新しく位置づけられる。

SX068（第4図） 調査区南側付近に広がる淡灰茶色を呈す包含層である。近世段階の遺構はSX068を掘り込んで形成される。

SX075（第4図） 調査区の中央に分布する灰茶色土を呈す不整形プランである。検出時、京都系土師器が口縁部を上に向けて出土していたため精査を行ったが明瞭な掘り込み等は認められなかった。周辺には新しい時期の遺構が無いことから、京都系土師器はほぼ原位置を保っていると考えられる。

出土した場所はSB100を構成する柱穴（SP066）と近接もしくは重なっており、灰茶土は近世前半までに廃絶したSB100やSD090と土質・土色が類似している。よって、これらの施設の埋土に含まれるものか、または何らかの意図を持って置かれたと推測される。

B 第2面の遺構

(1) 建物跡・柱穴列

SB100（第15図） 調査区中央で確認され、東西5間+ α 、南北2間の規模を有し、柱穴は径0.5~0.8m、深さは残りが良いもので約0.4mを測り、平面円形・不整方形等呈す。身舎面積は60m²を超える。柱痕跡は認められないが、柱穴の一部からは根石が見つかっている。SB100の柱配置を見ると、西側が納戸等の空間として、そして東側が客間として利用されたと考えられる。柱穴iとjの間は柱間寸法が他と比べて長いことから出入り口部分に該当する可能性がある。出土遺物から近世初頭には廃絶していたと判断される。

SB120（第16図） 調査区西側、SF005の下位で検出される南北3間+ α 、東西1間+ α の掘立柱建物である。柱穴は径約0.6m、深さは約0.2~0.4mを測り、平面円形を呈す。SB100とSB120はL字状の建物配置を成しており、同時期に存在したものと推測される。

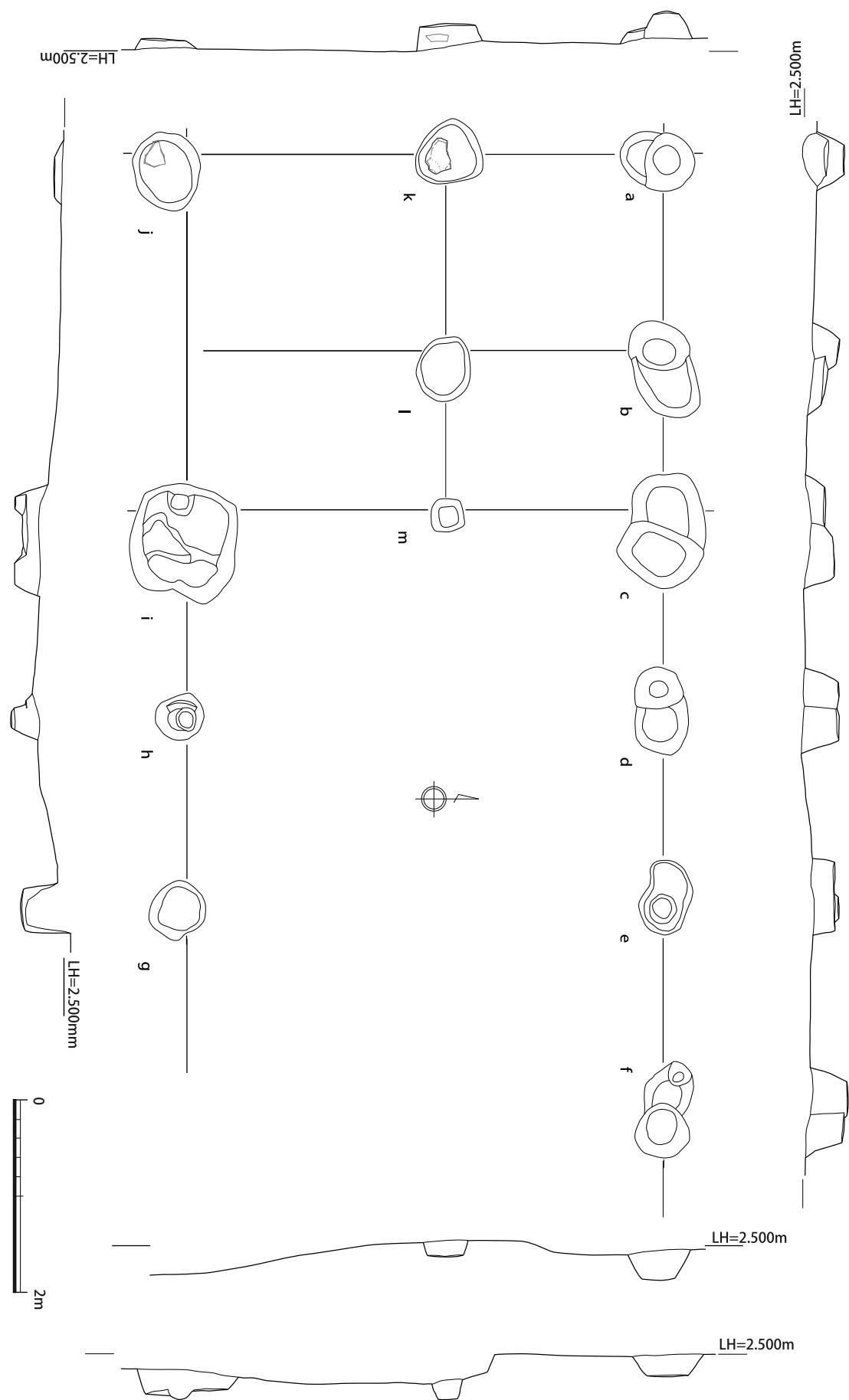
SA135（第16図） SB120の南側で検出される柱穴列で、現状では1間分のみである。SA135は配置状況や規模等からSB120と連続して展開するものと思われる。柱間寸法がSB120と比べ長いことから門などの出入り口施設であった可能性がある。

SA145（第17図） SV010の下位で検出される柱穴列である。柱穴は径約1.1m、深さ約0.15~0.4mを測る。現状では1間分のみの確認である。

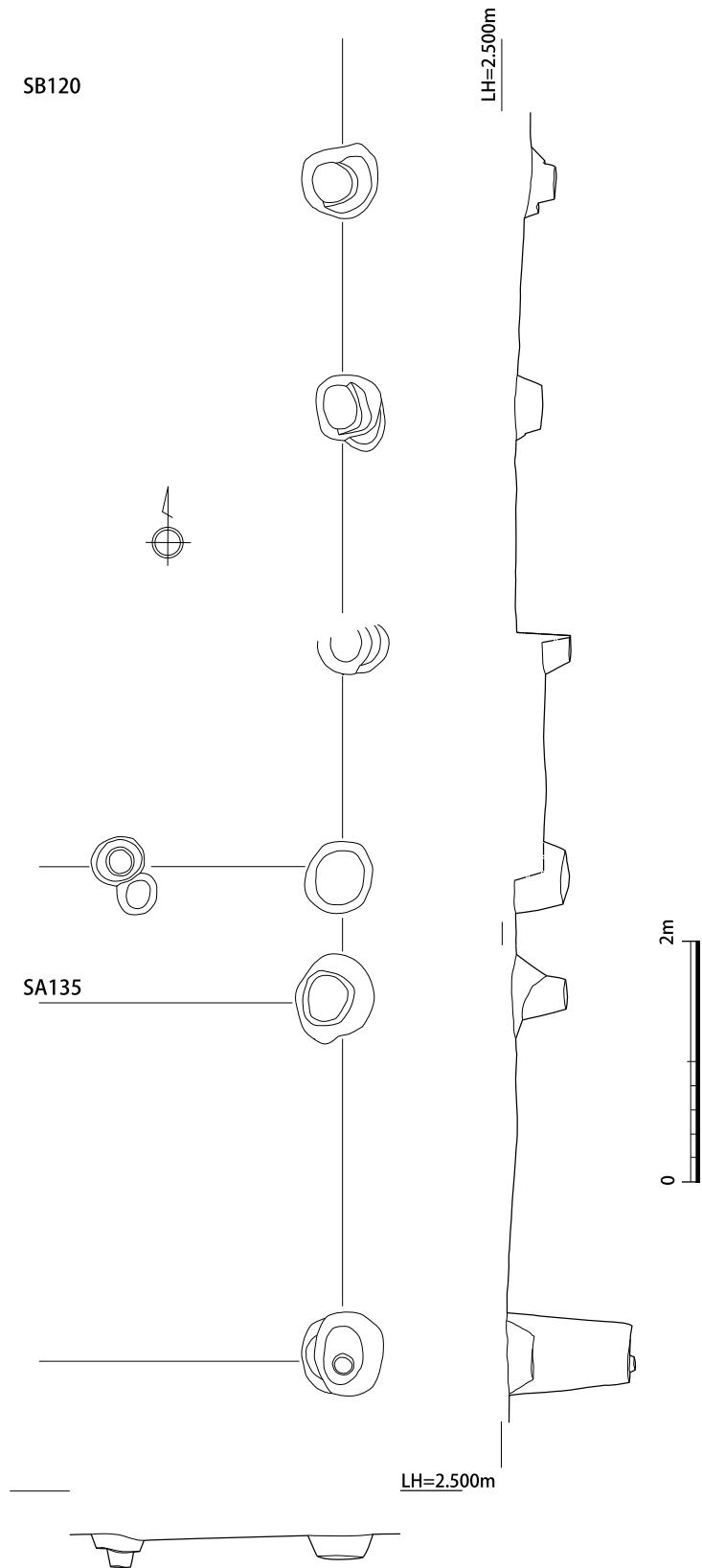
(2) 井戸跡

SE085（第18図） 調査区南側で、SK060を掘り下げた後に確認された。径約2.5~2.8m、残存する深さ約0.7mを測り、平面円形を呈す。段掘りをなし、径約2mの円形プランの内部からは削り貫き式木製の井戸枠が出土した。井戸枠は丸太材をそのまま使用したものではなく、不整形に欠けた2つの材を円形になるように工夫し、重ね合わされていた。出土遺物は土師器壊、蓋など古代に該当するものが中心である。

SE175（第18図） 調査区東壁沿いで検出されるが約1/2は区外へと延びる。径約3m、深さ約1m+ α を測り、円形を呈すと思われる。径約1mの井筒部は確認できたが、井戸枠は認められなかった。構造としては、SE085と類似し、出土遺物からも近接する時期になると判断される。

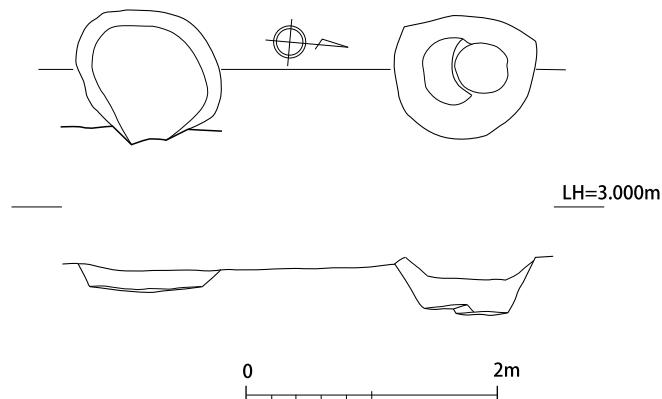


第15図 SB100実測図 (1/60)



第16図 SB120、SA135実測図 (1/60)

SA145



第17図 SA145実測図 (1/60)

(3) 溝状遺構

SD090 (第19図) 調査区を東西に縦断し、幅約1.3m、深さ約0.8~1mを測り、断面逆台形を呈すが、部分的に底面で布掘り状をなす。また、壁面は北側では緩やかであるが、南側では急傾斜で立ち上がる。流水痕跡は認められない。埋土は乾燥すると硬質になり、埋められて長期間が経っているためか非常に締まっている。土色は有機質をやや含むためか、やや黒色みを帯びる。

(4) 土坑

SK094 (第19図) 調査区西側、SF005下位で検出される。東西約1.3m、南北約0.8m、深さ約0.3~0.4mを測り、平面橢円形を呈し、段掘り状をなす。

C 第1面の遺構からの出土遺物

(1) 井戸跡出土遺物

SE042 (第22図1~2) 1は型紙刷りによる印判手染付の皿で、口縁部は錫釉がなされる。2は国産陶器碗で、体部内外には淡青緑色に、体部下半から高台部は鉄釉が施釉される。

SE092 (S-70 第22図3~15) 3は肥前染付碗で型紙刷りによる絵付けが行われる。4は肥前磁器の瓶の高台部で製作年代は17世紀前半に比定される。5は肥前染付皿で見込みには手描きの五弁花文、高台内には簡略化した渦福文が描かれる。6は肥前系陶器皿の口縁部、7、8は京都系土師器皿、9は土錘、10~13は軒丸瓦、14、15は軒平瓦。14はE-6類（吉田1993）に類似する。16は肥前産の陶器碗と思われる。17は非ロクロ系土師質土器皿、18は肥前磁器碗で、見込みに手描による五弁花文が描かれる。

(2) 柱穴遺構出土遺物

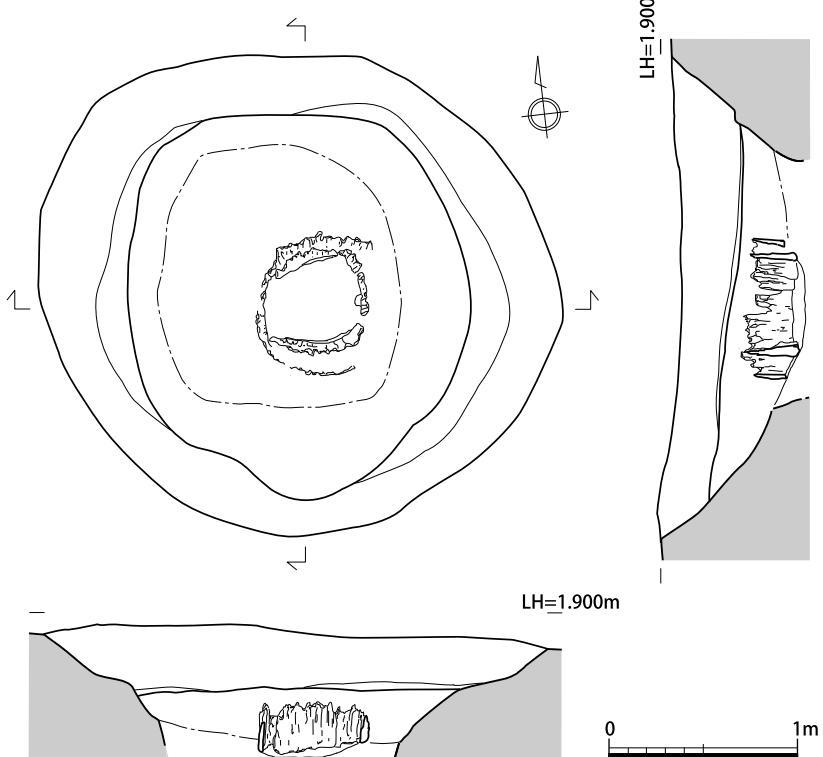
SP018 (第28図1~5) 1は緑釉陶器碗の底部で平高台を呈す。底部外面に線刻が認められる。2は須恵器坏cで、見込みに線刻がある。3~6は土師器坏で、3は内外面にミガキが施される。6は全体に乳白色の釉がかけられたような色調を呈す。7は嘴状の端部を有す土師器蓋である。

SP020 (第28図8) 8は肥前産陶器に皿で、薄乳白色に施釉される。

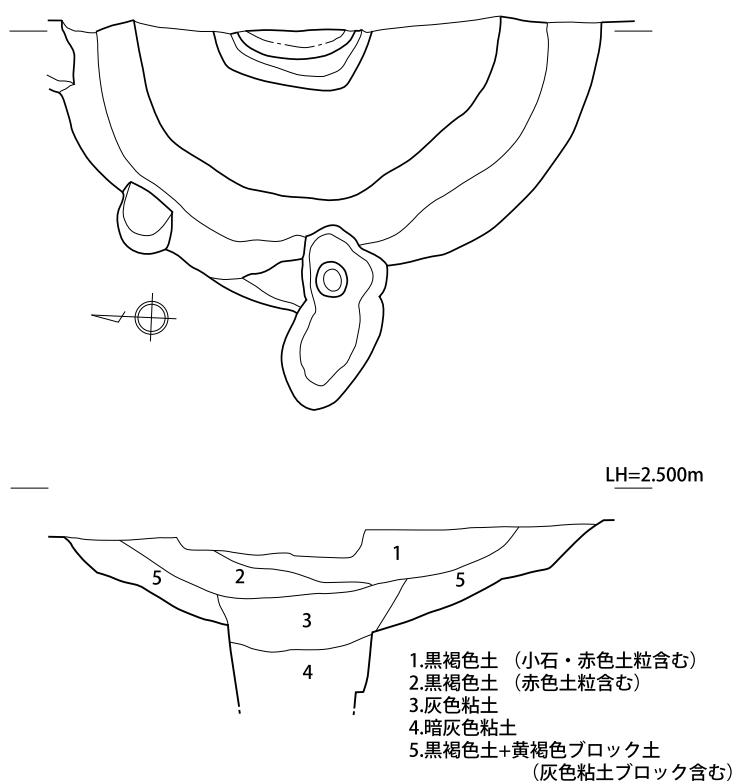
SP036 (第28図9) 軒平瓦で、中心飾りは 笹文が描かれる。

SP051 (第28図10) 防長系の緑釉陶器皿で、高台部は貼り付け高台である。

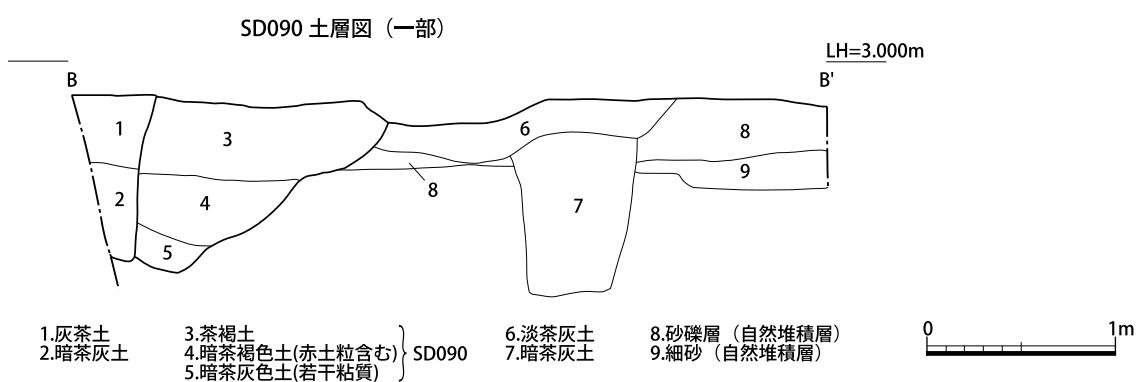
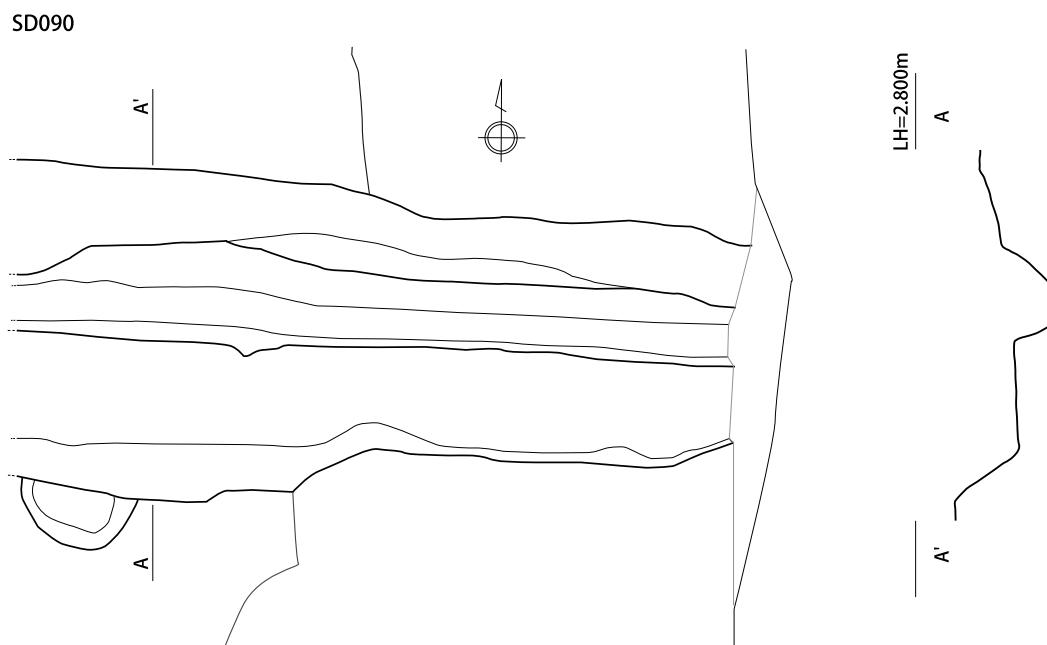
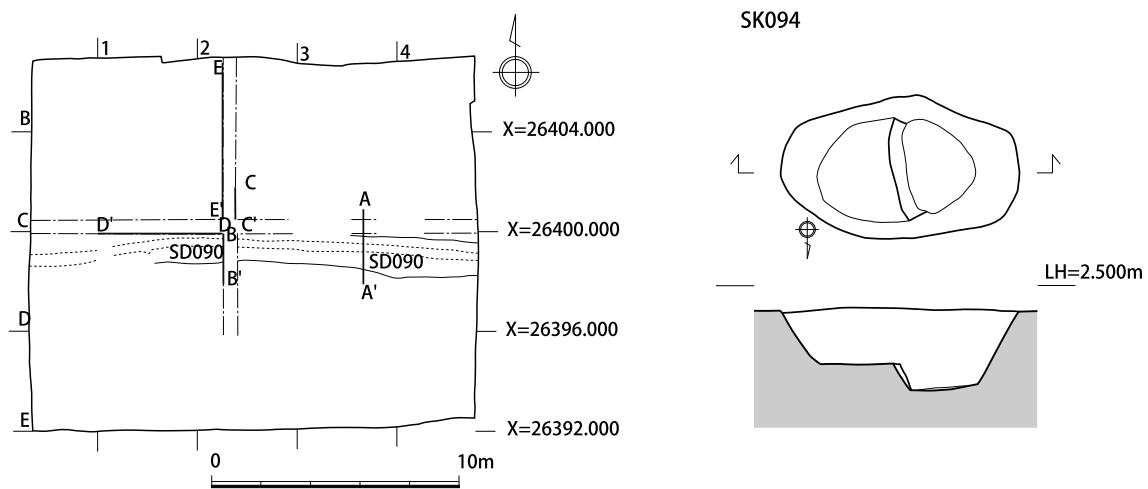
SE085



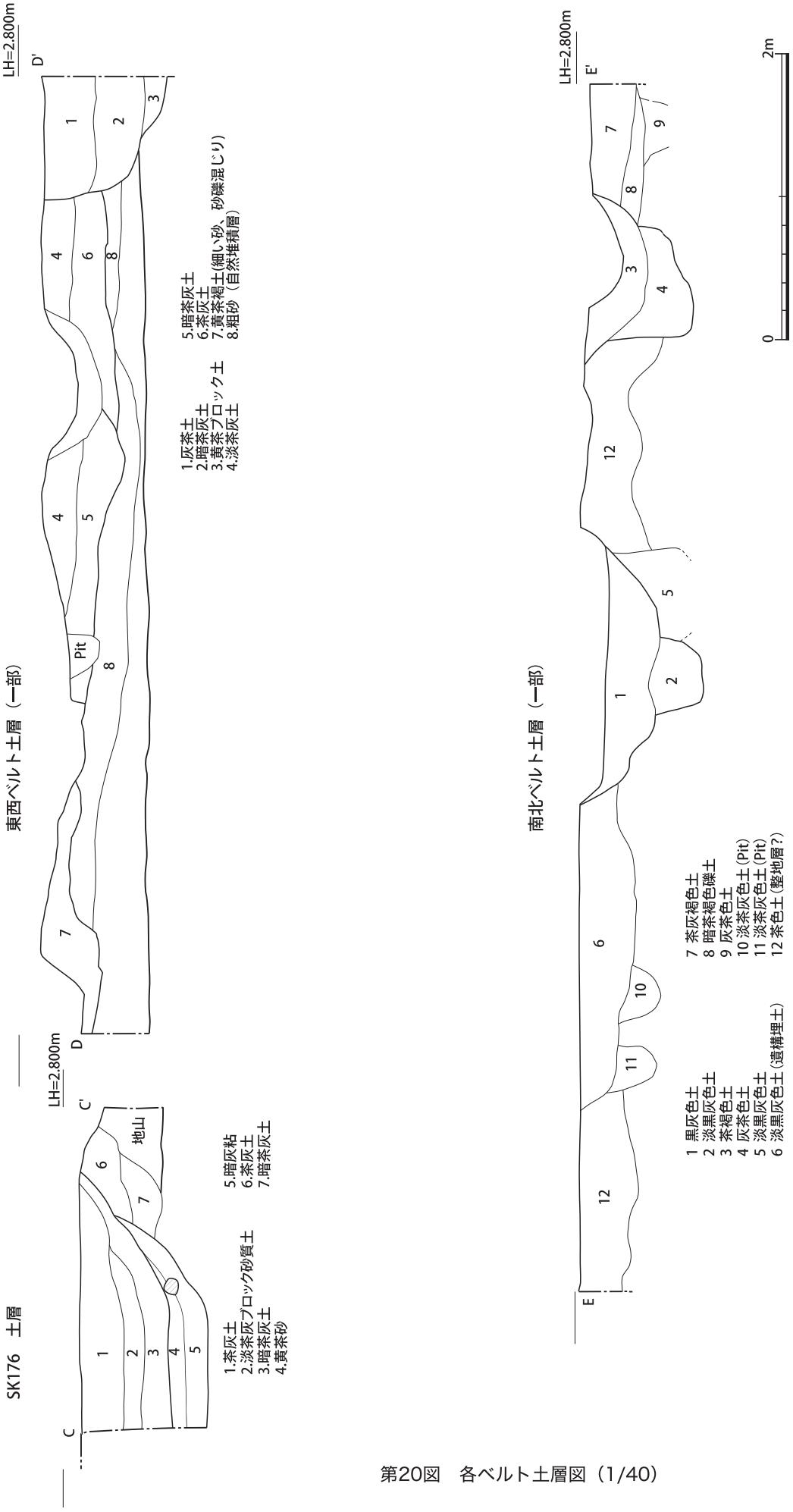
SE175



第18図 SE085・175実測図 (1/40)



第19図 SD090・SK094実測図 (1/40、土層配置図 1/300)



第20図 各ベルト土層図 (1/40)

(3) 道路状遺構・溝状遺構出土遺物

SF005 (第23図1～9) 1は肥前陶器で、いわゆる刷毛目碗である。2は棟瓦で、側面には「合」の烙印が押される。3は肥前陶磁碗で松文が描かれる。4は肥前系陶器のひょうそく、5は型紙刷り、印判手染付碗、6は縄文土器の深鉢、7は肥前磁器の蓋、8はクロム青磁の皿で内外面は薄黄緑色に施釉される。9は肥前産の端反り碗で、製作年代は19世紀中頃から後半におかれる。

SD007 (第23図26、27) 26は緑釉陶器碗で、全面に施釉され胎土は須恵質を有す。内面にはミガキが多数施される。高台は削り出しにより、畳み付け内側は削りがなされる。27は内面に鉄絵が描かれる絵唐津の皿である。

SD053 (第23図22～25) 22はクロム青磁の碗で釉下彩による絵付けがなされる。23は白磁皿で、24は小型の多角鉢でともに焼き継ぎが行われる。25がガラス製の鉢等の脚部と思われる。

SD058 (第23図10～18) 10は端反りタイプの磁器碗、11は国産陶器の擂鉢底部、12～17は軒平瓦で、12、13は箋文を、15、17は三葉を中心飾りにもつ。18は煙管雁首で、19世紀代に比定される。

SD069 (第23図19～21) 19はクロム青磁碗で釉下彩による絵付けがなされる。20は焼締陶器の小壺で、備前産か。21は型紙刷り、印判手染付けの皿である。

SD077 (第23図28～30) 28はクロム青磁の皿でSF005出土のものと同一固体である。29はガラス製容器の底部、30は煙管吸口。

(4) 土坑出土遺物

SK012 (第24図1～3) 1は土師器坏a、底部から口縁部へと直線的に外反しながら立ち上がる。2は土師器碗で三角高台が貼り付けられ、内外面にミガキが施される。3は縄文土器の深鉢である。

SK034 (第24図4、5) 4はやや高い高台を有す初期伊万里皿で、見込み部分に草花文が描かれる。5は青磁徳利で器面に「酒」の文字が描かれる。

SK035 (第24図6) 6は軒平瓦で、中心飾りに三つ葉が付される。

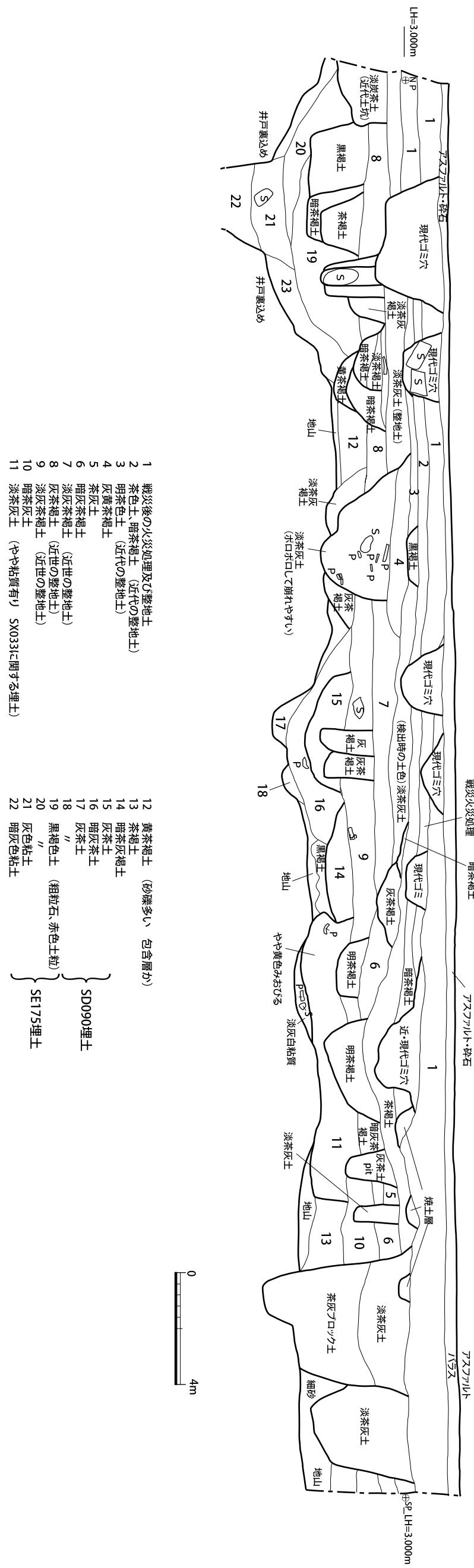
SK041 (第24図7) 7は軒丸瓦で右回りの巴文が付される。

SK055 (第24図8～20) 8は青磁の筒型碗で内面に四方櫛文が描かれる。9は白磁の端反り碗で器面には貫入が目立つ。10は志野焼の向付の底部、11は刷毛目唐津皿で、見込みに砂目が付く。12は瓦質土器の焜炉で、口縁部には窓部、内面に角状突起が見られる。13～16、19、20は軒平瓦で14は中心飾りに雄蕊状文が、16は三つ葉桐文、19は橋状文が付される。17は多角鉢で口縁端部に鉄釉が施される。

SK060 (第25・26・27図1～42) 1は薄手の染付小碗、2は肥前染付碗、3は白磁碗で高台畳み付けに砂が付着する。4は肥前染付碗で外面に2重網目文、見込みには菊文が描かれる。製作年代は1700～1750年代におかれる。5、6は肥前染付碗で、6は外面唐草、内面には牡丹唐草が描かれる。7は初期伊万里の皿、8は染付皿で、高台部は蛇の目高台、製作年代は18世紀後半。9は肥前産の仏飯器、10、11は肥前陶器の大皿でいわゆる刷毛目唐津である。12は備前産の布袋徳利で18世紀代に比定される。13は焼塩壺の蓋か。14は弥生前期の壺底部、15は力士人形の左足部。16、17は木舞組の痕跡が見られる壁土である。18は板状銅製品で皿のようなものか。19は鬼瓦の裾部、20は平瓦で被熱痕から重ね部分が観察できる。21、22は丸瓦、23～30軒丸瓦で、23は瓦当径が13.2cm、巴文は時計回りで珠文数は15個である。24、25、28の巴文は反時計回りである。31～40は軒平瓦で、39～42は中心飾りに雄蕊状文が施される。また、38には「助ノ丞」の刻印が認められる。

SK064 (第27図43、44) 43は陶胎染付碗、44は国産陶器の皿または鉢の口縁部。

SK073 (第27図45) 45は磁器碗であるが、現代の所産と思われ混入の可能性がある。



第21図 調査区(A区) 東壁土層図(1/80)

(5) 性格不明遺構出土遺物

SX021 (第31図11~13) 11、12は土師器壺d、13は移動式竈の窓部（庇）と思われるが、現状の図面配置でみると縦方向に粘土の接合痕が見受けられることから、上記の器種とは異なる可能性がある。全体は粗いナデにより仕上げられるが、外面は下地に格子目状の叩きの跡が認められる。鍔部分は不均等な粘土が粗く撫で付けられている。

SX032 (第29図1~14) 1は肥前染付でくらわんか碗、2は青磁染付で口縁内面に四方禪文が描かれる。3は肥前染付丸碗で、楓文が描かれる。4は瓔珞文が描かれるそば猪口である。5は染付皿で、見込みには手描きの五弁花文が描かれる。6は肥前陶器で、見込み部には貝目積みの痕跡が認められる。内外には藁灰釉が施釉され、濃緑灰色を呈す。7は肥前陶器皿、8は青磁とも判断される土鍋である。9、10は軒丸瓦、11~14は軒平瓦で、11は筈文が描かれる。

SX033 (S-33、43、44 第30図15~21・第31図22~30) 15は肥前陶器鉢、16は焼締陶器擂鉢で、備前産と思われる。17~21は軒丸瓦で、すべて巴文は時計回りをなす。22~27は軒平瓦で、22は筈文、26、27は雄蕊状文が中心飾りに描かれる。28は肥前産陶器擂鉢で18世紀代に位置づけられる。29は焼き締め陶器擂鉢。

SX045 (第30図31~36) 31は肥前系染付、32は肥前陶器皿もしくは鉢の高台部、33は肥前陶器の擂鉢、34は土師質の甕で、口縁部は内側に粘土を折れ曲げて形づくる。35、36は軒丸瓦破片。

SX046 (第30図37) 青磁の皿で、生産地は不明である。釉調は濃青緑色を呈し、全体に貫入が目立つ。

SX054 (第31図1) 1は軒平瓦で、中心飾りには六葉の花弁状文が描かれる。

SX056 (第31図2~4) 2はミニチュアの急須で、玩具として使われたと考えられる。3、4は瓦質管である。3は4のような円筒管との繋ぎ部分に該当する。

SX067 (第31図5~10) 5は肥前系陶器碗、6は軒丸瓦、7~10は軒平瓦で、9は橋状文が、10は三葉文が中心飾りに描かれる。

SX068 (第32図1、2) 1は産地不明焼締陶器の擂鉢である。2は軒平瓦破片。

SX075 (第32図3~20) 3は肥前染付の鉢または碗、4は肥前染付の小皿、5は青磁碗の口縁部で龍泉窯系と思われる。6は肥前系白磁瓶で、17世紀代の所産か。7は小型の擂鉢で、外面には鉄釉が施される。8は肥前陶器の皿もしくは鉢で、見込み部には3ヶ所砂目が付着する。17世紀前半代の範疇で捉えられる。9は肥前陶器の大皿で、内面に鉄絵が描かれる。いわゆる絵唐津である。10は瓦質の高台が付される小皿である。11、12は京都系土師器皿口縁部、13は土師質の甕口縁で、他のものよりやや後出する。14は焼塩壺で、内外面には指押さえ痕が顕著である。徳川氏大坂城期段階に位置づけられる。15~17は土錘、18は縄文土器の浅鉢の口縁部である。

暗茶褐土 (第32図21、22) 21、22は非ロクロ系の手捏ねの土師質土器皿である。21は口縁端部がやや外反し、底部から口縁にかけてほぼ同じ厚さで立ち上がる。平底状を呈す。口径は12.1cm、器高3.1cmを測る。22は底部から口縁部は直線的に伸び、やや外反形状である。端部は肥厚し丸く仕上げられる。口径13.2cm、器高2.8cmを測る。

D 第2面の遺構からの出土遺物

(1) 堀立柱建物・柵跡・柱穴出土遺物

SB100 (第33図1~6) 1~3はSB100 (b) <SP177>から出土したもので、1、2は土師器皿または盤、3は円筒状の土製品。いずれも古代に該当する。4はSB100 (f) <SP182>から出土した絵唐津の皿口縁部。5、6はSB100 (j) <SP066>からの出土。5は肥前陶器皿で、内面には6ヶ所の砂目が付着する。体部中程でやや屈曲し段が形成される。高台は三日月高台を呈す。6は結晶片岩製の砥石で、両面使用されている。

SB120 (第33図7) SB120 (c) <SP194>からの出土で、肥前陶器の碗である。

SA145（第33図8～10） 8～10は全て肥前陶器で、8、9は瓶、10は把手付きの油差し壺である。8は玉縁状の口縁を呈し、頸部に突帯が付される。9は体部で底部は削り出しによる。外面には鉄釉（黒褐色）が施される。

SP091（第33図11） 11はいわゆる肥前陶器で、いわゆる呉器手碗。

SP169（第33図12、13） 12は絵唐津の皿または向付破片、13は手捏ねの土師質土器皿で、京都系土師器の厚手タイプに類似する。

SP173（第33図14） 軒丸瓦の破片で、珠文が現状9個認められる。

SP196（第33図15） 京都系土師器皿の底部で、その特徴から中世府内町で出土のものと類似する。

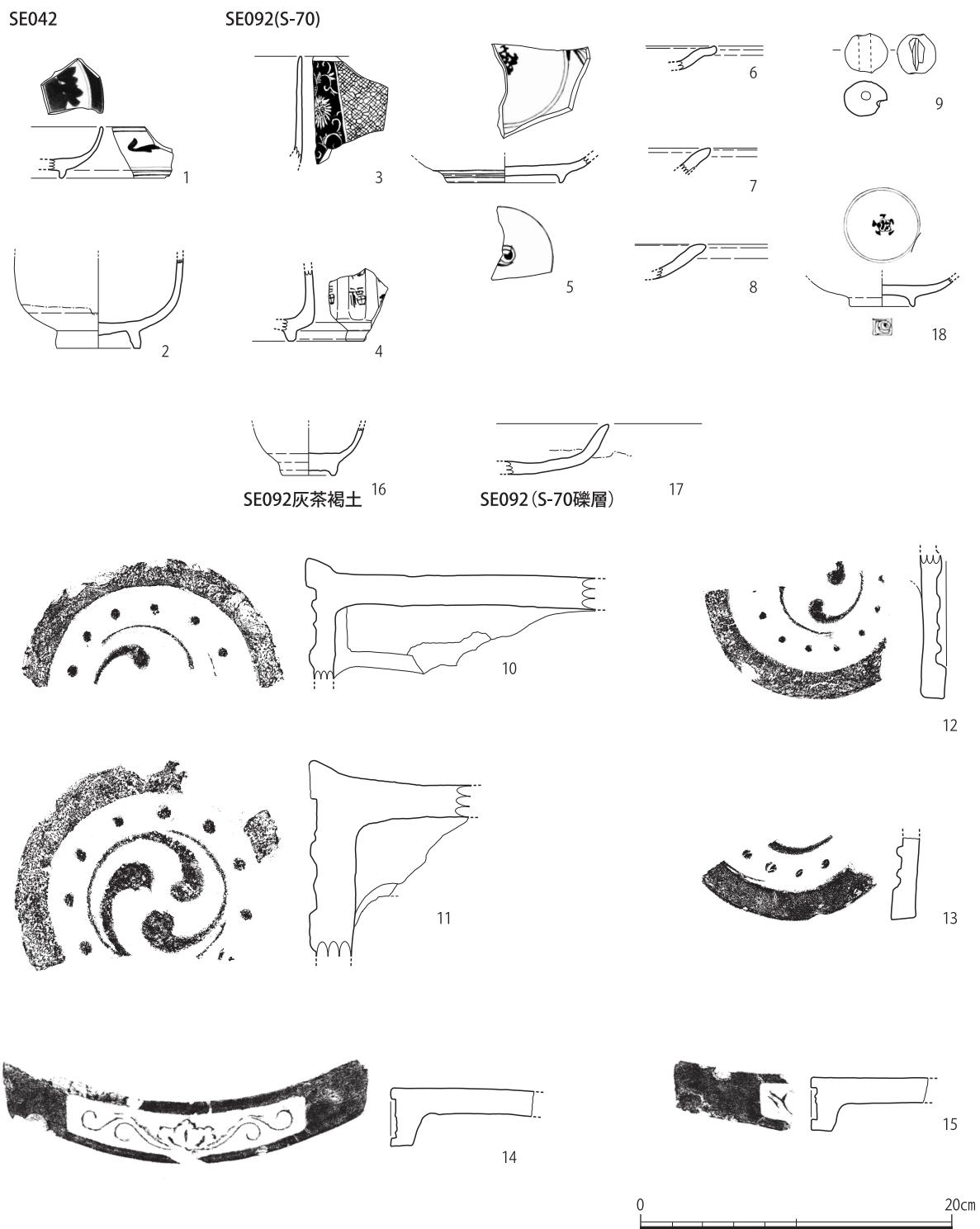
SP199（第33図16、17） 16は土師質土器焙烙の口縁部、17は縄文土器深鉢と思われ、口縁は断面L字状を呈し、刻目が付される。

SP204・207（第33図18、19） 18は緑釉陶器の椀で、内外面に細かいミガキが施される。特徴からSE175出土のものと類似する。19は肥前染付の碗である。

(2) 井戸跡出土遺物

SE085（第34・35図1～46） 1は白磁椀（VII類か）の高台部、2は須恵器坏c、3は須恵器甕口縁部、4、5は土師器椀で、それぞれに三角高台が付される。6は土師器坏a、7は土師器蓋口縁部、8は土師器甕、9は企救型甕の口縁部である。10～23は井筒内から出土したものである。10は黒色土器A類椀、11は須恵器蓋で端部は嘴状を呈す。12は須恵器甕の体部で内面には当て具痕、外面には格子目状の叩き痕が顕著である。13、14は土師器椀で、14は高めの高台を有す。15は土師器坏d、16は土師器坏の底部で円盤高台をなす。17は器表面が被熱し剥離している。製塩土器か。18は黒色土器A類椀、19は土師器坏a口縁部、20は土師器坏であるが、胎土中に金雲母が多く含まれる。形状は在地のものと比べ異なっており他地域からの持込の可能性がある。21、22は土師器蓋で、21は口縁が屈曲するタイプである。23は土師器甕口縁部。24～45は裏込め土からの出土である。24、25は灰釉陶器椀の高台部である。24は外側に踏ん張るような形状で、畳み付け部分には削りが施される。26は須恵質の胎土を有す片口鉢である。27は須恵器平瓶の口縁部か。28は須恵器壺もしくは甕の体部。29～31は土師器蓋aで、29、30はともに完存品である。形状、法量ともに類似する。31は天井部から口縁にかけて緩やかに移行する。32、33は土師器蓋口縁部。34～36は土師器坏aで、口・底径と比して器高が低いタイプである。37、38は土師器坏dで内外面に横方向のミガキが施される。39は土師器坏口縁部、40から42は土師器坏aの底部、43は土師器椀高台部で低い断面三角形の高台が付される。44は在地の土師器甕、45は企救型甕口縁部、46は弥生土器で下城式の甕である。

SE175（第36図1～28） 1～3は緑釉陶器で、1は近江産、2は防長産である。4は黒色土器A類、5は黒色土器B類、6は瓦器椀の体部破片、7は須恵器甕口縁部で端部は上方へとつまみ上げる。8は須恵器の坏cか。9は須恵器甕の頸部から体部にかけてのもので、内外面に叩き痕等が顕著である。10は土師器の坏口縁部であるが、胎土や形状から中世前半期に該当する可能性がある。11は土師器蓋、12、13は土師器坏に底部か。14、15は土師器坏dで横方向のミガキが顕著である。16は白色研磨土師器の椀で高台部が剥離する。17、18は土師器坏a、19は土師器皿または盤、口縁部は外側へと屈曲する。20は土師器坏の底部で、切離しは回転糸切りによる。中世段階に比定される。21は土師器鉢、22は企救型甕口縁部。23は移動式竈の庇部分と思われる。24～26は管状土錘で、26は端部有孔タイプ。27は土師器小皿で中世段階のもの。28は白色研磨土師器の椀口縁部で外面は粗いミガキ、内面は丁寧なミガキが施される。端部は短く外反する。胎土中に石英粒子が顕著に認められる。

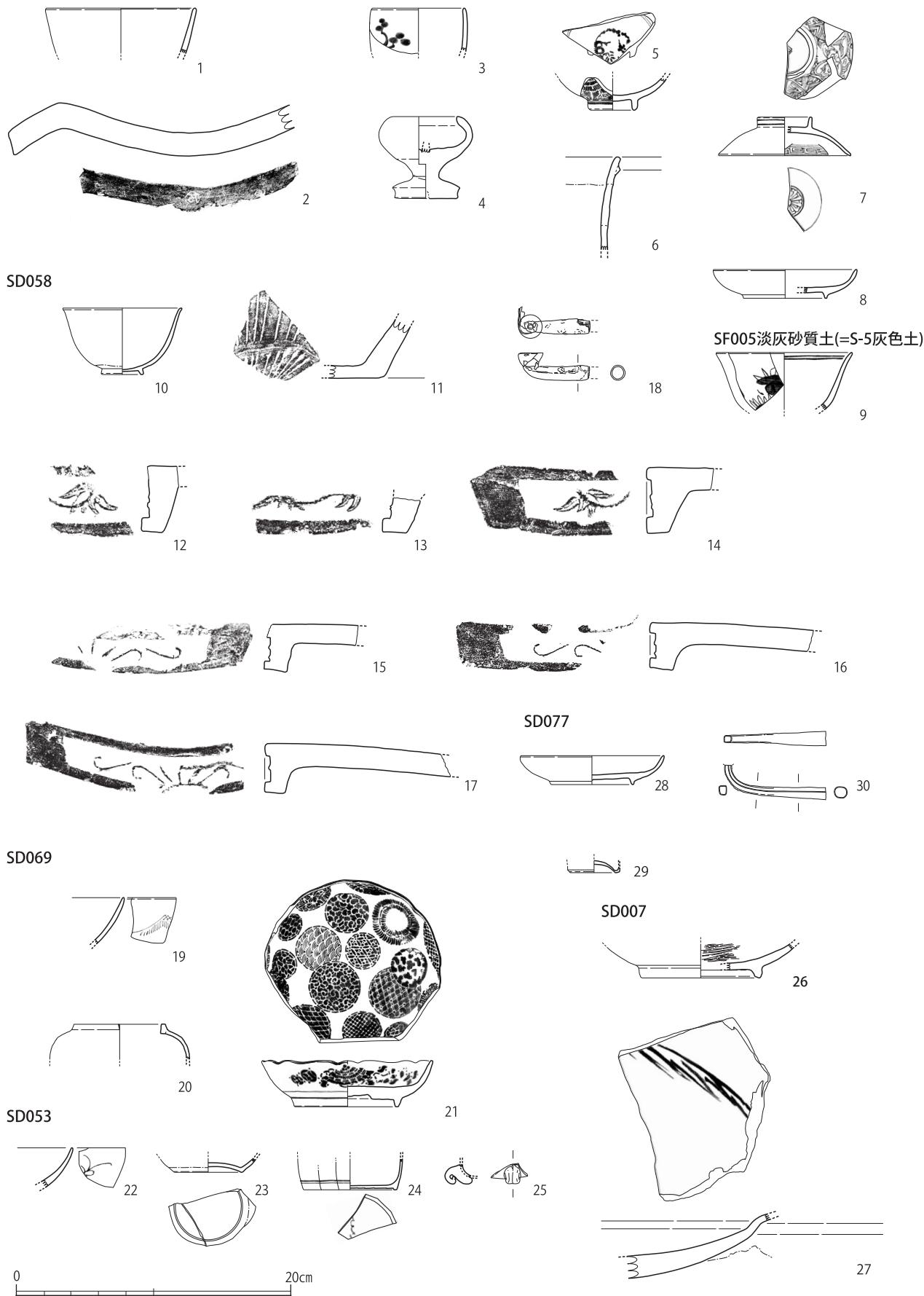


第22図 SE042・SE092 (SX070) 出土遺物 (1/4)

SF005

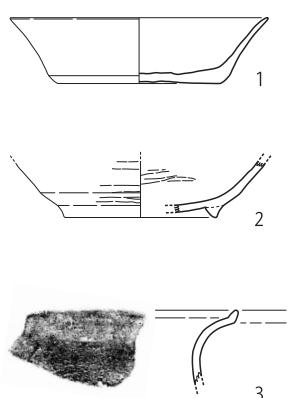
SF005淡茶灰砂礫土(=S-5暗茶褐土)

SF005暗茶色土(S-5茶色土) SF005路面(灰色系砂質土)

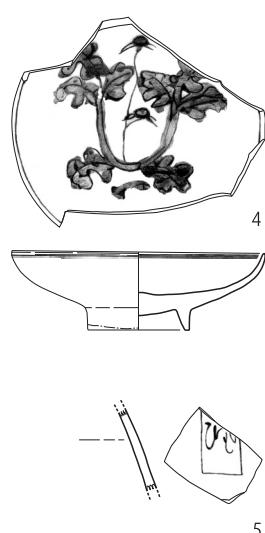


第23図 SF005・SD007・053・058・069・077出土遺物 (1/4)

SK012



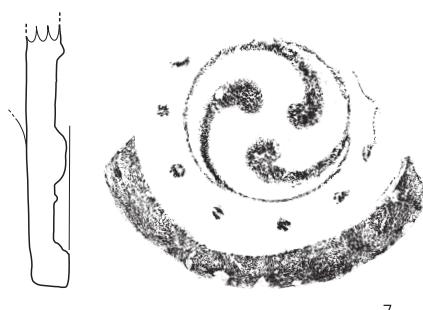
SK034



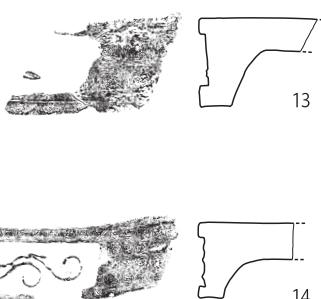
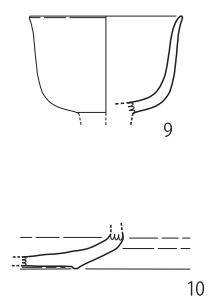
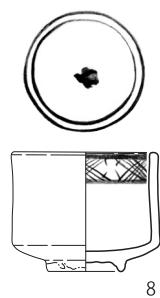
SK035



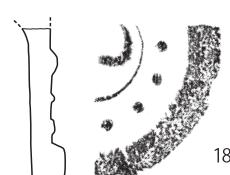
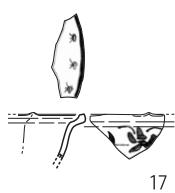
SK041



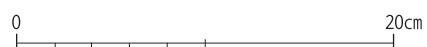
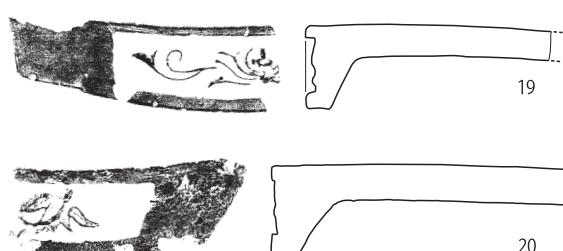
SK055



SK055淡灰茶土

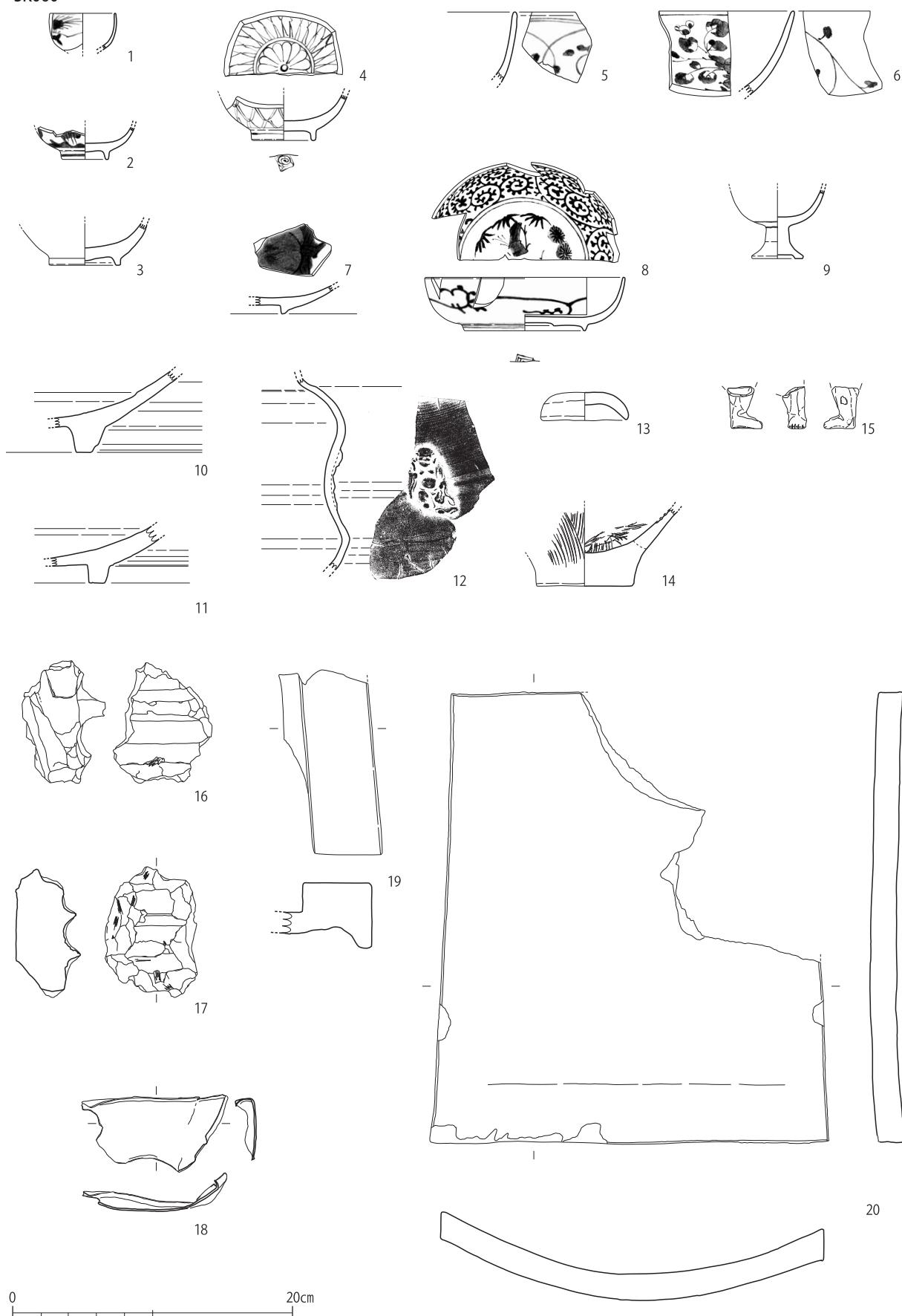


SK059



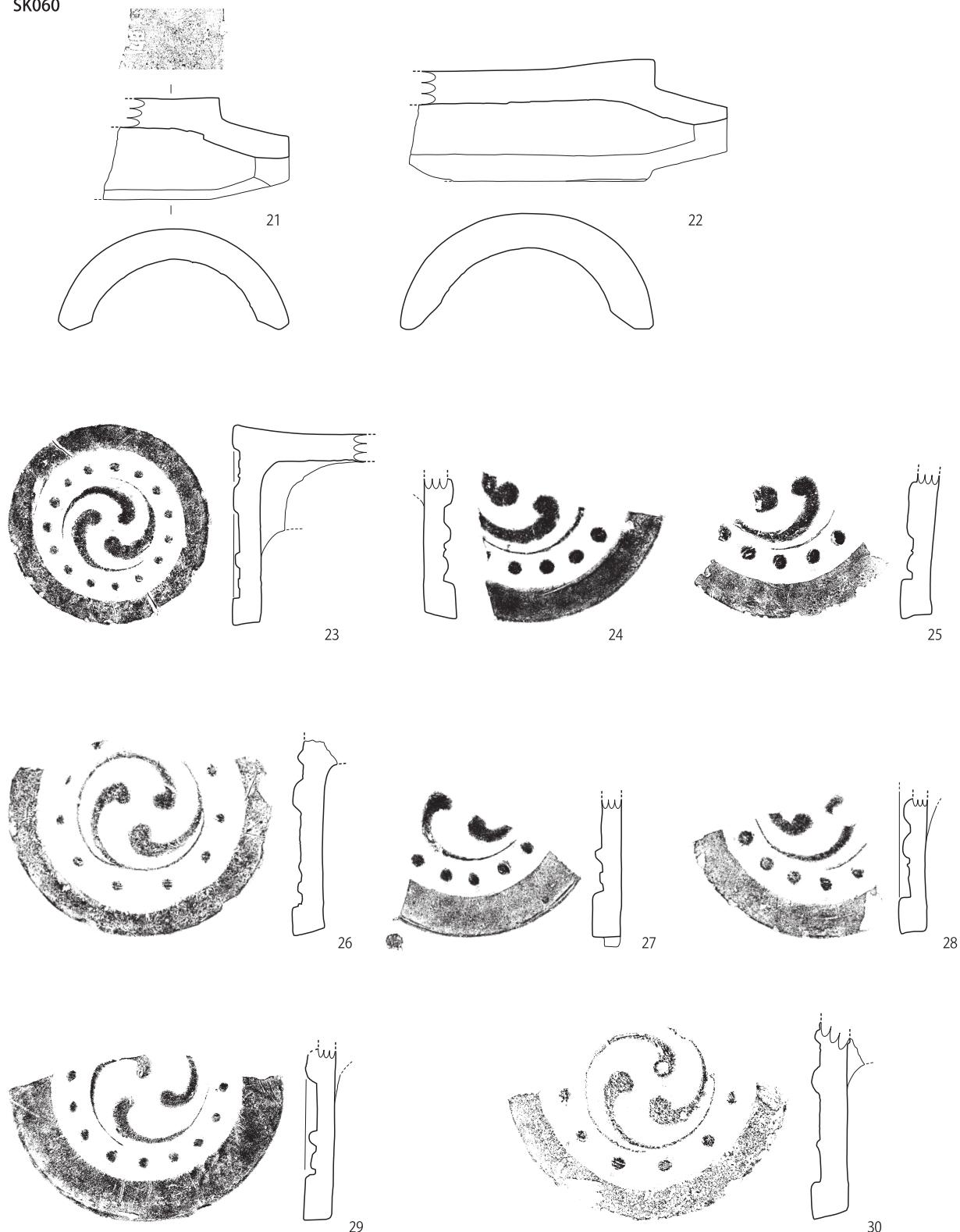
第24図 SK021・034・035・041・055出土遺物 (1/4)

SK060



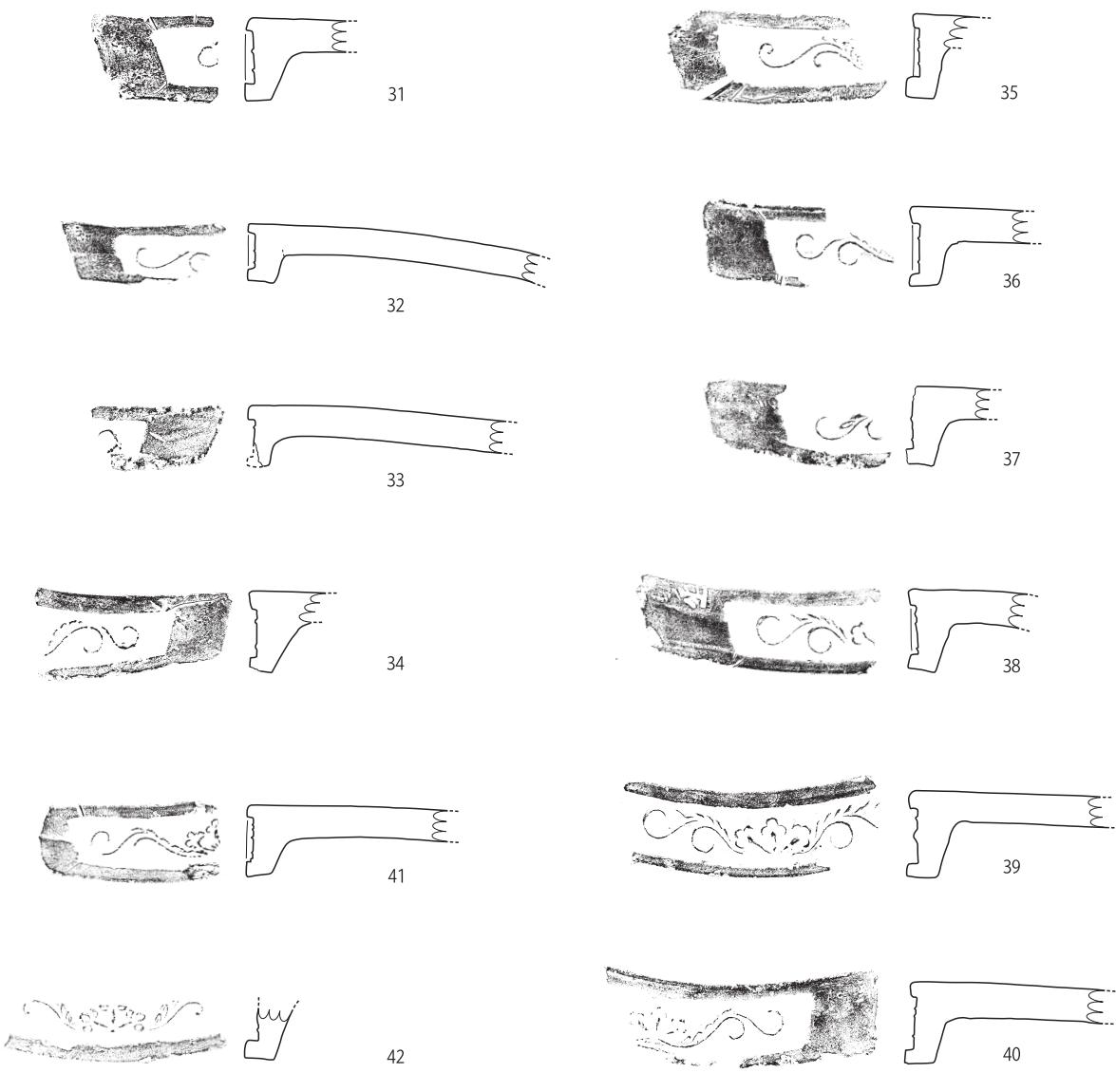
第25図 SK060出土遺物 1 (1/4)

SK060

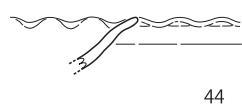
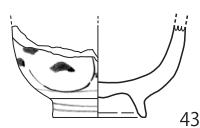


第26図 SK060出土遺物2 (1/4)

SK060



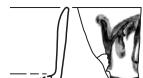
SK064



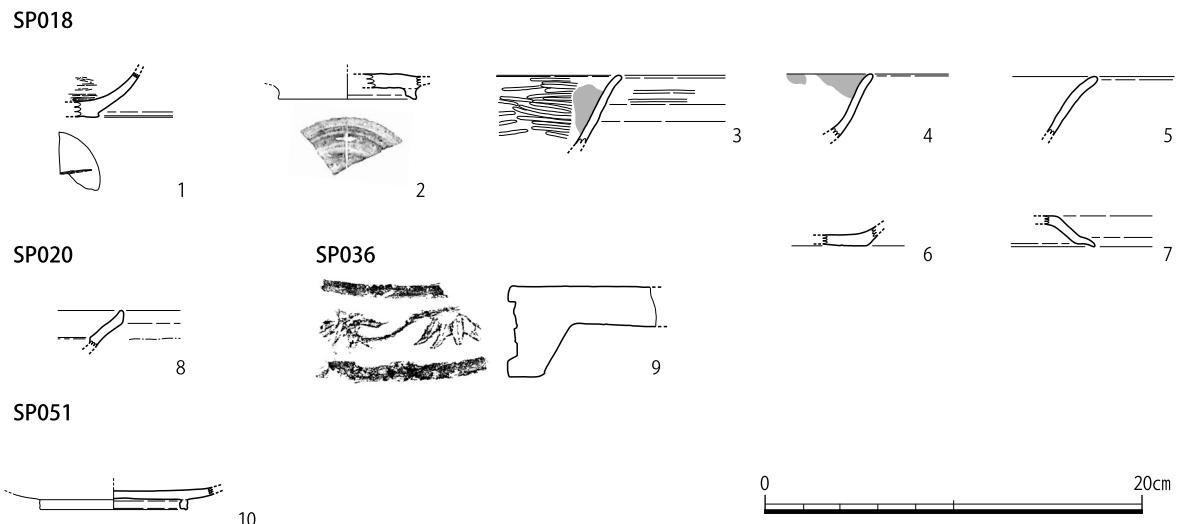
0 20cm

45

SK073



第27図 SK060・064・073出土遺物 (1/4)



第28図 SP018・020・036・051出土遺物 (1/4)

(3) 溝状遺構出土遺物

SD090 (第37図1~10) 1は龍泉窯系青磁の皿、2は備前産の擂鉢、3は緑釉陶器碗で防長系と判断される。4は黒色土器A類で、外面は煤が付着するためか黒色をなす。内面にはミガキが顕著である。蓋になる可能性もある。5は瓦質土器の高台付皿である。高台内側には工具による連続した整形痕が認められる。6は土師器の蓋、7は軒丸瓦、8は角閃石安山岩を材質とする石臼の下臼である。9は軟質施釉陶器の碗である。10は縄文土器で口縁に刻目突帯文が付される。

(4) 土坑出土遺物

SK094 (第37図11~13) 11、12は肥前染付の碗、蓋である。11は外面に松文が、12は笹葉文が描かれる。

(5) 性格不明遺構出土遺物

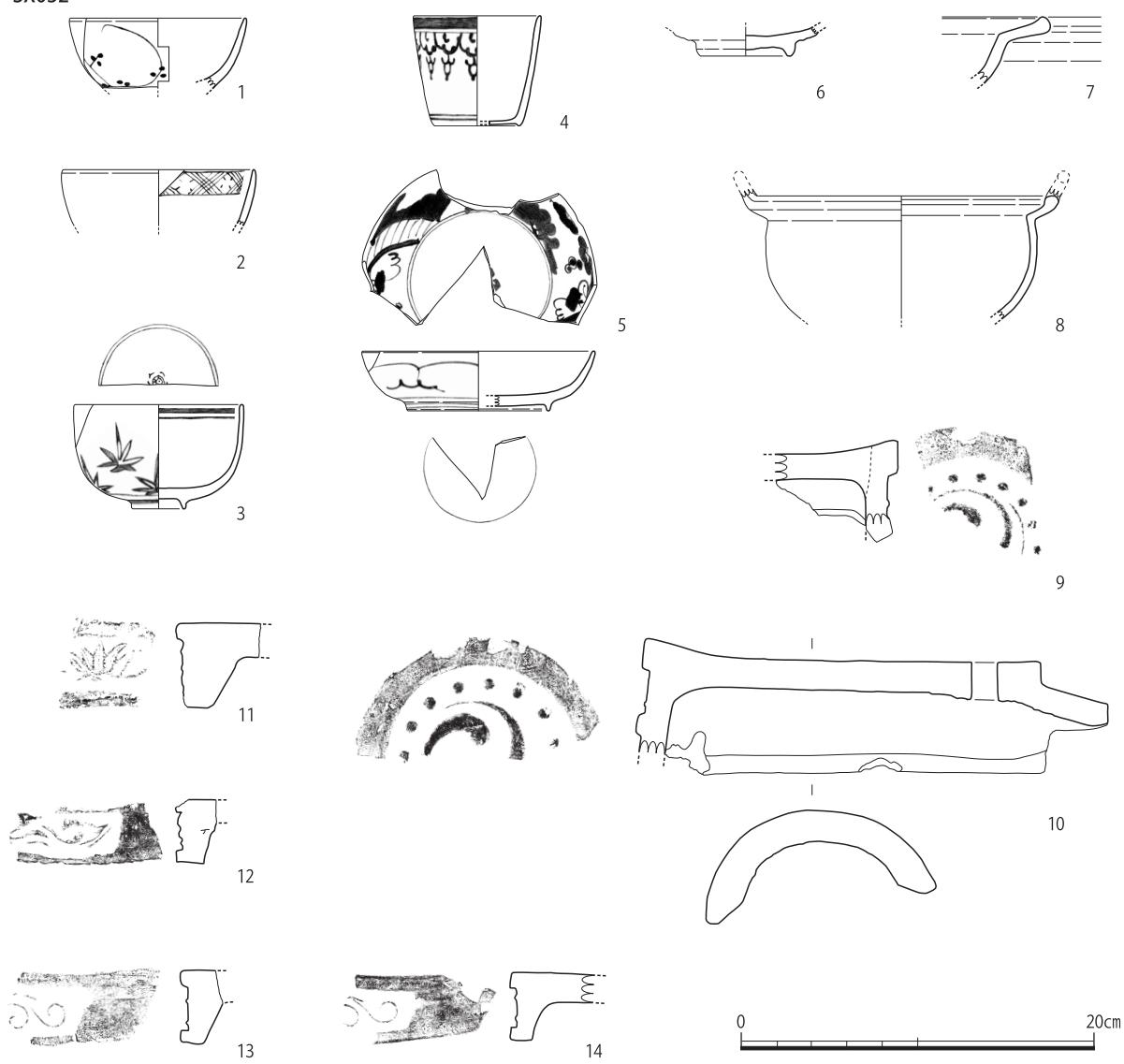
SX097 (第37図14~21) 14が産地不明の白磁の瓶で、高台部は露胎である。15~17は土師器蓋、18、19が土師器壊d、20は壊a、21は中国産の白磁碗で、太宰府分類のV類に該当する。

(6) 搅乱坑・試掘坑・土層他出土遺物

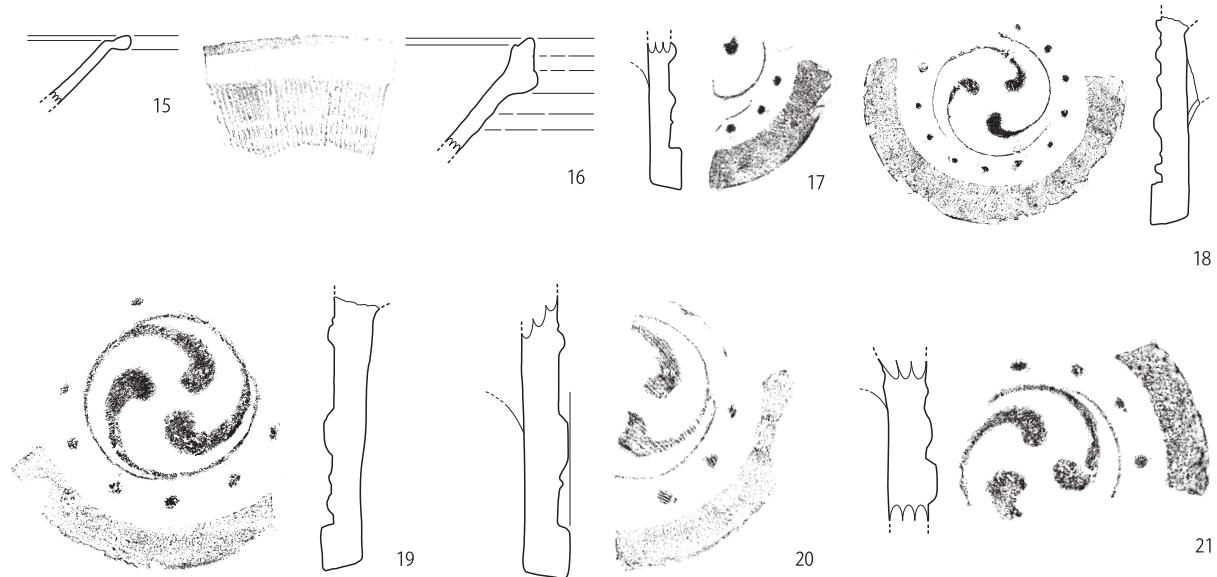
搅乱 (第38図1~16) 1~7は搅乱1からの出土である。1はガラス製のインク瓶である。ねじ巻き式のキャップの上に「poplar6」の銘が見られる。中身は黒色インクだったと思われる。2はガラス製容器で底部裏側に「フェキ」と陽刻されていることからフェキ糊の容器か。3はガラス製のグラスの破片か。4~7は平瓦、棟瓦で、4には「永治良●」、5には「細瓦師永治良●」、6、7には「引合」の印がそれぞれ刻まれる。8は搅乱2から出土した肥前陶器の皿である。9、10は搅乱坑8からの出土。9は龍泉窯系青磁皿、10は土製品で移動式竈の窓部か。11~14は搅乱坑9から出土した。11は中国産の青花皿でB群に該当する。12は肥前染付の皿、13は土師質の皿、14は陶製のマグカップで把手が欠損している。15、16は搅乱坑12より出土したもので、15は肥前産と思われる青磁の皿もしくは盤である。内面には文様が陽刻される。色調は青緑色をおびる。16は肥前陶器の瓶で把手が欠損する。色調は黒色を呈す。

トレンチ、検出時 (第38図18~20) 17、18は肥前染付で焼き継ぎがなされる。17の底部裏側に焼き継ぎ文字が記される。19は軟質の施釉陶器、20は肥前産の青磁盤もしくは皿で、底部は蛇の目高台で、その内側には鉄錆が塗られる。

SX032

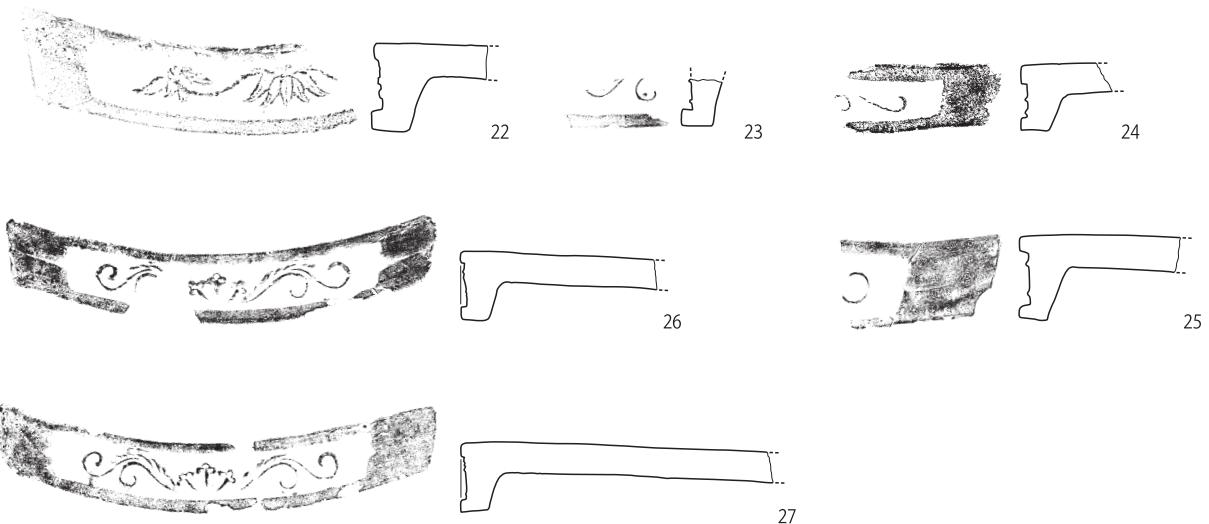


SX033(S-33・43・44)

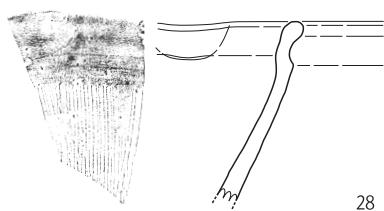


第29図 SX032・033 (033・043・044) 出土遺物 (1/4)

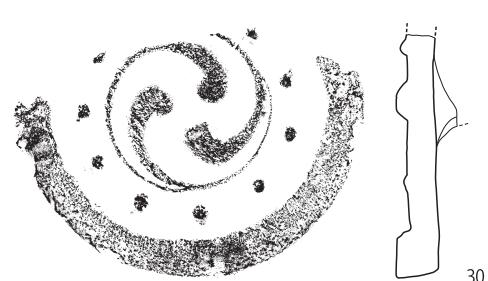
SX033(S-33)



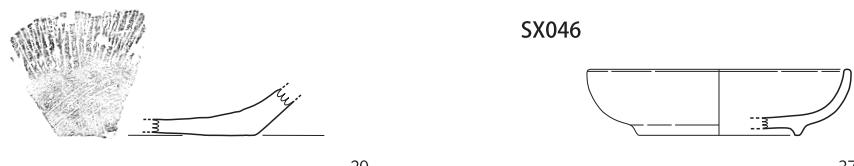
SX033(S-43)



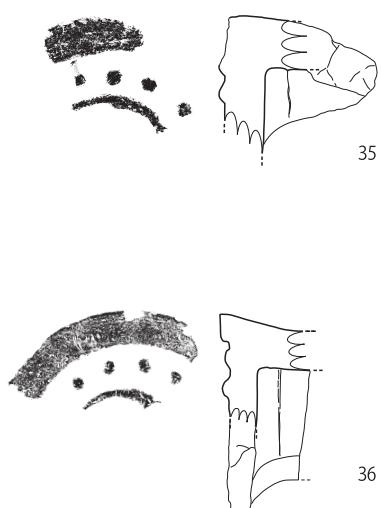
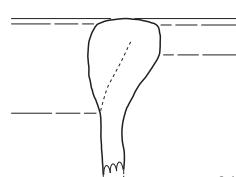
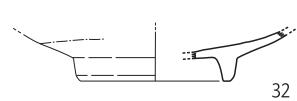
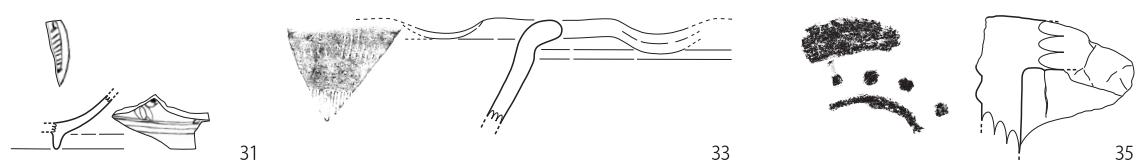
SX033(S-44)



SX046

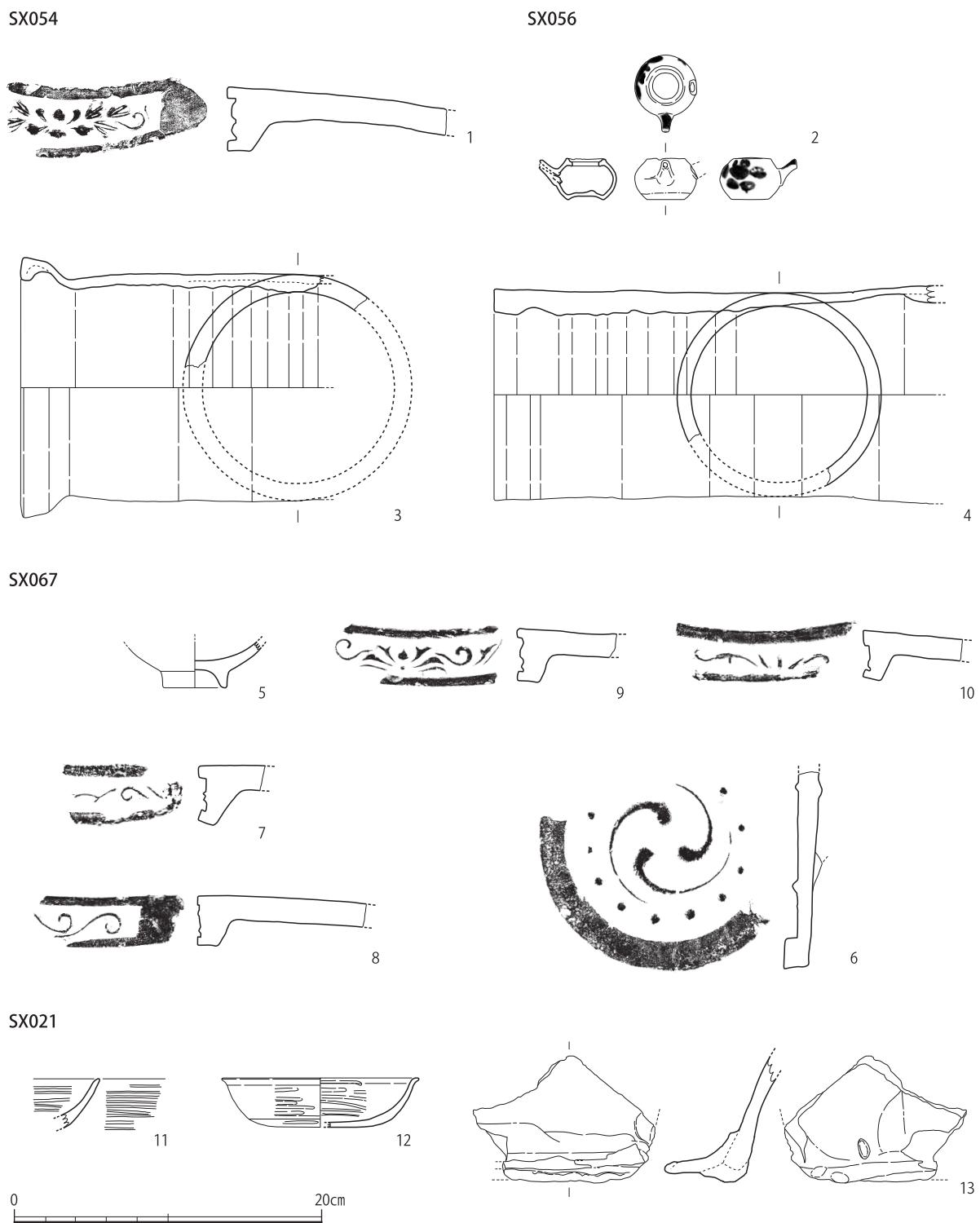


SX045



0 20cm

第30図 SX033・045・046出土遺物 (1/4)

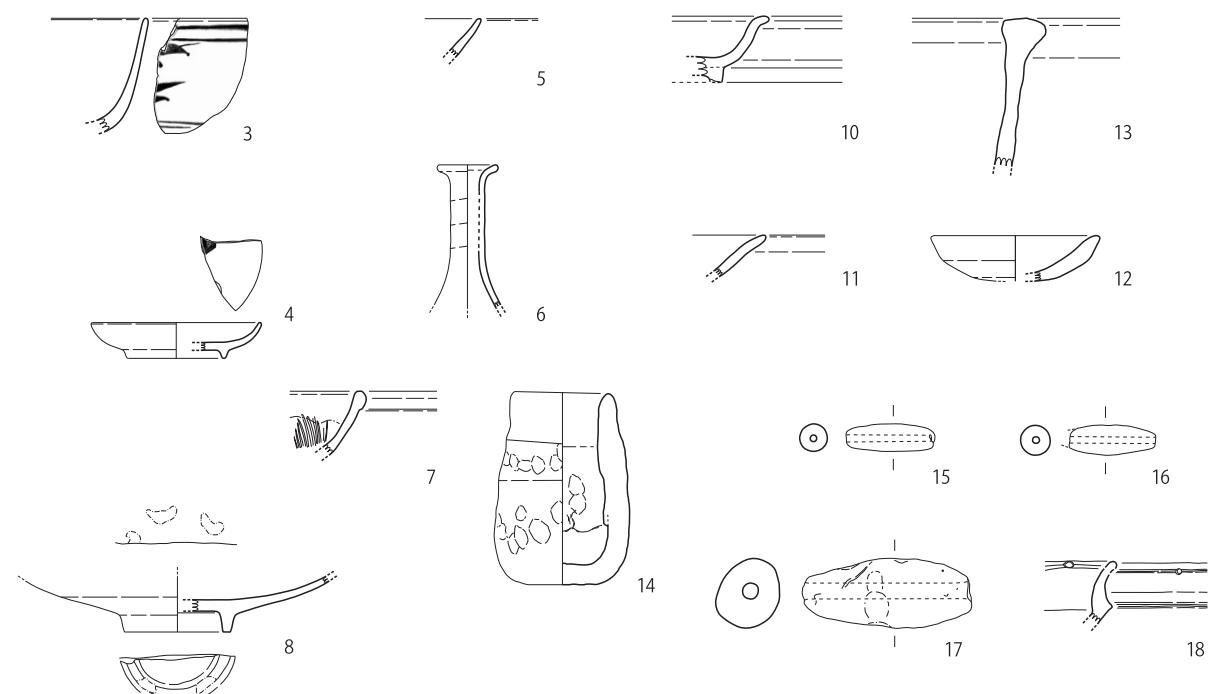


第31図 SX021・054・056・067出土遺物 (1/4)

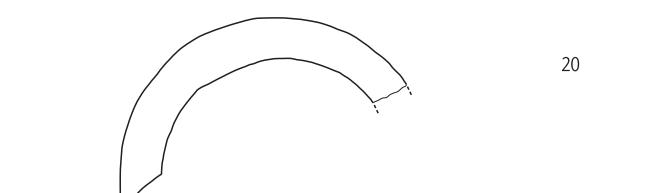
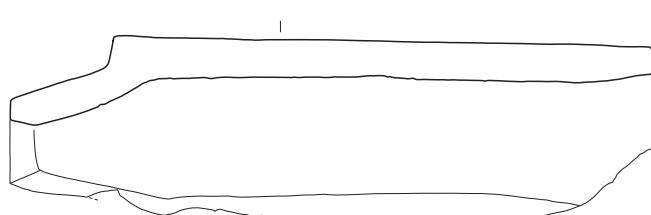
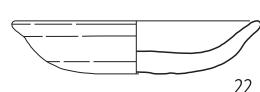
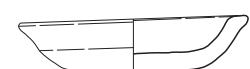
SX068



SX075

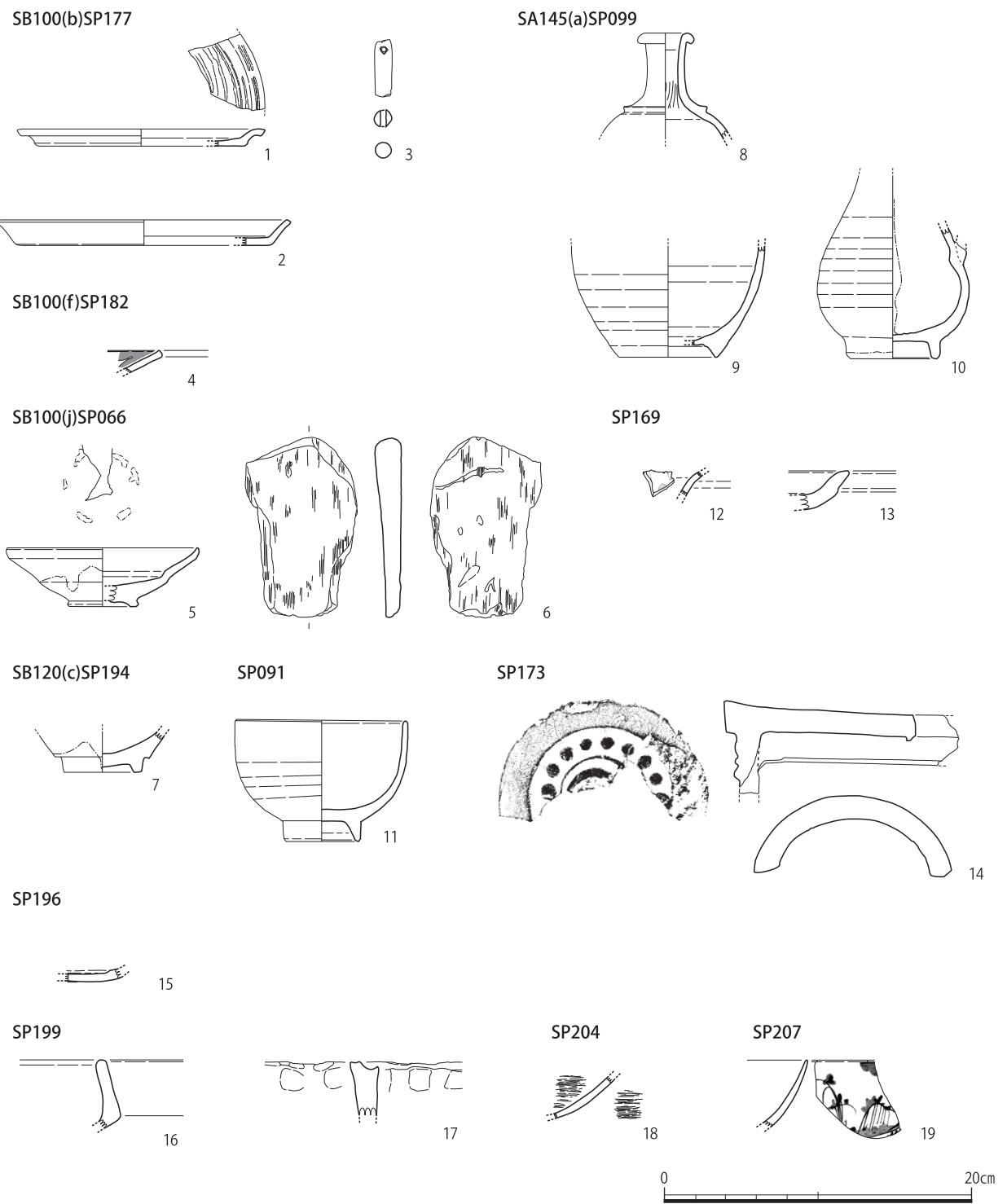


暗茶褐土



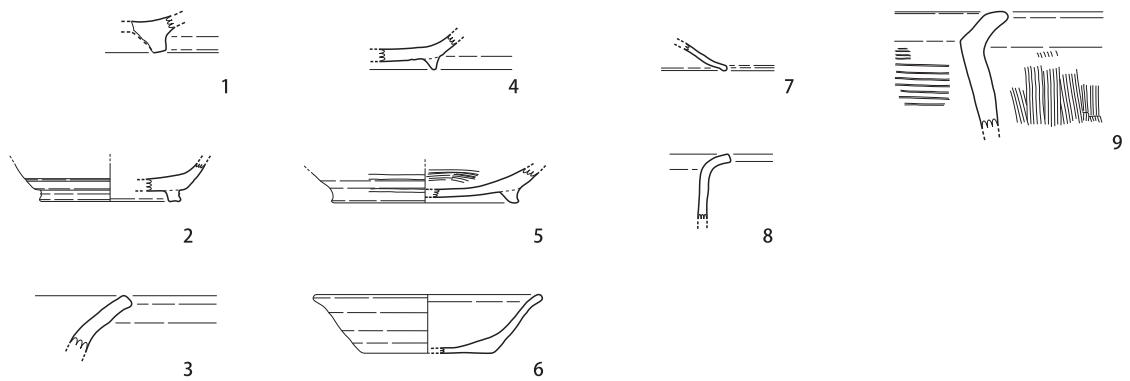
0 20cm

第32図 SX068・075出土遺物 (1/4)

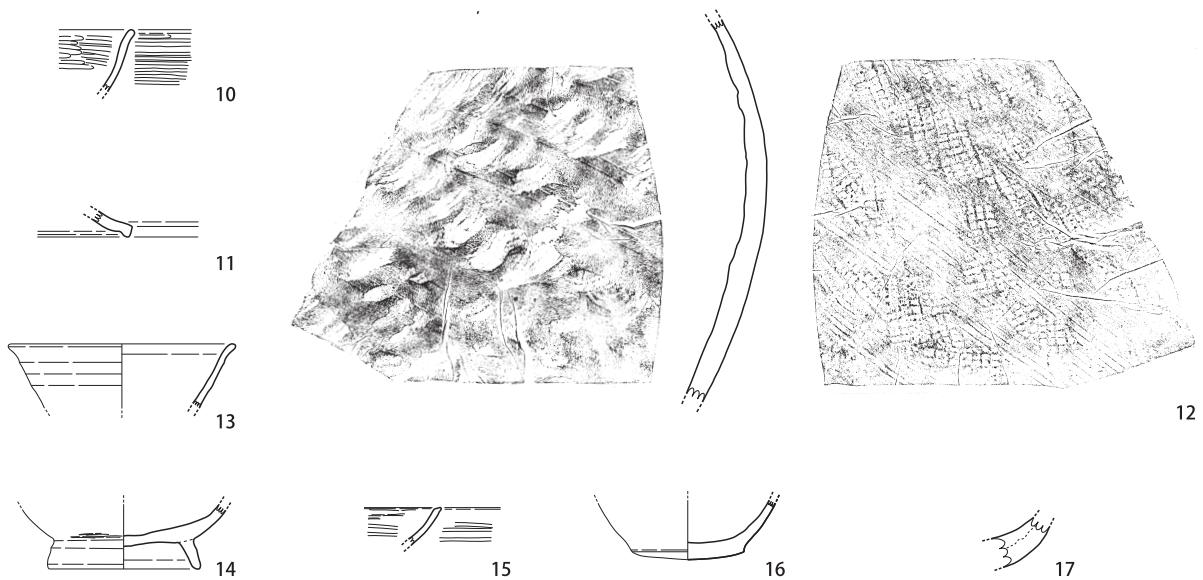


第33図 SB100・120、SP091・169・173・196・199・204・207出土遺物（1/4）

SE085

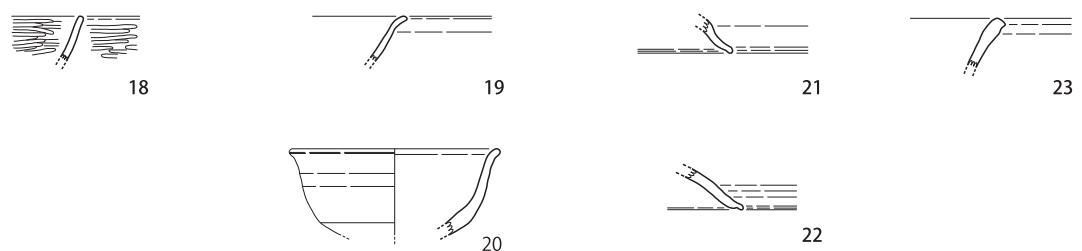


SE085井筒内

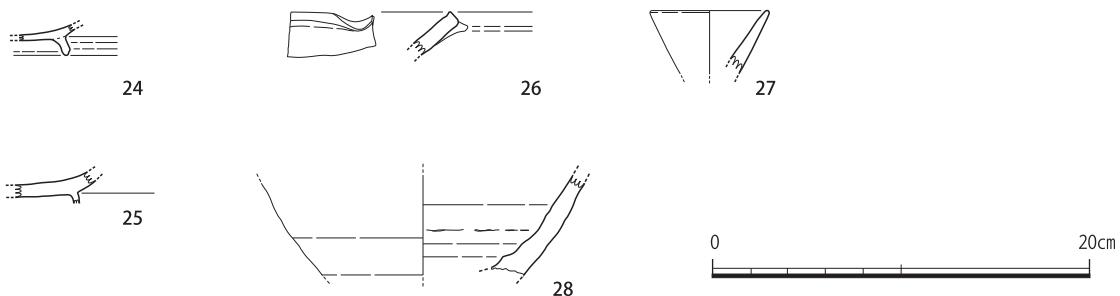


SE085井筒灰色粘土

SE085井筒砂層

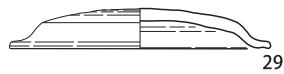


SE085裏込め



第34図 SE085出土遺物 1 (1/4)

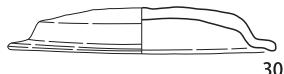
SE085裏込め(灰茶土)



SE085裏込め



SE085裏込め(灰茶土)



SE085裏込め



31

SE085裏込め(灰茶土)



46



34



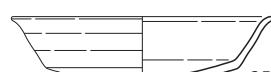
37



40



43



35



38



41



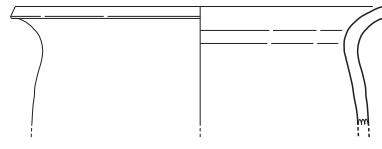
36



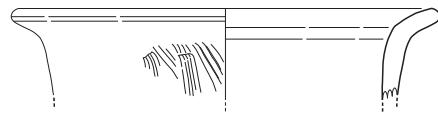
39



42



44

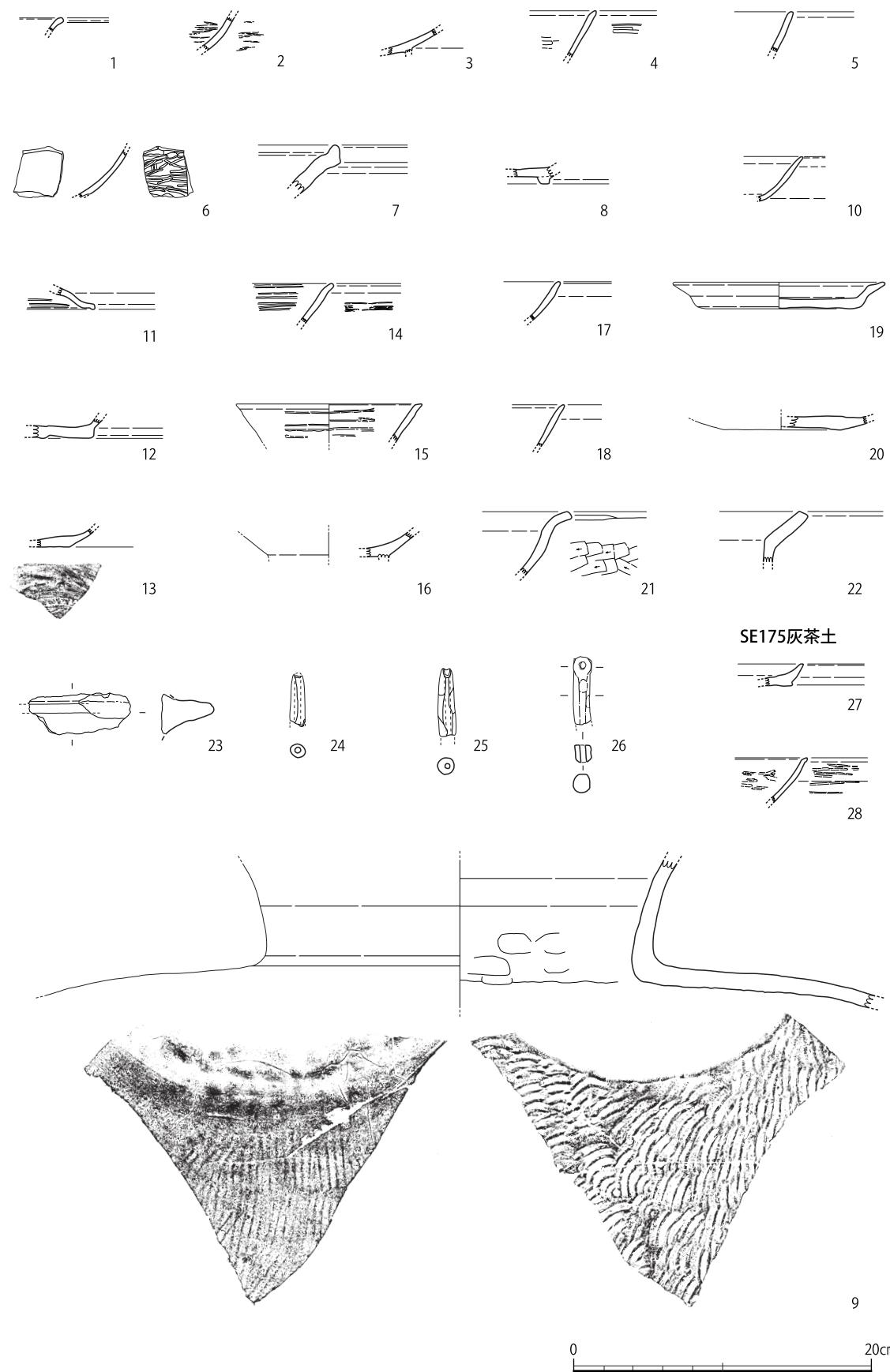


45

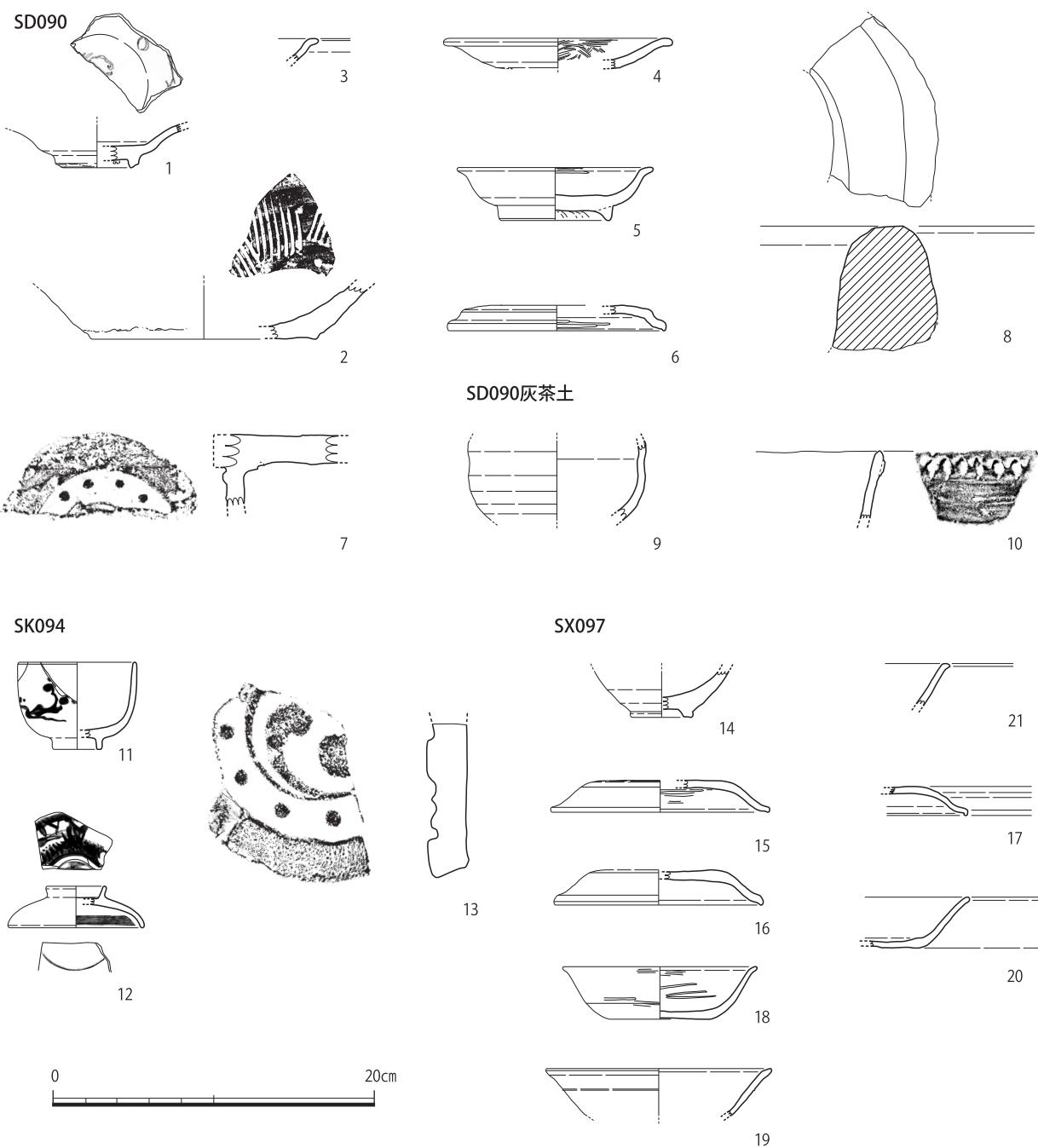


第35図 SE085出土遺物 2 (1/4)

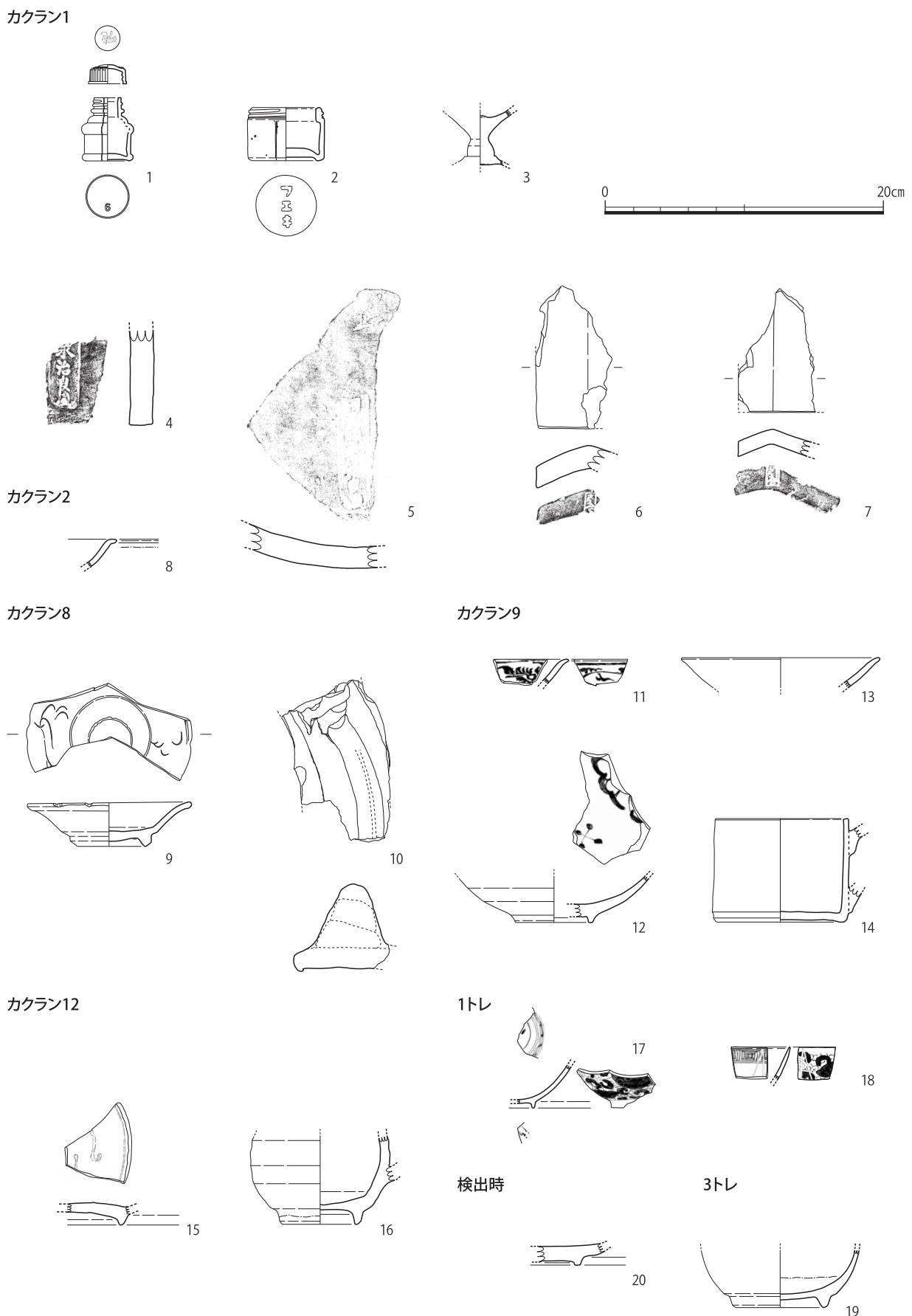
SE175



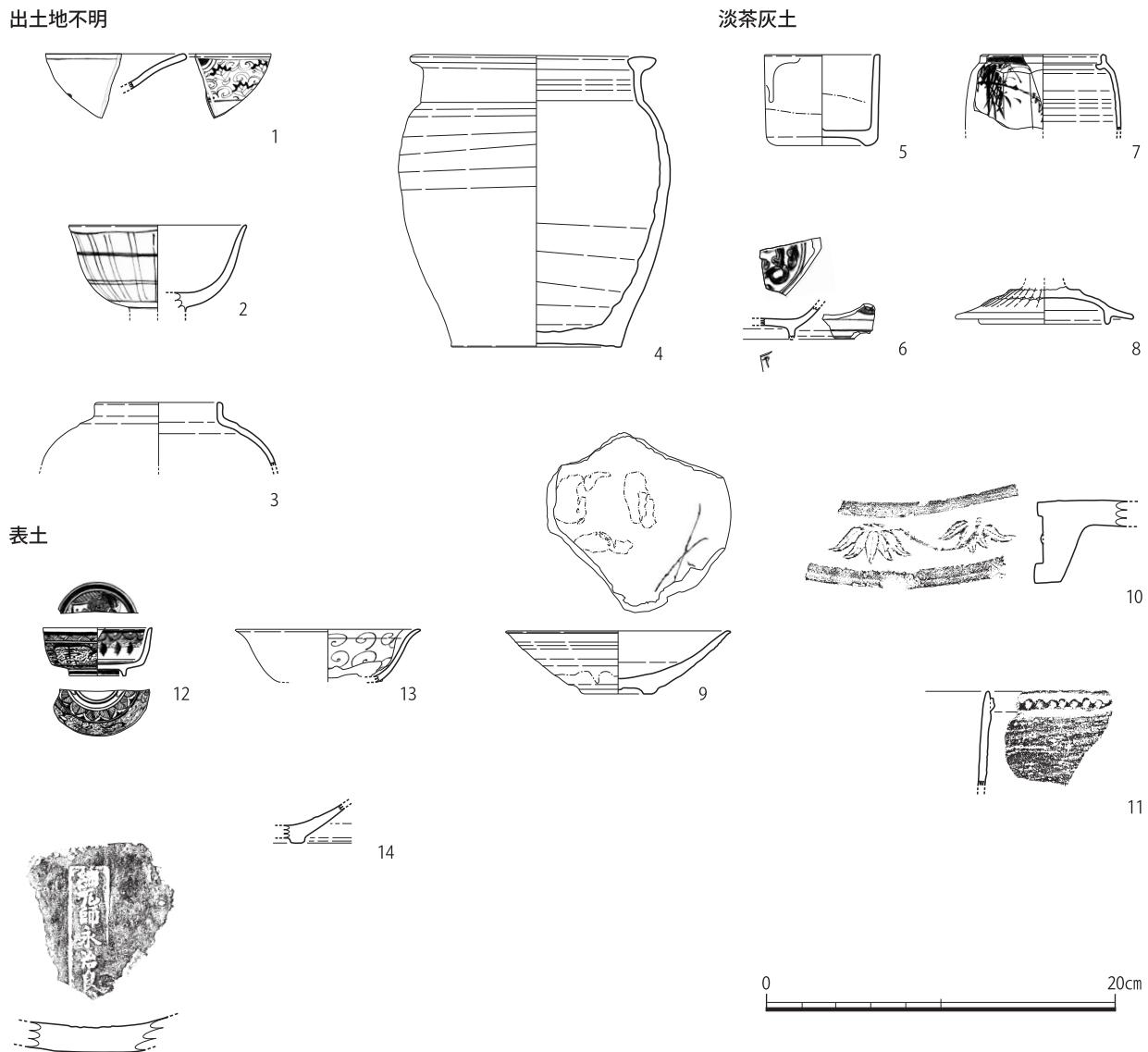
第36図 SE175出土遺物 (1/4)



第37図 SD090、SK094、SX097出土遺物 (1/4)



第38図 搅乱、試掘トレンチ、遺構検出時出土遺物 (1/4)



第39図 出土地不明、淡茶灰土、表土出土遺物 (1/4)

出土地不明 (第39図1～4) 1は肥前染付の皿、2は2重線文が描かれる碗、3は焼締陶器短頸壺、4は肥前陶器の甕で、17世紀代に位置づけられるものか。

淡茶灰土 (第39図5～11) 5は白色の陶器製コップ、6は中国産の青花碗でE群に該当する。7は合子と思われ、外面に竹筐文、雷文が描かれる。8は白磁の土瓶等の蓋である。9は肥前陶器の皿で、内面に鉄絵が描かれる。見込みに3ヶ所砂目が付着する。10は軒平瓦で、筐葉文が中心飾りに付される。11は縄文土器の深鉢で口縁端部に刻目突帯が付けられる。

表土 (第39図12～15) 12は直接絵付けが行われる赤絵の小皿である。13は染付け皿で、内面はゴム版刷りが行われる。15は「細瓦師永治良●」の銘が押される瓦破片である。

第4節 B区の遺構と出土遺物

A 遺構

(1) 井戸跡

SE144 (第40図) B区中央で検出され、コンクリート基礎へと広がっていくため、全体規模等は不明である。井筒部と思われる円形プラン及び落ち込みが確認されたことから井戸跡と判断した。また、上面は土師質甕の廃棄遺構が認められた。

(2) 柱穴遺構

SP107 (第7図) B区中央で検出されるピットで、ガラス製のインク瓶が出土する。

SP140 (第40図) B区南東部で検出される礎板建物の柱穴である。径約1m、深さ約0.35m、平面円形プランを呈す。柱が想定される部分に長方形の扁平石が置かれていた。但しSP140の対となる柱穴は確認されていない。

SP142 (第7図) B区北辺中央で確認されるピットで、SK124に掘り込まれる。

(3) 便所遺構

SW131・132 (第40図) 調査区の南側中央付近で検出される埋甕遺構である。それぞれ、土師質甕の底部から体部にかけて断片的に残っていた。SW131は径0.6m程の円形プランの土坑を掘削し、その中に甕を埋め置いていた。SW132も同様であるが、大半はSW131により掘り込まれている。131・132の甕内面には黄白色の付着物が認められ、ともに便所として使用された可能性が高い。

(4) 道路状遺構

SF150 (第7図) A区で確認されたSF005の延長部である。土層観察から硬化面は2層認められたが、A区の様な茶色土の硬質土層は存在しない。

(5) 石組み遺構

SV130 (第40図) 調査区南中央で確認され、SW132により一部掘削される。1辺約1m、深さ約0.6mを測り、平面方形を呈す。底面には人頭大程の礫が2段組みで四角形に置かれ、その上位には、小振りの礫が隙間を詰めるように配置される。埋土は、ほぼ灰褐色の砂質土の単一層であり短期間で埋められたと思われる。また、底部部は硬質の黄灰色沈着物層が分布するが、土色が異なる円形プランが認められた。桶や甕などの何らかの容器が設置していた可能性が考えられ、その用途として井戸跡または便所跡などが推測される。

埋土中からは17世紀代の範疇で捉えられる遺物が出土しており、SV130の時期もそこにおかれる。

(6) 土坑

SK103 (第41図) 調査区中央で検出され、南北約2.9m+α、東西約2.3m+α、深さ約0.6mを測り、平面長方形を呈す。遺物の出土状況から廃棄土坑と考えられる。

SK104 (第7図) 調査区南側、三和土で固められた礫（近代建物の基礎か）の下位で検出され、よって完全な掘り上げができなかった。当初は近代以降の搅乱坑と考えていたが、出土遺物の様相が古いことから近世段階の遺構と判断した。

SK108・136 (第41図) 調査区中央東よりで検出され、コンクリート基礎を間に挟む。長辺約1.7m、短辺1.5m、深さ約0.4mを測る。内部から土師質甕の破片が出土していることから埋甕遺構であった可能性がある。

SK119 (第42図) 調査区中央やや北で確認され、南北約2.7m、東西約0.6m、深さ約0.5mを測り、平面は溝状、断面形は擂鉢状を呈す。

SK121 (第42図) SK119の西側で検出され、深さ約0.8mの廃棄遺構である。埋土からは肥前陶磁器、関西系陶器などが出土地している。

SK122 (第42図) 調査区の南辺で確認された埋甕遺構であり、大部分が壁面に引っかかるため、遺物の取り上げができなかった。

SK124 (第42図) 調査区の北西部で検出される。径約2m以上、深さ約1mを測り、平面不整形の円形プランを有す大型の土坑である。土層から複数の掘り返し痕が認められること、地盤が砂層であることから規模が大

きくなったと考えられる。

SK128（第42図） 調査区の南側で確認され、径約0.7m、深さ約0.2mを測り、平面円形を呈す。検出時、埋土中には拳大の礫が含まれていた。

SK129（第42図） SK128の北側で検出され、径約1m、深さ約0.6mを測り、平面形は不整な方形を呈す。SK128同様、埋土上位には礫が含まれていた。SK128・129は、配置状況等から埋甕を抜き取った後に残った掘り込みの可能性が高い。

SK143（第43図） 北東トレンチ西側で検出し、南北約1.8m、東西約2m、深さ約0.3mを測り、平面歪な方形を呈す。掘り下げを進めると、やや大型の礫が出土した。

SK146（第43図） 調査区中央東側で検出し、長辺約1.3m、短辺約0.9m、深さ約0.48mを測り、平面隅丸長方形、断面擂鉢状を呈し、小規模なテラスを有す。

SK147（第43図） 調査区の中央付近で検出され、長辺約1.3m + α、短辺約0.8m + α、深さ約0.8mを測り、平面長方形を呈す。埋土は3層からなり、繊維状の炭化物を多く含み、中位～下位にかけてはやや湿り気を有していた。

SK151（第43図） SK151～153は、大型の掘り込み遺構（SX111）の下位で検出される土坑である。一部搅乱坑により掘削されるが、径約1.4m、深さ約0.3mを測り、平面円形を呈すと思われる。内面にピットの様な掘り込みがあり、段掘りをなす。

SK152（第43図） 南側トレンチ付近で検出され、長辺約1.4m、短辺約1m、深さ約0.65mを測り、平面隅丸長方形を呈す。

SK153（第43図） SK152の西側で確認される。径約1.3mの円形プランを有し、深さ約0.3mを測る。

(7) 性格不明遺構

SX105（第7図） 調査区中央から南側で認められる灰色土を主体とする小規模な整地プランである。

SX110（第4図） 調査区南壁沿いで見られる包含層または整地土である。

SX111（第4図） SK151～153の上位で検出された大型の掘り込み遺構である。但し搅乱坑、コンクリート基礎、トレンチ等で掘削されているので全体規模は不明である。土層を観ると、単一層で構成されていることから、短期間で埋められたものと考えられる。

SX101・102（第7図） 調査区の西側で確認された整地もしくは溜り状の遺構である。但し、完掘した状況では溝状の掘り込みを有している。埋土は灰色土を主体とする。新旧関係上最も新しい段階に位置づけられる。

SX104（第4図） 調査区南東部で発見され、当初は現代の建物基礎の掘り込みと判断していたが、埋土や遺物の様相から近世段階の廃棄遺構の一部と考えられる。

SX106（第4図） 調査区中央で検出されるが、コンクリート基礎により分断されることから詳細は不明である。廃棄遺構等の一部の可能性がある。

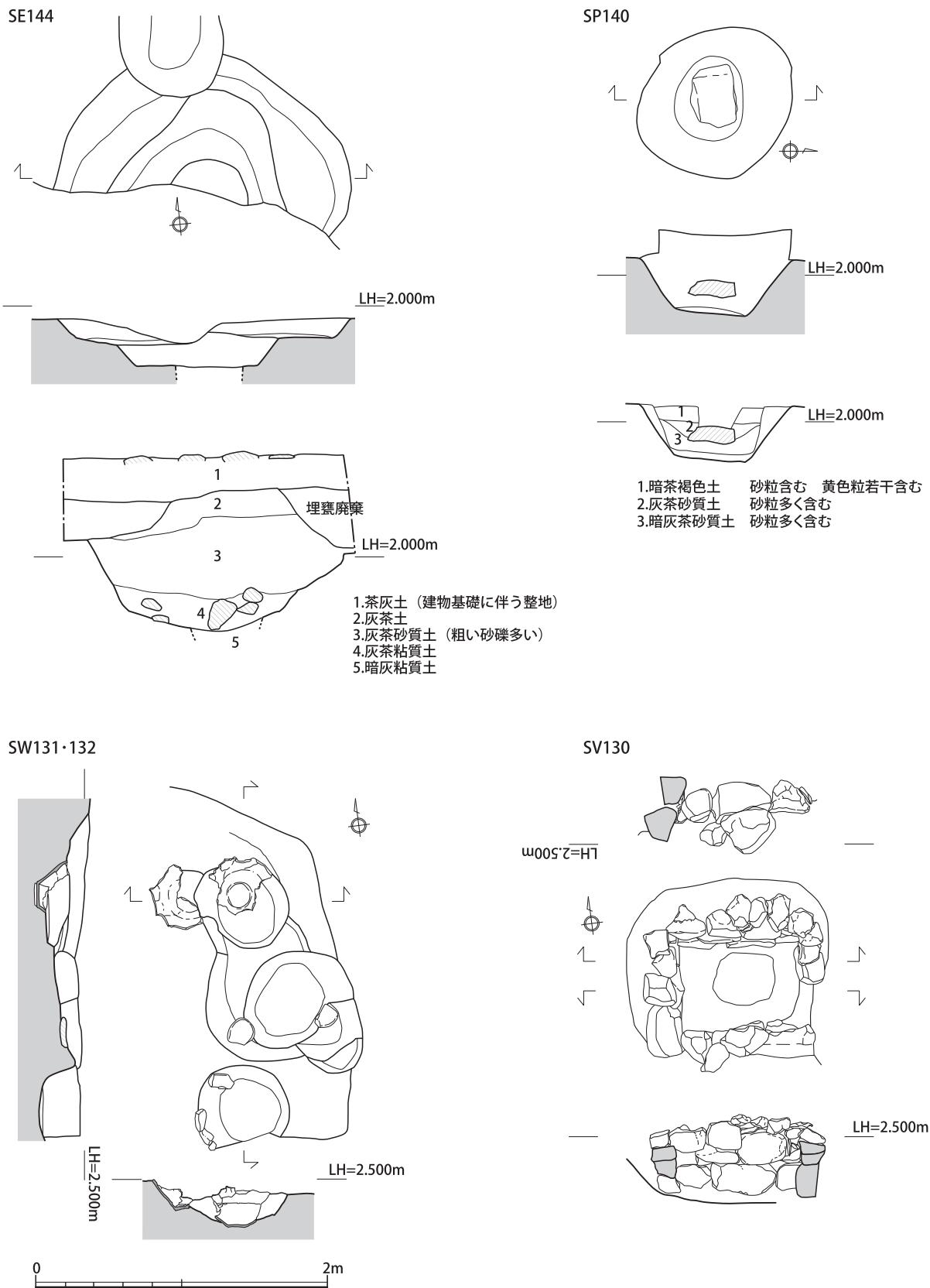
SX112（第4図） 調査区中央で確認され、それぞれ土坑の一部と思われる。

SX118（第4図） 調査区中央で検出される大型の掘り込みである。調査段階では現代建物の浄化槽設置に伴う掘り込みと考えていたが、出土遺物の様相や埋土の状況から江戸時代の遺構となる可能性がある。上位に建物基礎等があることから全てを掘り上げることはできなかったが、遺構底面には瓦が大量に廃棄されていた。

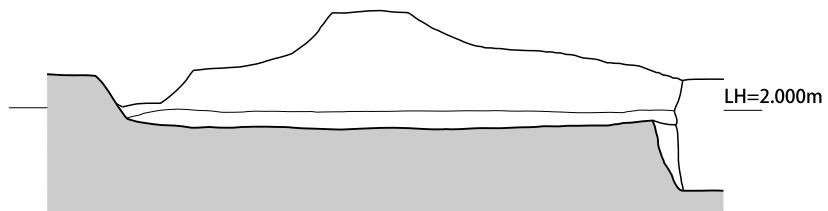
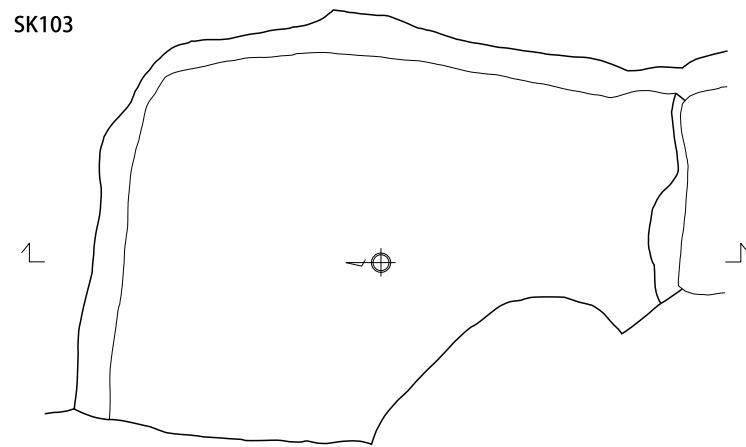
SX126（第7図） 中央で検出される溝状を呈す遺構である。廃棄遺構等の一部か。

SX134（第7図） SE144の上位で検出される埋甕遺構である。甕は全て潰れた状態で出土した。その形状はSK108やSK121のものと同様である。

SX139（第4図） 調査区北側で確認される暗茶色土を主体とする溜まり状遺構である。廃棄遺構等が削平を



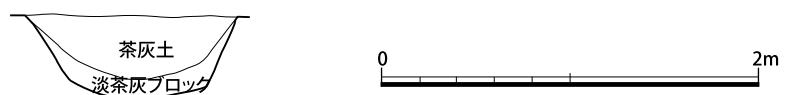
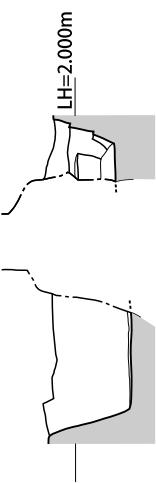
第40図 SE144、SP140、SW131・132、SV130実測図 (1/40)



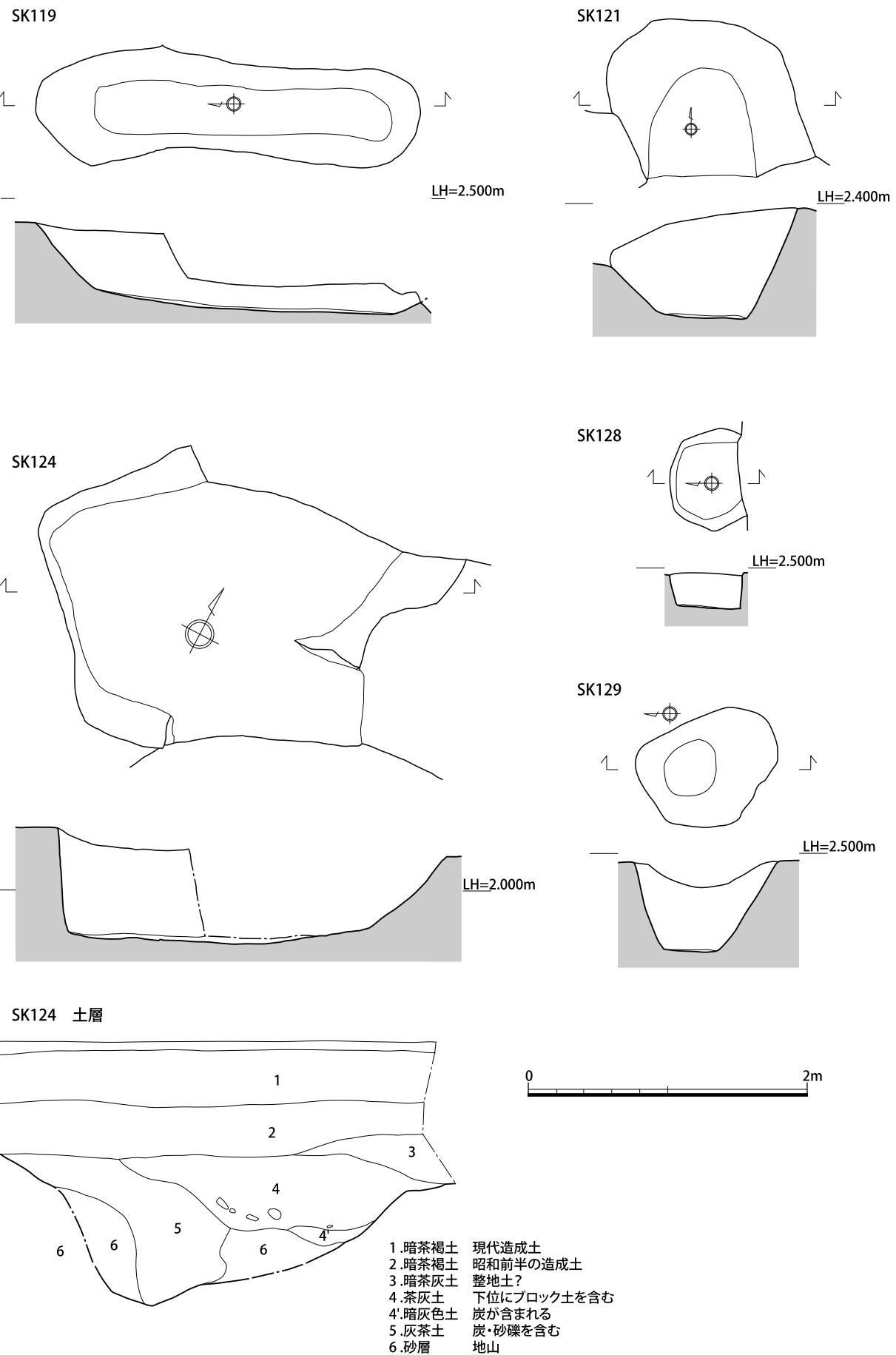
模式図



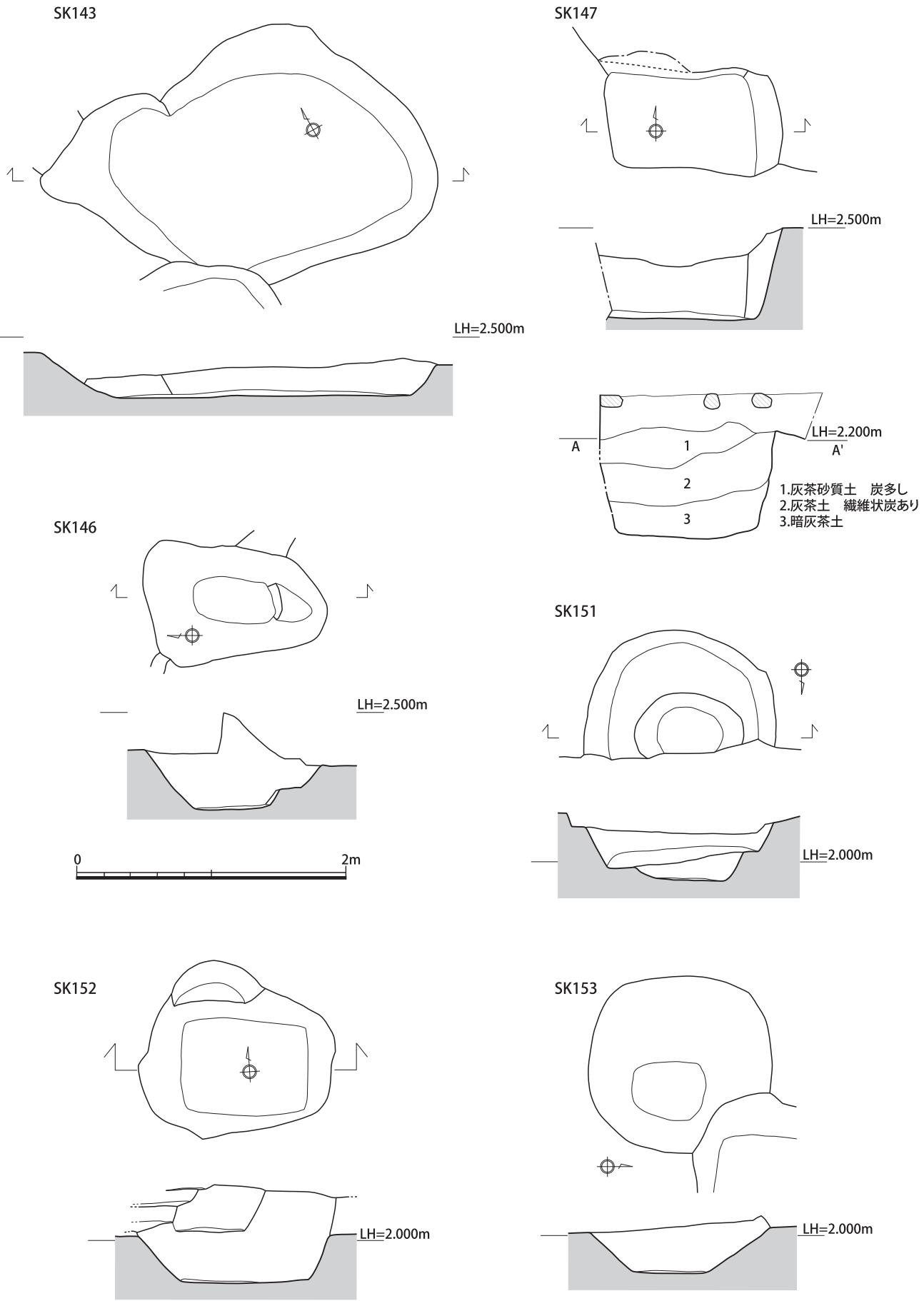
SK108



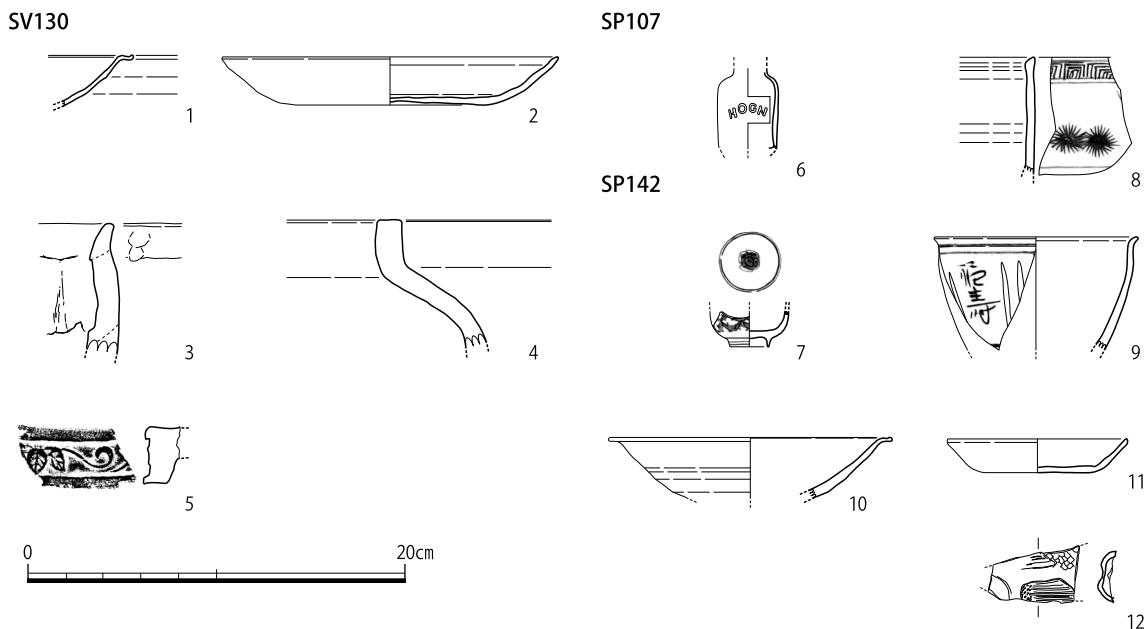
第41図 SK103 (114)・108実測図 (1/40)



第42図 SK119・121・124・128・129実測図 (1/40)



第43図 SK143・146・147・151～153実測図 (1/40)



第44図 SV130、SP107・142出土遺物（1/4）

受けたものか。

B 出土遺物

(1) 石組み遺構出土遺物

SV130（第44図1～5） 1は肥前陶器の溝縁皿である。2は非ロクロ系の土師質土器皿で、器壁は4mm前後と非常に薄い。底部から体部は緩やかに立ち上がり、端部はやや内側に屈曲する。精製土を使用し、丁寧なナデ仕上げが行われる。法量は口径17.8cm、器高2.6cm、底部（平部）10.0cmを測る。3は焼塙壺である。断面及び内面に輪積み痕が認められ、口縁部と体部の境は明瞭で、口縁は短く外反する。口縁の形状はやや異なるが、調整や体部様子から府内城三の丸遺跡SK023出土のものと類似する。4は瓦質土器の壺又は釜の口縁部、5は三葉文が中心飾りに描かれる軒平瓦である。

(2) 柱穴遺構出土遺物

SP107（第44図6） 6はガラス製容器で外面に「HOGN」の文字が陽刻される。

SP142（第44図7～12） 7は肥前染付けの盃、8は染付の鉢、9は17世紀前半代の染付碗で、ヘラ彫りによる片筋文が刻まれる。10は肥前陶器の溝縁皿である。11は土師質の皿で、非ロクロ系である。12は玩具で、魚形土製品である。

(3) 土坑出土遺物

SK103（S-103、S-114第45・46図1～30） 1は肥前染付で、天目型を呈す。外面にはヘラ彫りによる片筋文が刻まれる。2は肥前陶器碗で乳白色の釉調を呈す。3は青磁碗で、見込みには梅花文が描かれる。4は肥前陶器の溝縁皿で、見込みには3ヶ所砂目積み痕が残る。高台は低い。施釉は漬けがけにより行われている。5は青磁染付の筒型碗の口縁部である。6は非常に薄手の盃の高台部で、見込みには松や山などの風景画が描かれる。瀬戸美濃産か。7はやや小振りの碗で、外面に草文が施文される。8は肥前染付の端反り碗で、焼き継ぎがされている。外面には俵から稻の芽が生えている状況を描いた絵付けがなされる。9は肥前陶器の火入れか。藁灰釉に乳白色釉が重ね塗りされている。10は肥前産と思われる徳利で、内外は緑灰色の釉調を示す。11は瓦質土器の浅鉢で、口縁は内に曲げられ玉縁状を呈す。仏具に関するものか。12は手捏ねによる土師質土器の皿で、外面に

は指押さえによる整形の痕が顕著に残る。13、14は瓦質の焜炉、15は絵唐津皿を利用した加工陶器片。16は小型の筒型碗で外面には輪状文が描かれる。17が見込みに稚拙な五弁花文が、外面には菊花文、四方襷が描かれる。18は口縁端部に鉄釉が塗られ、器面全体は暗い瑠璃色をなす。内面には文様が陰刻される。19は肥前染付碗、20は外面に牡丹文等が描かれる。21は端反り碗で、濃筆による簡略化した絵付けが行われる。22は肥前染付蓋で、外面には若松文等が認められる。23は段重物の蓋で、外面には龍文が描かれる。内面には焼継文字が記され「・田氏」と読める。24は肥前染付大皿で焼き継ぎ痕が残る。25は肥前産の紅皿。26は青磁徳利の破片。27は器種不明の陶胎染付で、高台は粗く削られ整形され、鉄釉が塗られる。見込みは青く発色し、胎土中に黒色粒子を多く含む。28は関西系陶器の土鍋、29は肥前陶器の擂鉢口縁部である。30は用途不明の瓦質の製品である。図面で見ると、左側面・下側・断面逆L字の上部分は使用面そのままなので、上側へと伸びると考えられる。1ヶ所焼成後に穿孔されており、2次使用がされている可能性があり。胎土中には金雲母が多く含まれる。

SK108 (S-108、136第46図31~41) 31は肥前染付の蓋、外面には唐草文の上に梅花文が描かれる。焼き継ぎがされており、内面に「瀬右衛門」と焼継文字が記される。32は肥前陶器鉢で、イッチン掛けが行われ、口縁～体部には褐釉が、高台は丹塗りが施される。焼き継ぎ痕あり。33～35は型押しにより整形された土製人形で、袴姿を模った女性の人形と考えられる。36は馬の足を模った土製玩具である。37は煙管の雁首、38は板状の石製品で、硯の大部分が剥離したものか。39は肥前染付の盃か。40は関西系陶器碗、41は軒平瓦の瓦当部で細線の唐草文が認められる。

SK121 (第46・47・48図42~100) 42～45は肥前産の紅皿で、外面に縦方向の筋目が入る。46、47は染付紅皿である。48は外面にコンニャク印判が付される染付皿である。49は白磁小碗、50は肥前染付小碗で、コンニャク印判が押される。高台は切高台を呈す。51～54は信楽系陶器碗で51、52は小杉碗と呼ばれるタイプ。55、56は筒型碗で、55は外面に矢文、56は若松文が描かれる。57は青磁碗、58、59は透明釉がかかる丸碗で、関西系か。60は瀬戸美濃産と思われる染付碗、61は関西系碗、62は肥前染付碗で見込みに手描きの五弁花文、外面には松・若松文が描かれる。63は焼き継ぎがされる染付碗、64、65は広東碗でともに外面に稻文が描かれる。64は瀬戸美濃産か。66は肥前染付蓋、67は染付皿で内面に唐草文、見込みには手描きの五弁花文が認められる。68は独楽型の皿で、見込みには磯文が描かれ、口縁端部には鉄釉が塗られる。69は染付蓋、70は小型の染付瓶、71は青磁の瓶で花入れか。72、73は萩産の天目茶碗、74は福岡産と推定される陶器碗。75は肥前内野山産の皿、76は肥前陶器の碗である。77、78は肥前陶器碗、皿とともに乳白色に施釉される。79は肥前陶器甕、80、81は肥前陶器鉢で、いわゆる刷毛目唐津である。82は肥前産と思われる火入れで、蛇の目高台に鉄釉が塗られる。83は陶胎染付の鉢(火入れか)で、外面に筐文が描かれる。84、85は焼締陶器擂鉢で、備前もしくは堺産である。86、87は九州系陶器の土瓶である。88は関西系陶器の土鍋、89は瓦質の小壺口縁部である。但し、形状が焼き塙壺に類似する。90は鬚水入れと思われる容器で、小判形を呈す底部から直立する体部を有す。橙色の胎土に乳白色の釉が掛けられる。肥前産と推定される。91は土師質大甕の口縁部、92から94は土師質土器の焙烙である。器高はやや浅めであり、口縁部はくの字状に屈曲する。底部は平底を呈す。96は球形をなす銅製の鈴である。97は赤絵が施される土製玩具で、鳥を模したものと思われる。98は赤ん坊を模った土製人形である。99は簪(かんざし)で青銅製である。100は砂岩製の硯で、陸部に墨の痕跡が残る。

SK124 (第48図1~22) 1は紅皿、2は青磁染付の筒型碗、3は京焼風陶器碗、4は信楽系の碗である。5は陶胎染付碗、6は肥前産の染付碗である。7、8は肥前染付の皿で、ともに蛇の目高台を呈す。7は高台部分が意図的に磨かれている。9は色絵皿、10は瓶の口縁部で鉄釉が施される。胎土は灰色で、黒色粒子を多く含む。11は産地不明の陶器鉢で、口縁端部は外側に曲げられ、断面コの字状となる。12、13は関西系陶器の土鍋、土瓶蓋である。14は瀬戸美濃産の陶器で、小壺である。15は肥前陶器の甕で内外に叩き痕が認められる。16は陶器製で、筒型を呈す。上面にはユニークな顔をした龍が描かれる。何らかの容器の栓か。17は焼締陶器の皿、18、19

は瓦質の七輪、20が瓦質の焜炉である。21、22は軒平瓦、軒丸瓦で、21は三葉文が中心飾りに描かれる。23が魚形の土製玩具、24は煙管の吸い口か。

SK128・129（第49図1、2） 1は萩焼の天目茶碗、2は堺または備前産の擂鉢口縁部。

SK146（第49図3～6） 3は肥前産の蓋付碗と思われ、見込みには竹箇文が描かれる。18世紀前半～中頃のものか。4は見込みに草花文が描かれる皿で、底部外面に針支え痕跡が1ヶ所残る。5は青磁の盤で、底部外面に砂目が1ヶ所認められる。6は鉄製の包丁で、切っ先部と刃先は欠損する。その形状から今でいう和包丁の薄刃包丁のようなものであろう。

SK147（第49図7～13） 7は17世紀前半に位置づけられる天目形の染付碗である。8は関西系陶器の土瓶蓋で、つまみは耳皿状の形をする。9～11は手捏ねの土師質皿である。9は煤が多く付着する。10の内面には中世の京都系土師器で見られるような2の字ナデの痕跡が残る。11は体部と口縁部の境に明瞭な段が見られる。12は三葉文が中心飾りにある軒平瓦、13は骨片であるが、磨耗または磨かれているためか表面が滑らかである。

SK151（第49図14～16） 14は京焼碗の形を模した丸形碗で、外面に箇文が描かれる。15は筒形碗で菊散らし文が描かれる。16は筒形碗の高台部と思われる。外面には鉄釉が施され、見込みには手描きの五弁花文が記される。

SK152（第49図17） 17は肥前陶器の溝縁皿で、見込みと高台部には砂目痕が3ヶ所認められる。

(4) 性格不明遺構出土遺物

SX105（第50図1～19） 1～3は丸形の染付碗で、1は線画のような絵付けで、輪状文の中に風景画のような絵が記される。2は外面蛸唐草文、見込みには五弁花文が描かれる。3は外面に草花（牡丹か）文が描かれる。4は龍泉窯系青磁碗、5は型打ちによる青磁皿で、口紅が施される。6、7は萩焼の天目茶碗、8は陶器湯呑み碗で、藁灰釉が掛けられる。福岡県産か。9は肥前産の呉器手碗、10も9と同様の器形であるが、全面に乳白色釉が施釉される。11が肥前陶器溝縁皿で、藁灰釉が掛けられ、見込みには砂目が付着する。12は肥前陶器皿の高台部。13が肥前陶器の香炉、刷毛目唐津で17世紀前半に該当する。14は関西系陶器の土鍋破片。15は京・信楽系の土瓶等の蓋で、イッチン掛けによる文様が描かれ、飛びカンナ痕が認められる。16は関西系陶器土瓶の蓋、18は、本来は高台があったが、剥離したため削って平底に加工した擂鉢である。内外に鉄釉が施される。福岡県産か。18は肥前陶器の土瓶である。19は手捏ねの土師質土器皿で、SV130出土のものと接合する。

SX110（第50図20、21） 20は肥前陶器甕で叩き痕が残る。21は瓦質のこね鉢で、口縁部付近にある沈線状のものはミガキの痕である。器面全体にミガキが密に行われる。

SX111（第51図1～7） 1は瓦器碗の高台部、2が肥前産白磁の瓶で、焼き継ぎがなされる。3は肥前陶器の鉢で植木鉢もしくはコタツのおとしとも考えられる。橙色を呈す胎土の上に黒褐色の釉が掛けられる。4は瓦質の火鉢と思われ、外面には細かな花文が散らされ、船の帆の様な絵が記される。また、獅子頭を模した把手が貼り付けられる。5は袈裟を着た僧侶を模した土製人形である。6、7は別固体であるが、同規格品の初期伊万里皿である。見込みには桃文が描かれる。器面全体に砂が付着し、高台部にも砂が顯著に認められる。

SX101（第51・52図8～33） 8、9は肥前染付の丸形碗で、輪状文の中にススキなどが描かれる。10は瀬戸美濃産の碗である。11は朝顔形を呈す青磁染付碗で、見込みには簡略化した五弁花が見られる。12は焼き継ぎされる肥前染付碗、13は肥前染付蓋で、焼き継ぎがなされる。14は蛇の目高台を有す肥前染付皿である。15は多角鉢で、焼き継ぎ痕が見られる。外面には雲文が描かれる。16は焼き継ぎされる八角鉢で、高台裏側には焼継文字が書かれる。17は肥前産の芙蓉手大皿である。内面には花文などが、外面には一石などの文字と書かれる。17世紀後半頃に該当か。18は色絵皿の一部、19、20は仏飯具である。21は刷毛目唐津碗、22、23は肥前磁器の天目茶碗である。ともに外面には黒褐釉が掛けられ、内面には花文などの鉄絵が描かれる。杵築城下町遺跡に類似する資料が見られ、17世紀前半に位置づけられていることから、本資料も同様と思われる。24は型押しにより整形さ

れた陶器製の托で、内面には魚文がスタンプされる。25は関西系陶器行平で、把手部には亀の顔が陽刻される。26は肥前陶器甕で、口縁部は折り曲げて平坦に仕上げている。27、28は貼り付け高台を有す擂鉢で、内外に鉄釉が塗られる。福岡産か。29は瓦質の火入れ鉢か。30は瓦質土器の焜炉で、二重焜炉の内側の筒状部となる。31、32はガラス製品で、31は香水瓶のような形をしており、32はその栓となる部分である。33は泥岩製の砥石であり、ほぼ全面にわたり使用痕が認められる。

SX106（第53図1～3） 1、2は肥前産の紅皿、3は墨書が記される陶器破片である。

SX126（第53図3～18） 3は関西系陶器の端反り碗で、外面に銅緑釉が流れる。4は焼き継ぎされる端反り碗である。蝶の絵が描かれる。5は京焼き風の陶器碗で筐文が描かれ、18世紀後半頃か。6は暗青緑色の釉調を呈す産地不明の磁器碗で、内面に雲または唐草文のような絵が陰刻される。口縁端部に口紅が施される。7は菊散らし文が見られる碗、8は小碗または盃で、焼き継ぎがされる。9は見込みに昆虫文が描かれる染付碗で、切高台を呈す。また底部に焼継文字が記される。10は肥前染付蓋。外面に獅子・唐草文が見られる。11は八角皿で、外面に唐草文、内面には蝶や松文、荒磯や船の絵が描かれる。焼き継ぎ文字有り。12は信楽系の小壺、13は肥前染付の瓶で、外面に松文が描かれる。14は志野焼の向付口縁部、15は関西系陶器の火入れ、16は産地不明の土瓶で、2次焼成を受けていたため外面に描かれる鉄絵は判読しづらい。かなり薄手で作られ、焼き継ぎがなされる。17は関西系陶器の土瓶、18は縄文土器の鉢である。

SX139（第54図1～13） 1～3は紅皿または盃、4は筒形碗で、沈線が顕著に認められる。5は染付の皿か。切高台を呈し、焼き継ぎ文字が記される。6は肥前染付碗、7は多角鉢、8は焼締陶器で擂皿、9は鉄絵が施される志野産向付、10は肥前陶器甕、11は焼締陶器擂鉢で、堺産か。12は陶器で、箱庭道具の橋か。外面には銅緑釉が施される。東大構内遺跡工学部14号館地点に参考となる資料が出土している。13は砂石製の砥石である。

SX104（第54・55図14～34） 14は紅皿、15は焼き継ぎされる端反り碗で、かなり薄手のものである。見込み部分には風景画が描かれているが、絵付けは立体的に浮いたような状況である。高台内側には「長池瀬右衛門」と焼継文字がある。16は透明釉がかけられる端反り碗である。17はそば猪口で、蛇の目高台を有す。18は筒形碗、19は花文が描かれる丸形碗、20は福の文字が見える端反り碗である。21は焼き継ぎ文字を残す鉢か、22は肥前染付碗で、龍文が簡易的に描かれる。23は白磁の溝縁皿、初期伊万里と思われ17世紀前半代に位置づけられる。24は手塙皿で、見込みに松木、山、雲などの風景画が描かれる。19世紀代に該当すると思われる。25は信楽産の蓋、26は鉄絵が描かれる肥前陶器皿、27は肥前産の擂鉢か。28は石英を多く含み、器面には鉄釉が付けられる擂鉢。福岡産か。29、30は関西系陶器の土瓶、31は志野産の向付口縁部、32は瀬戸美濃産陶器の火入れか。33は灯火具と思われ、18世紀代のものか。34は泥石産の砥石。

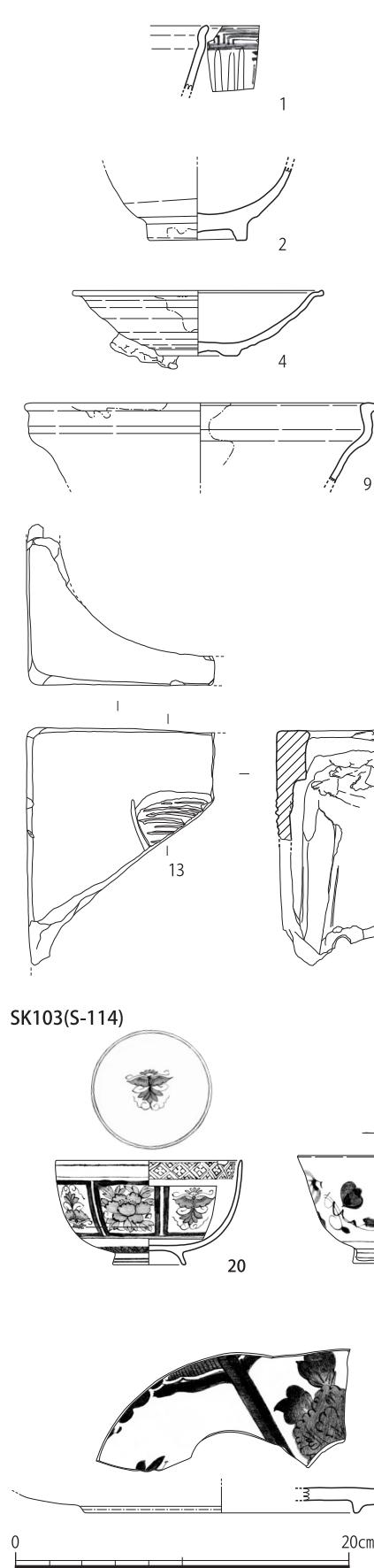
SX112（第55図35） 35は高台から丸く立ち上がり、複合口縁状を呈す。口縁部は端反り気味になる。外面には桃のようないいものが絵付けされる。関西系か。

SX118（第55図36） 36は中心飾りに六葉の花弁状文、厚肉彫りの葉文を有す。

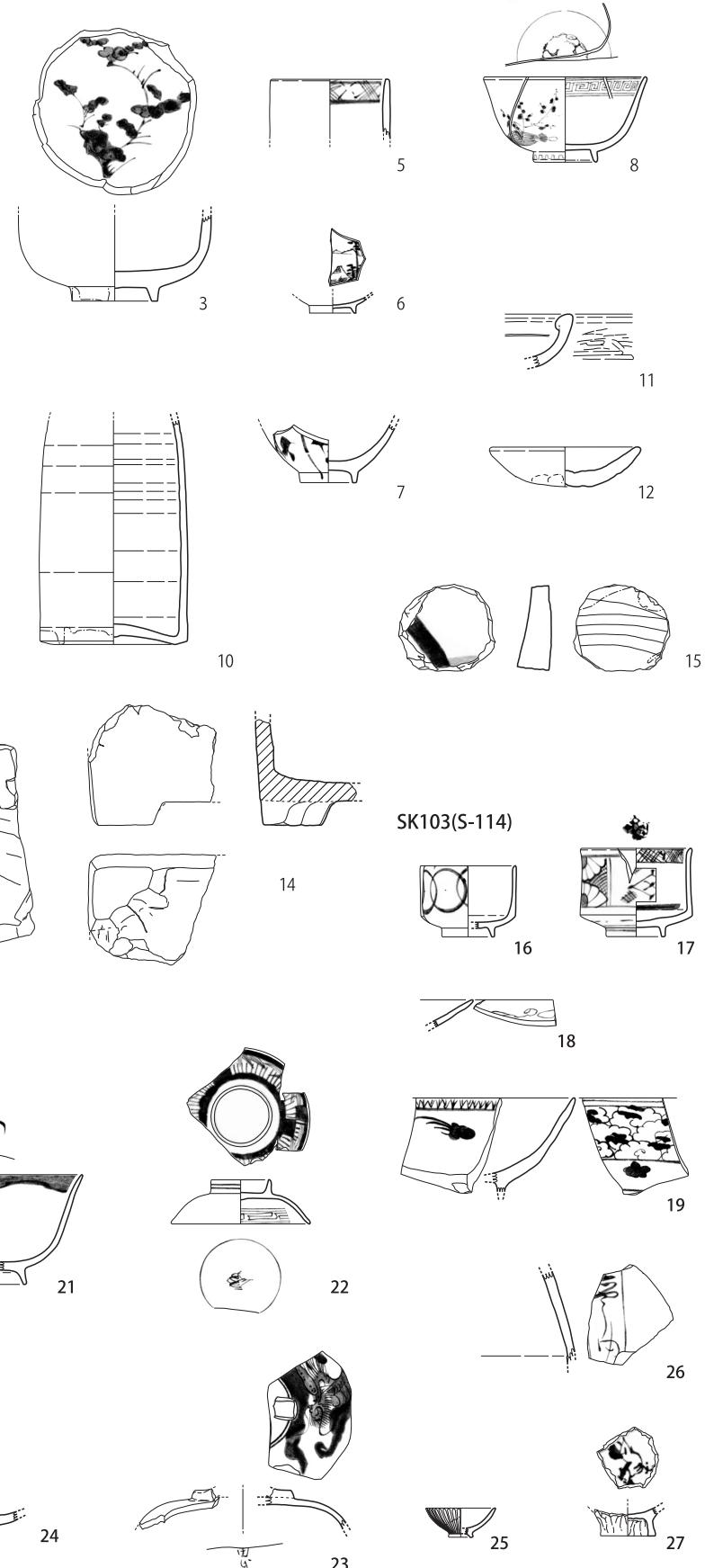
SX123（第55・56図37～53） 37、38は紅皿、39は青磁染付の筒形碗、40、41は肥前染付筒形碗、42は若松文が記される丸形碗である。43は蛸唐草文が描かれる小広東碗である。44は肥前染付皿で、見込みには五弁花がスタンプされ、高台内には渦福が記される。45は志野産の向付、46は内面に段を有す擂鉢で、福岡産か。47は肥前陶器の徳利か。底部裏面に記号が線刻される。48は関西系（京・信楽か）の土瓶で、イッチン掛けによる文様が描かれる。49は土製玩具で、亀を模したものである。腹部分に棒を差し込み穴が穿たれている。50は縄文土器の浅鉢である。51～53は瓦類で、51には「細和」、52、53には「助ノ丞」が刻印が認められる。

SX134（第56図54～58） 54は肥前陶器鉢の高台部、55は堺産と思われる焼締陶器擂鉢、56は擂鉢で、口縁端部は丸く、口縁下部に沈線が見られる。57は用途不明の土製品で、手捏ねで作られる。58は土師質大甕口縁部で、粘土を外側に折り曲げて口縁部を作る。

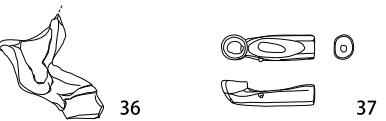
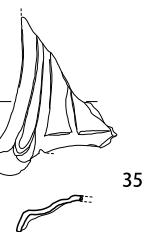
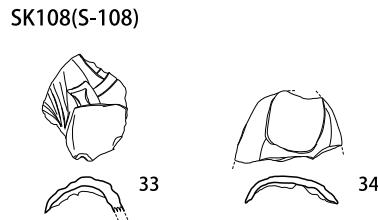
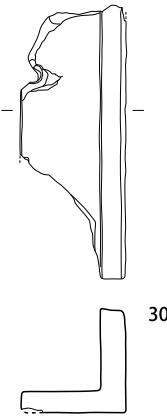
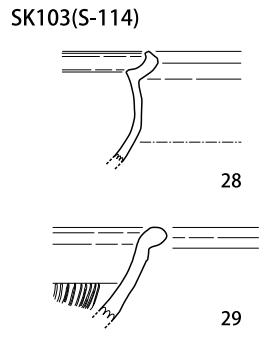
SK103(S-103, 114)灰茶土



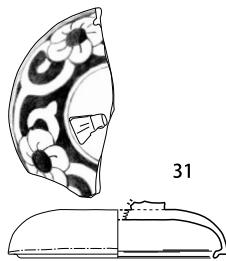
SK103灰茶ブロック土



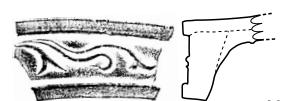
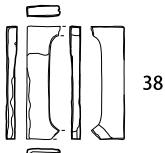
第45図 SK103 (S103・114) 出土遺物 (1/4)



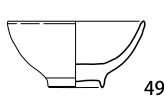
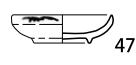
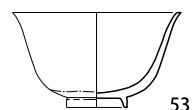
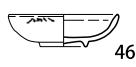
AK108(S-108, S-136)



SK108(S-136)



SK121

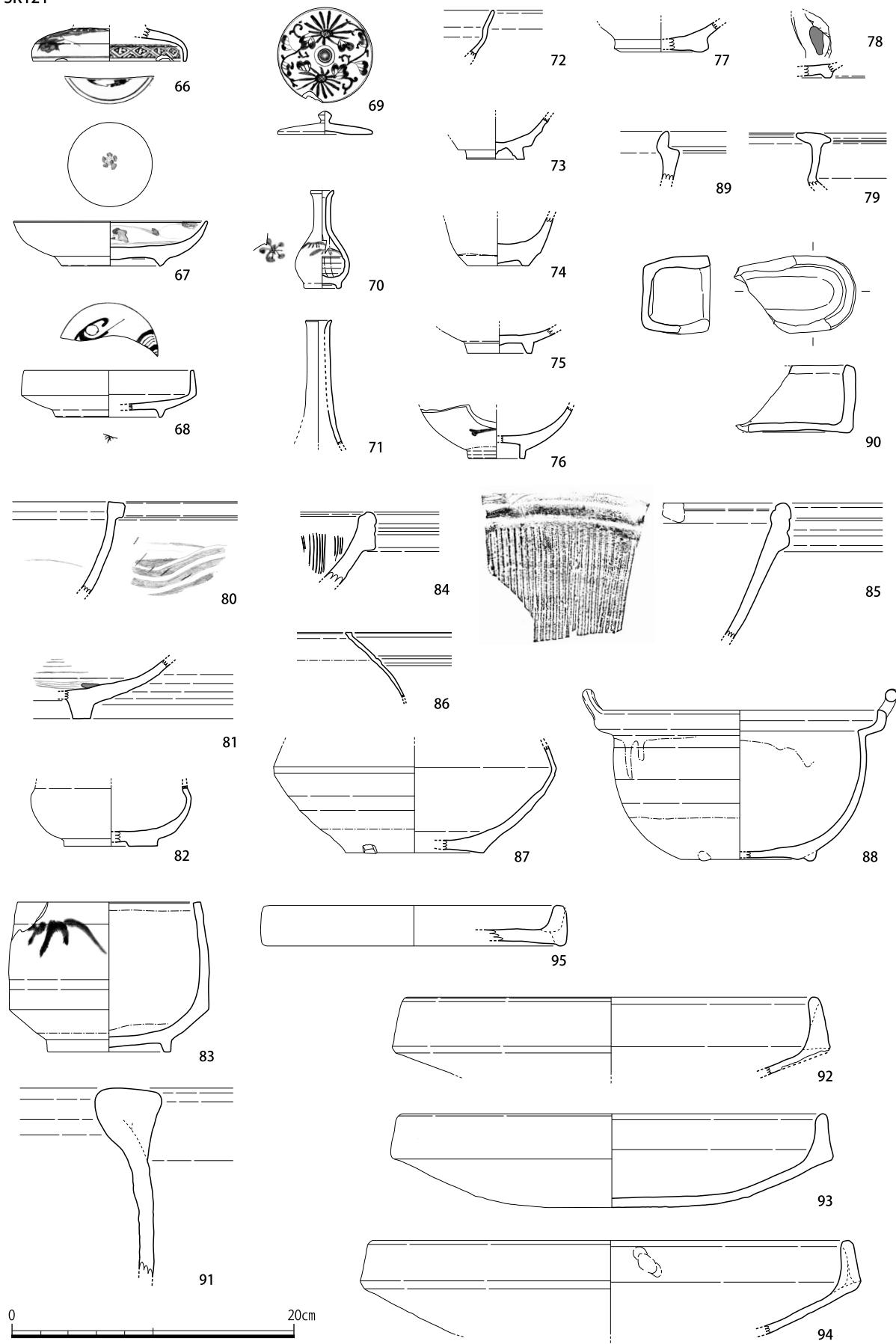


0



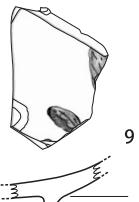
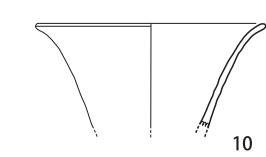
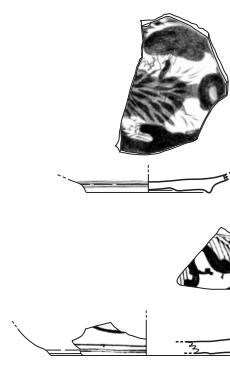
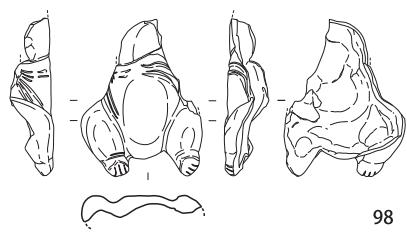
第46図 SK103・121出土遺物 (1/4)

SK121

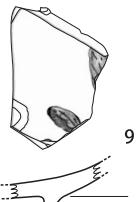


第47図 SK121出土遺物 (1/4)

SK121



10



12

13

14

15

16

17

18

19

20

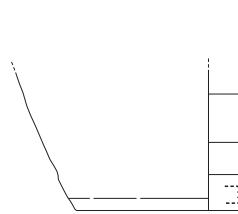
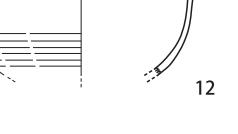
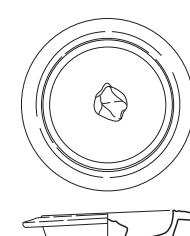
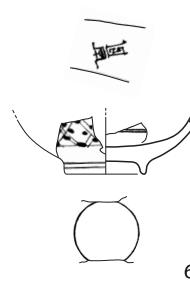
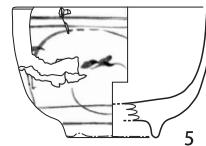
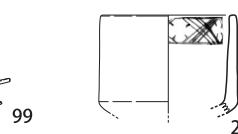
21

22

23

24

SK124



16

17

18

19

20

21

22

23

24

25

26

27

28

29

30

31

32

33

34

35

36

37

38

39

40

41

42

43

44

45

46

47

48

49

50

51

52

53

54

55

56

57

58

59

60

61

62

63

64

65

66

67

68

69

70

71

72

73

74

75

76

77

78

79

80

81

82

83

84

85

86

87

88

89

90

91

92

93

94

95

96

97

98

99

100

101

102

103

104

105

106

107

108

109

110

111

112

113

114

115

116

117

118

119

120

121

122

123

124

125

126

127

128

129

130

131

132

133

134

135

136

137

138

139

140

141

142

143

144

145

146

147

148

149

150

151

152

153

154

155

156

157

158

159

160

161

162

163

164

165

166

167

168

169

170

171

172

173

174

175

176

177

178

179

180

181

182

183

184

185

186

187

188

189

190

191

192

193

194

195

196

197

198

199

200

201

202

203

204

205

206

207

208

209

210

211

212

213

214

215

216

217

218

219

220

221

222

223

224

225

226

227

228

229

230

231

232

233

234

235

236

237

238

239

240

241

242

243

244

245

246

247

248

249

250

251

252

253

254

255

256

257

258

259

260

261

262

263

264

265

266

267

268

269

270

271

272

273

274

275

276

277

278

279

280

281

282

283

284

285

286

287

288

289

290

291

292

293

294

295

296

297

298

299

300

301

302

303

304

305

306

307

308

309

310

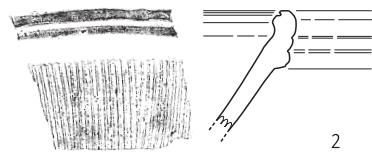
311

312

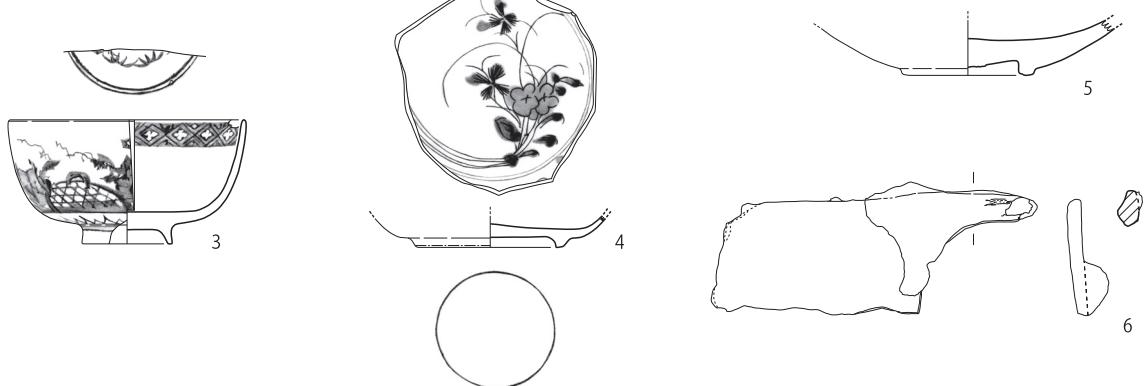
SK128



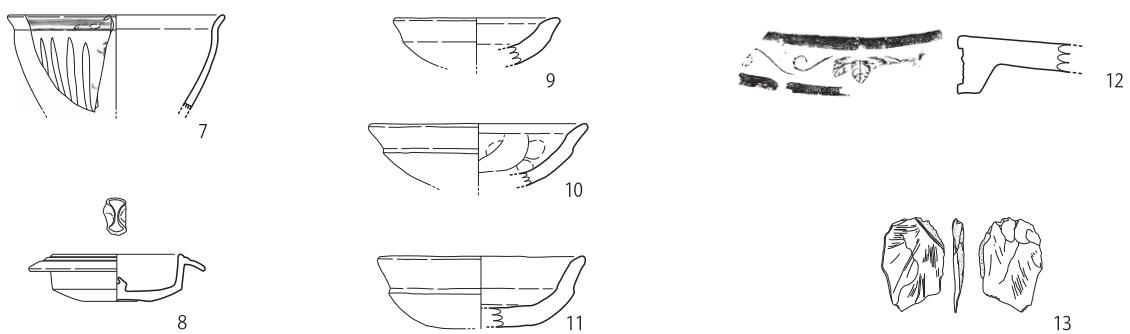
SK129



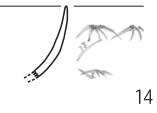
SK146



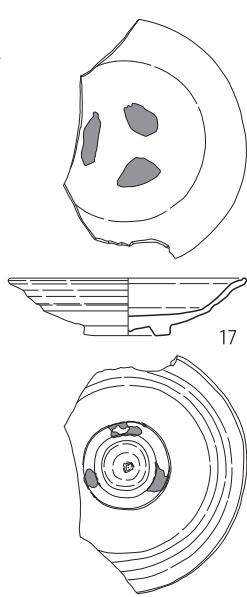
SK147



SK151

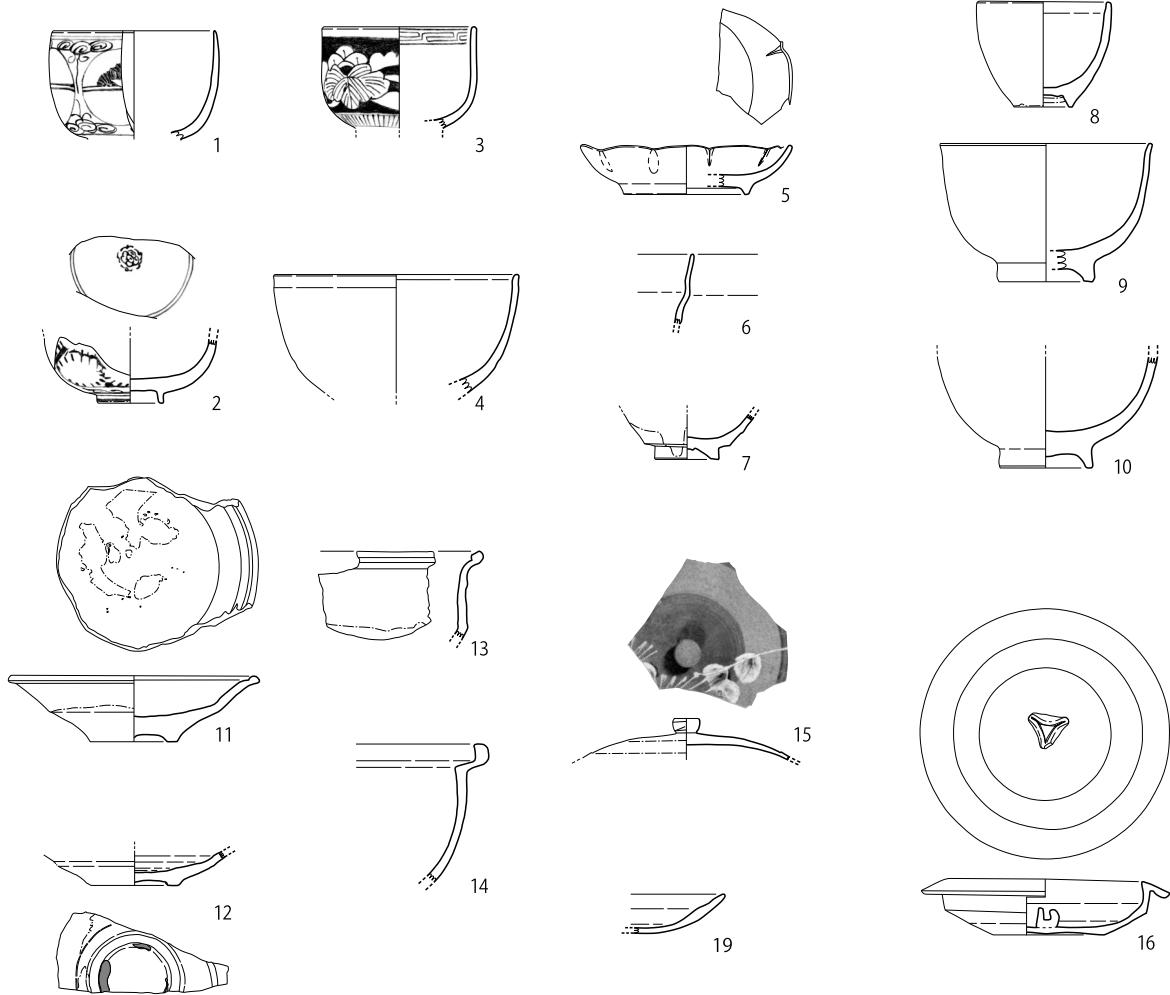


SK152

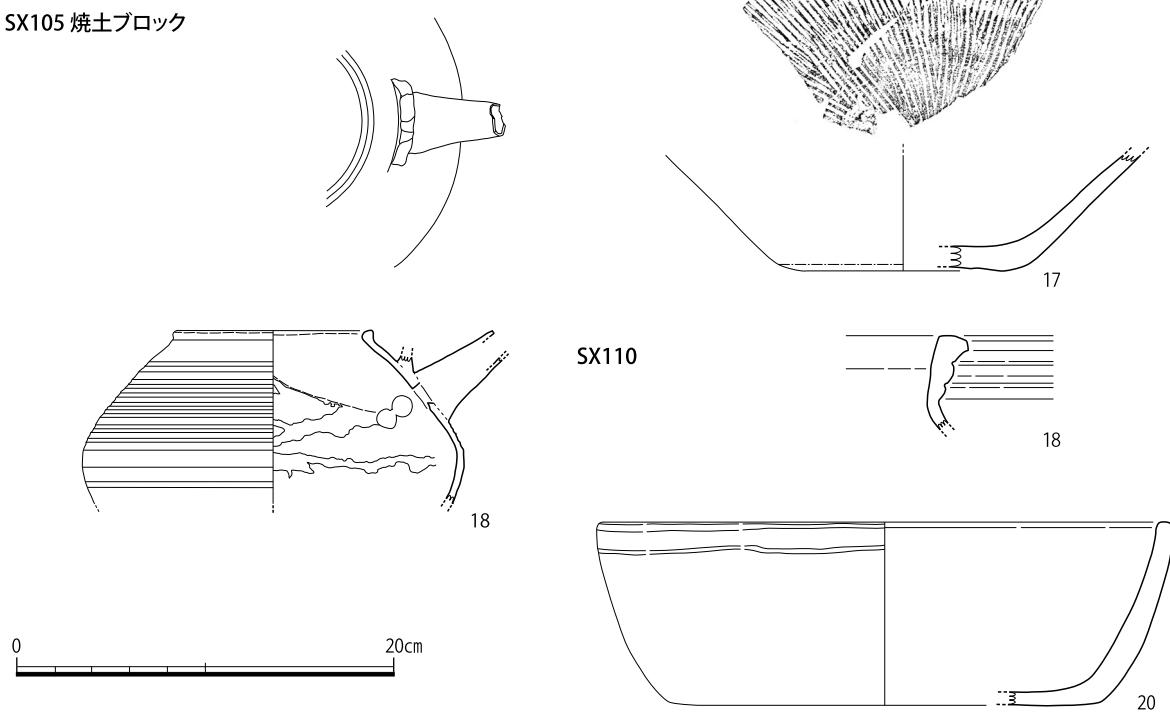


第49図 SK128・129・146・147・151・152出土遺物 (1/4)

SX105

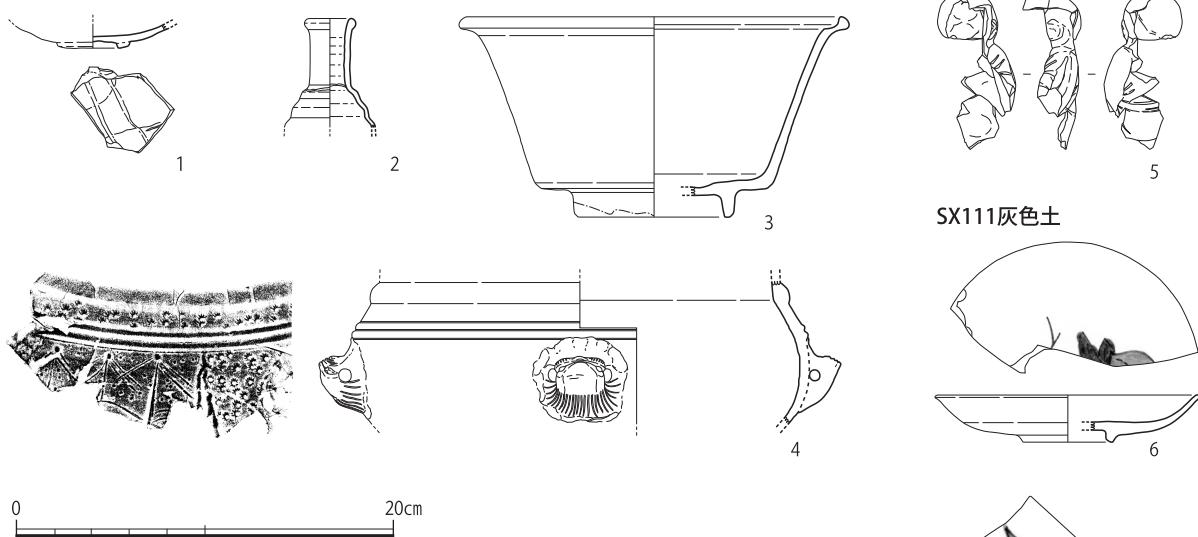


SX105 焼土ブロック



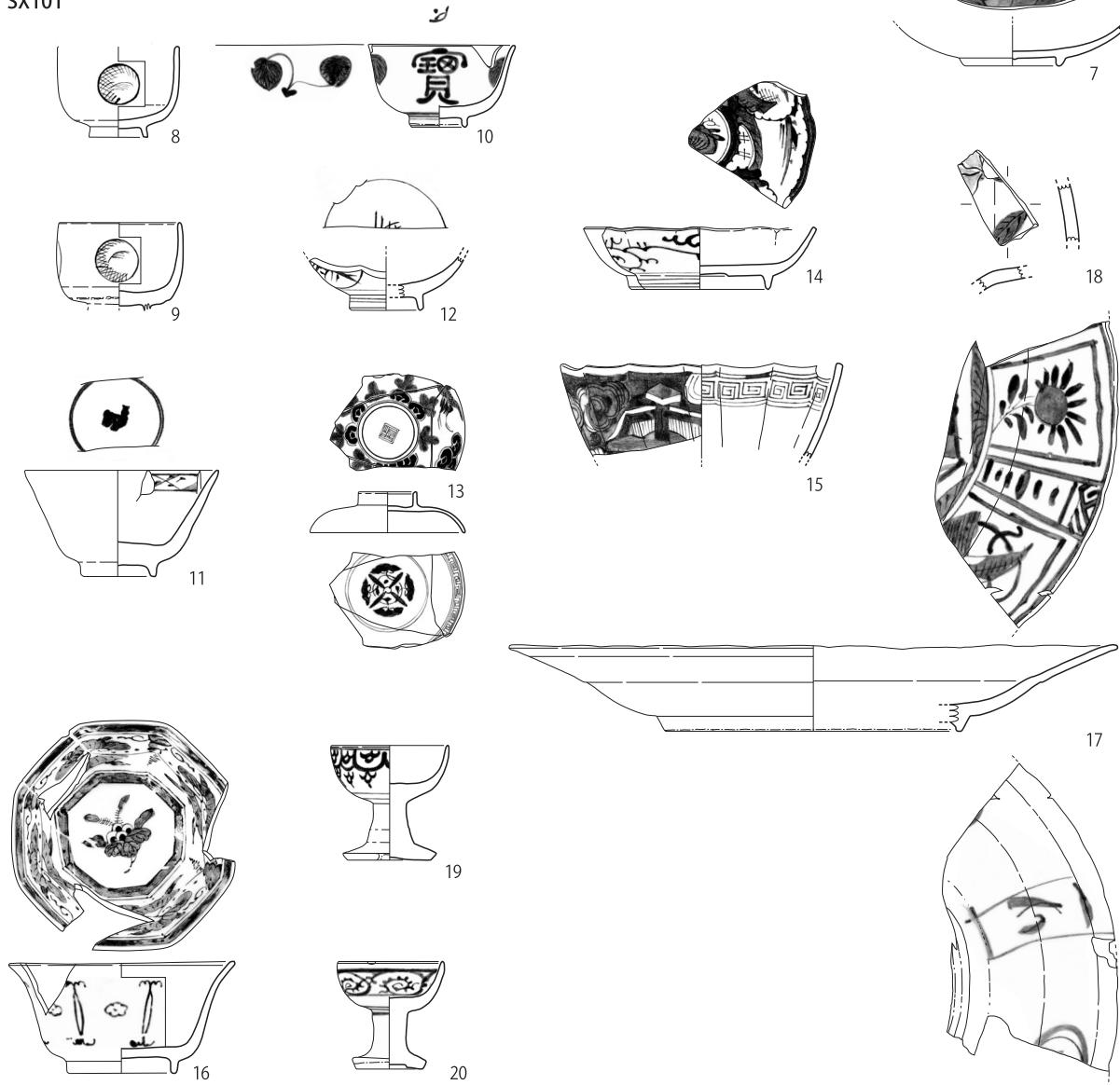
第50図 SX105・110出土遺物 (1/4)

SX111



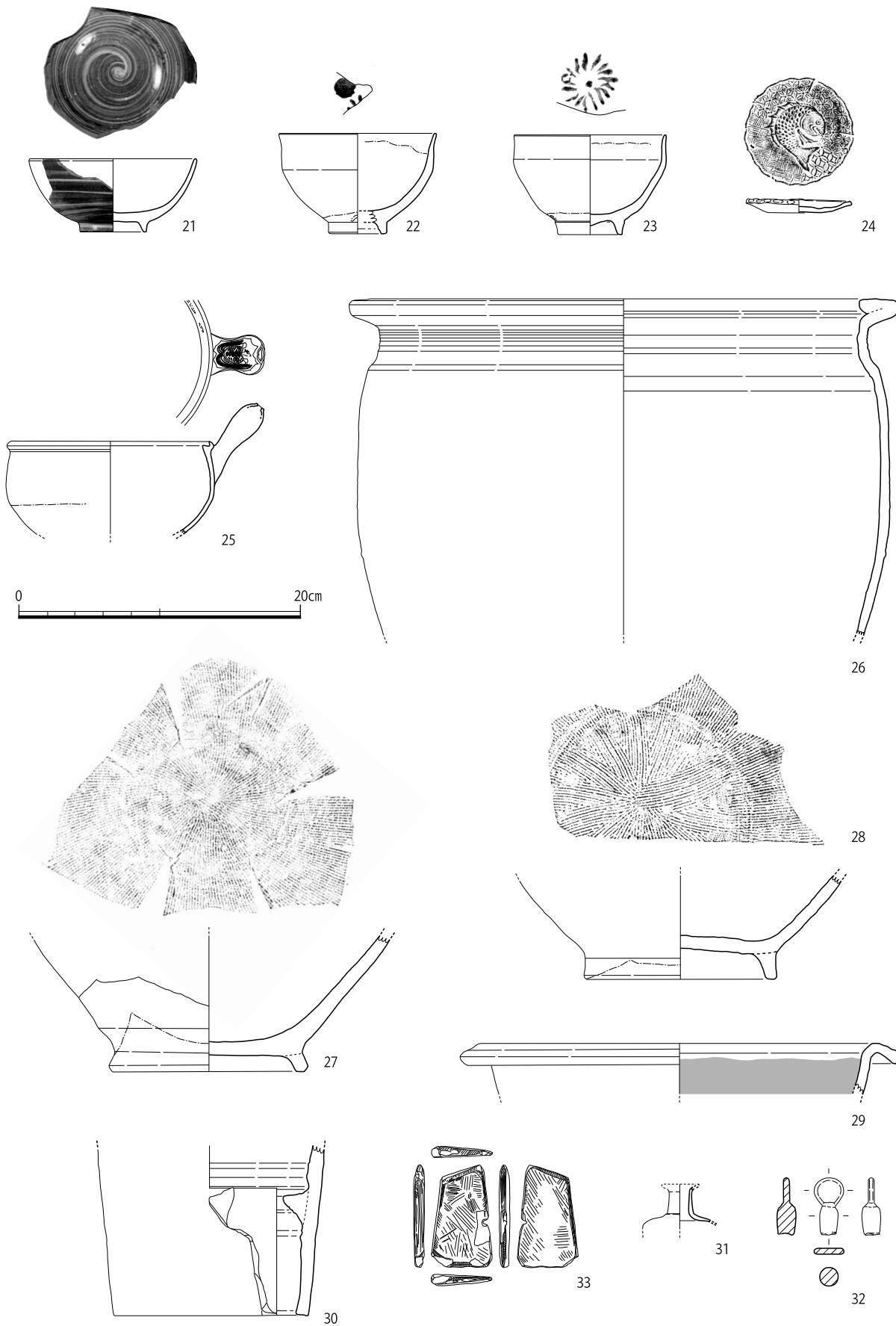
SX111灰色土

SX101



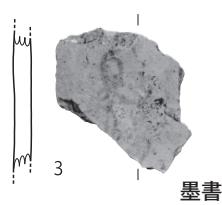
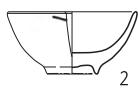
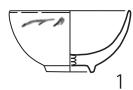
第51図 SX111・101出土遺物 (1/4)

SX101

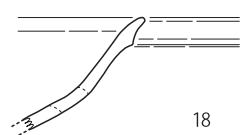
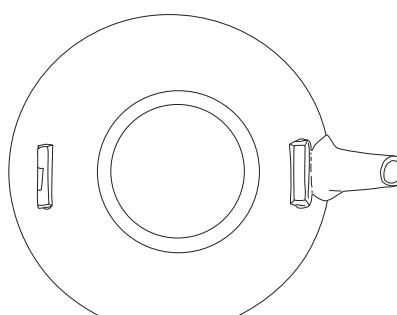
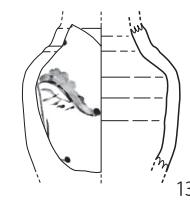
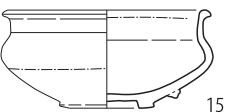
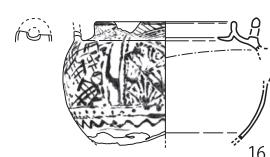
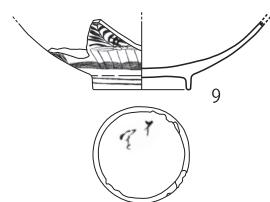
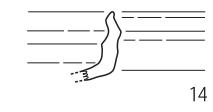
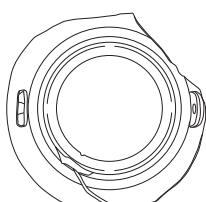
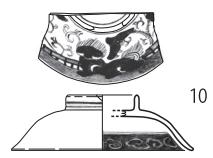
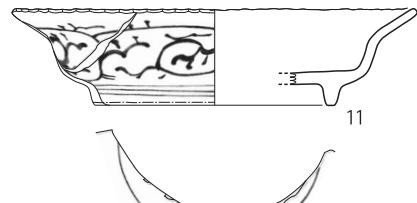
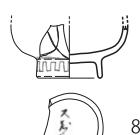
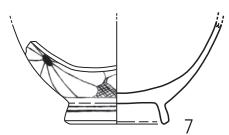
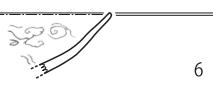
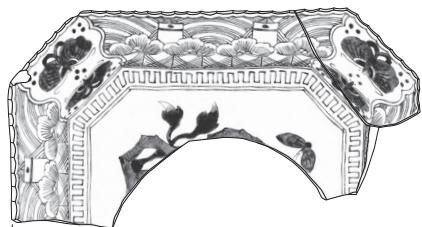
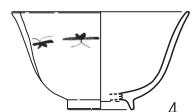
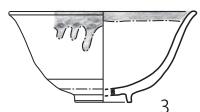


第52図 SX101・102出土遺物 (1/4)

SX106

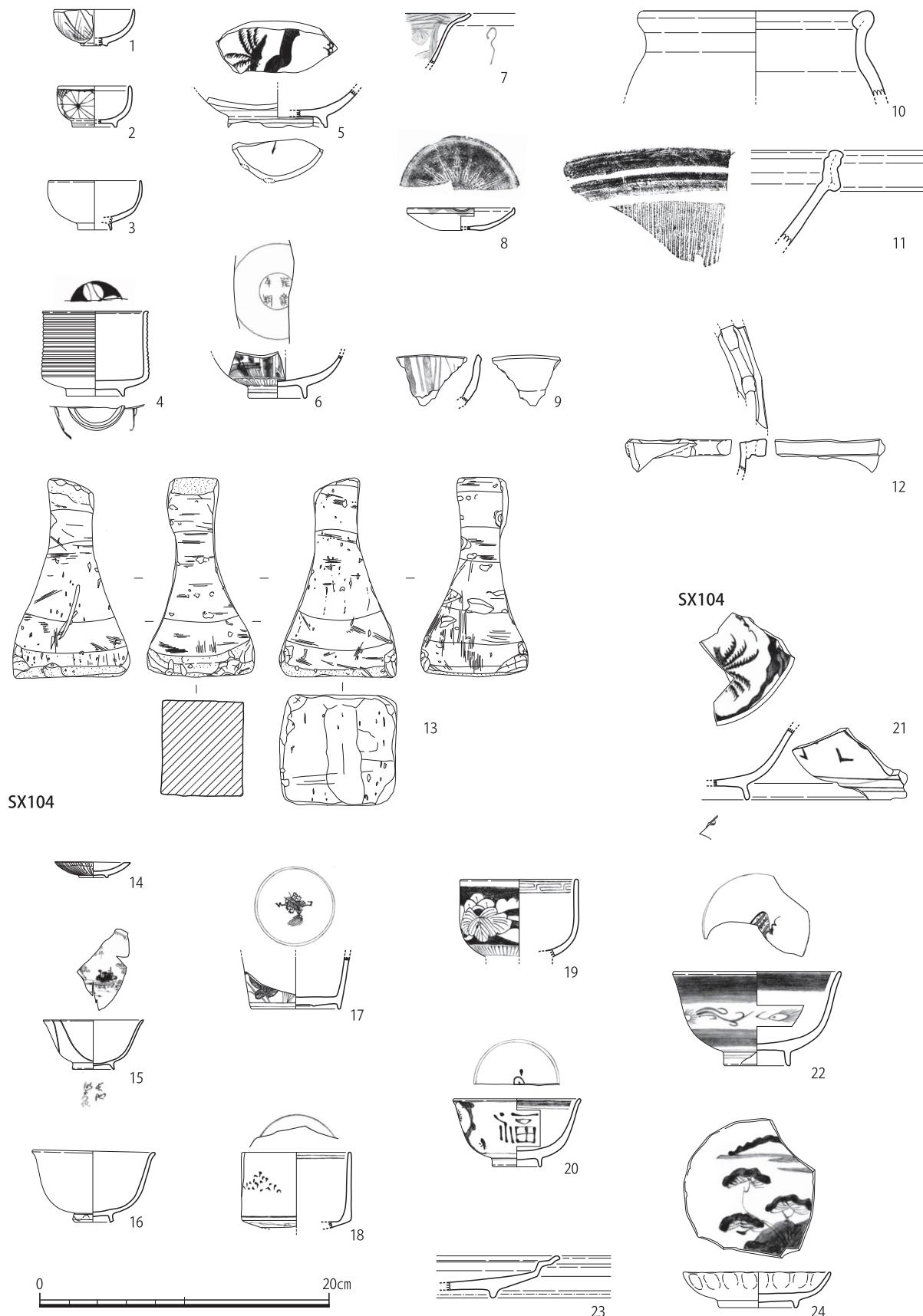


SX126

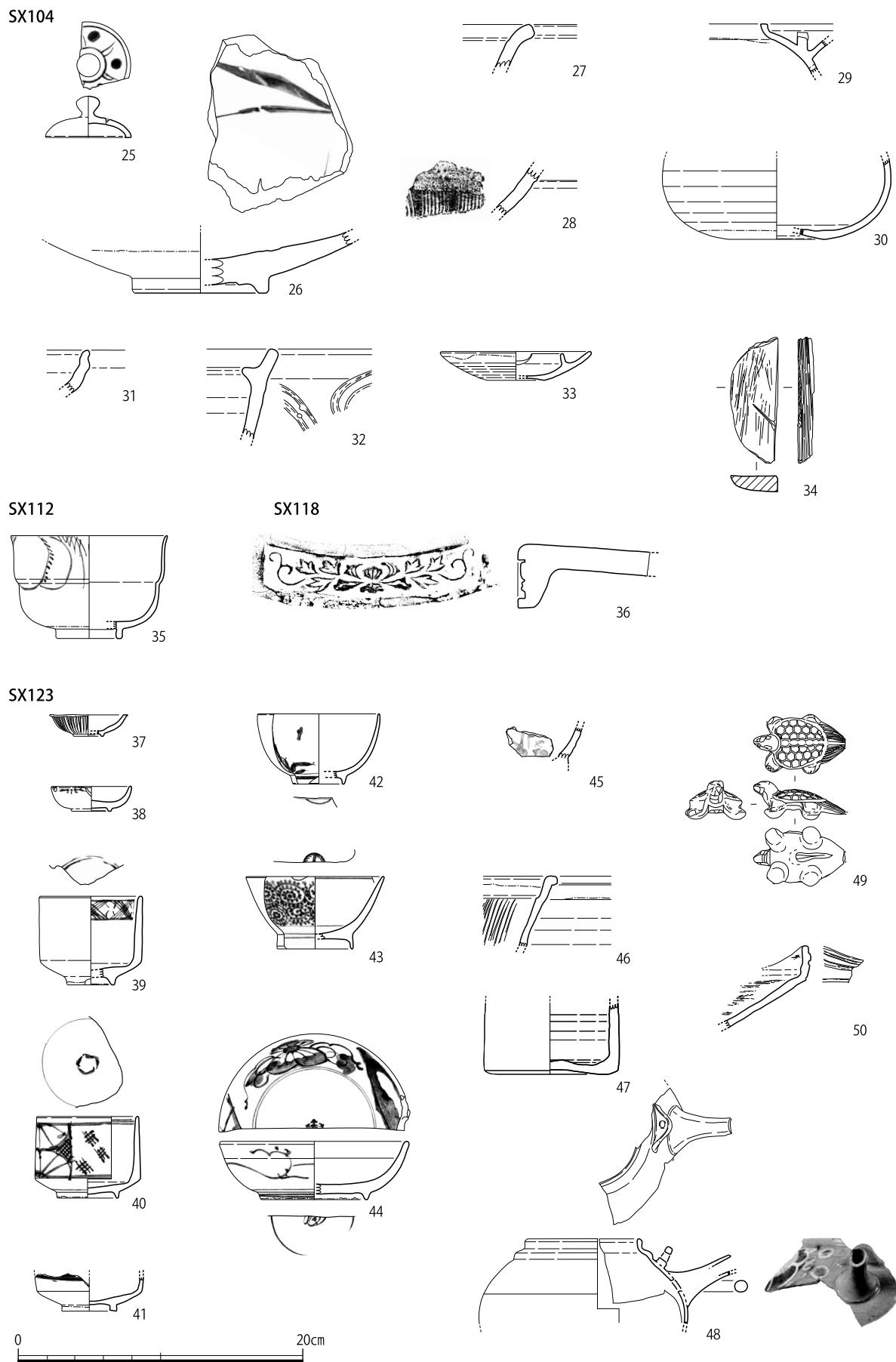


第53図 SX106・126出土遺物 (1/4)

SX139

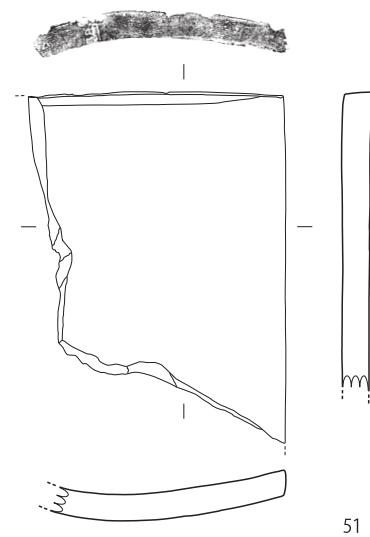


第54図 SX139・104出土遺物 (1/4)

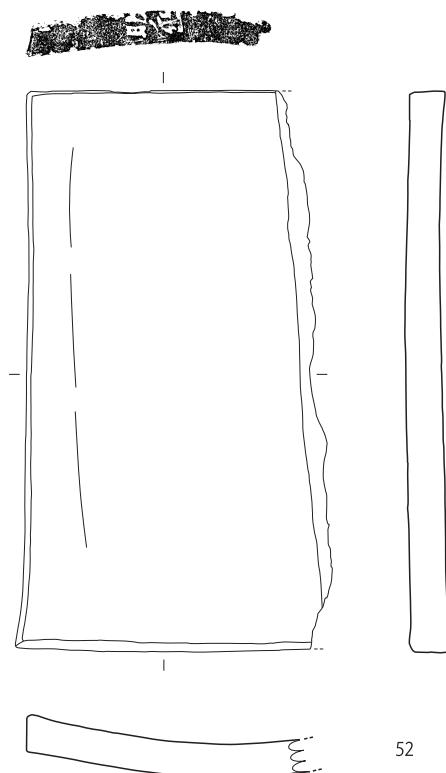


第55図 SX104・112・118・123出土遺物 (1/4)

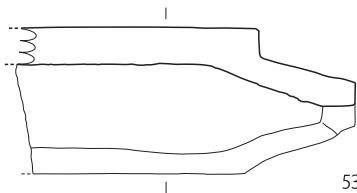
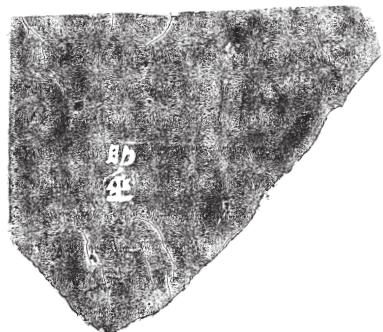
SX123



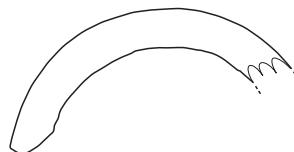
51



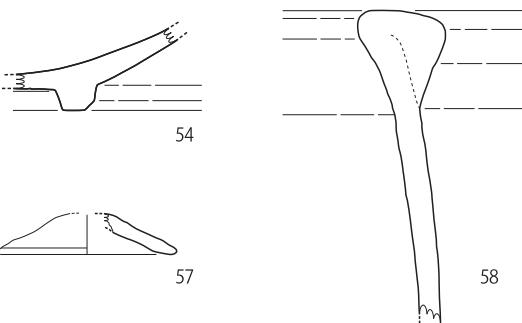
53



56

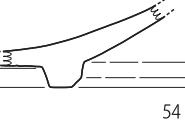


57

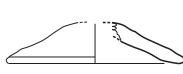


58

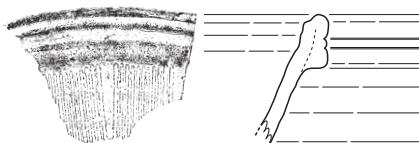
SX134



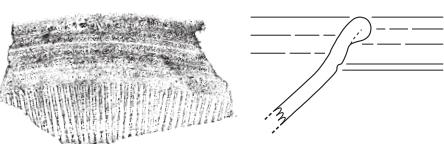
59



60



61

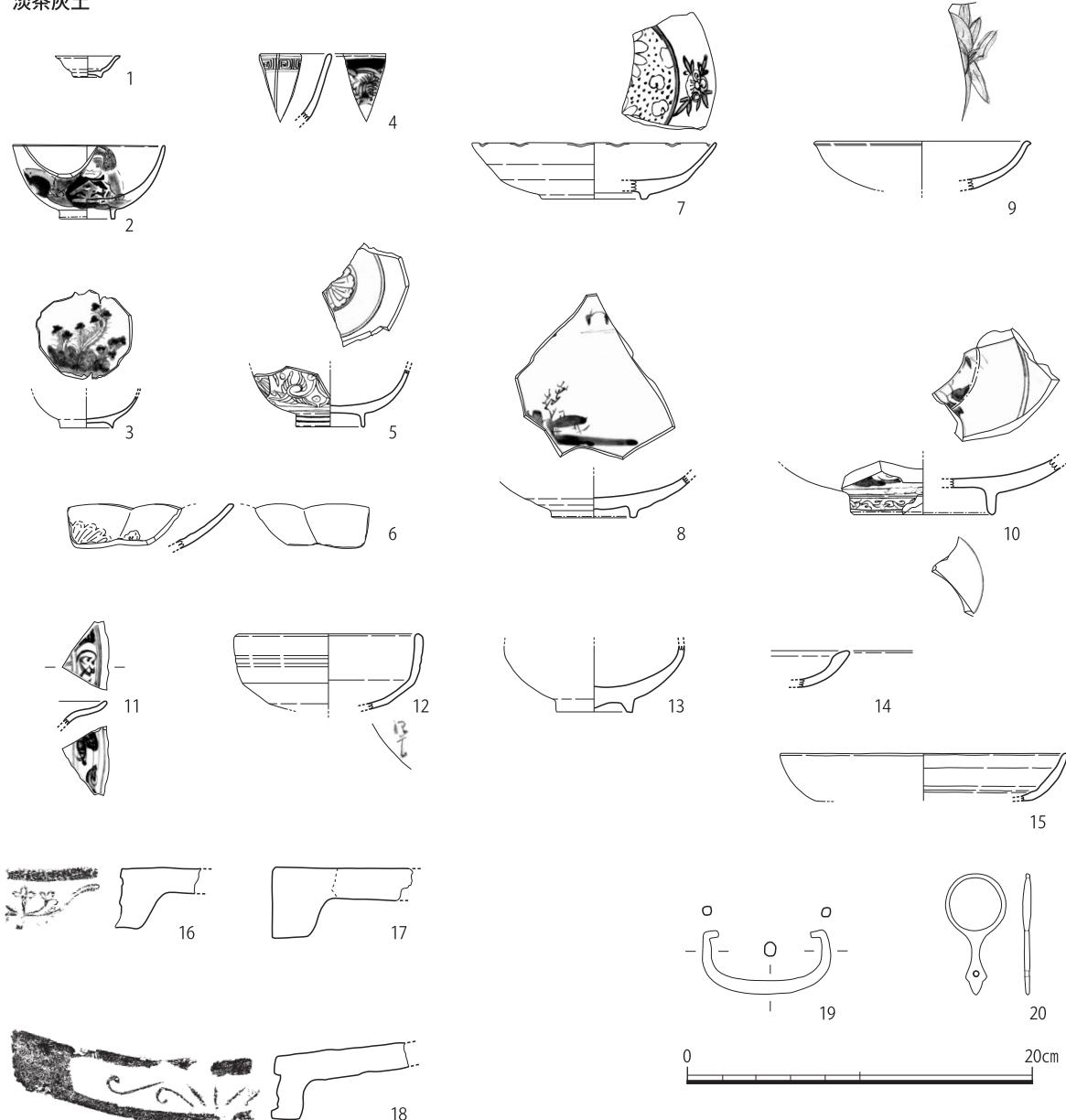


62

0 20cm

第56図 SX123・134出土遺物 (1/4)

淡茶灰土



第57図 淡茶灰土出土遺物 (1/4)

(5) 包含層出土遺物

淡茶灰土 (第57図 1~20) 1はミニチュア磁器で皿もしくは蓋である。2は外面に金太郎の絵が描かれる磁器碗である。3は薄手の染付盃、4は焼き継ぎされる染付碗、5は線描きのみで絵付けが行われる碗である。6は菊花が陽刻される白磁の菊形皿と思われる。焼き継ぎあり。7~9は初期伊万里の皿か、高台には砂が多く付着する。10は肥前産の色絵大皿である。色が塗られず下絵のみの部分が見られる。11は中国産青花で、稜花皿の口縁部である。12は関西系陶器の皿で、外面に「四丁」と墨書が認められる。13は肥前陶器で外面に黒褐色の釉が掛けられ、内面は施釉されず粗く、灰被りがあることから火入れ等の容器であると思われる。高台は三日月高台を呈す。14は瓦質の皿か、全面に細かなミガキが施される。15は手捏ね製の土師質皿で、SV130・SX105出土のものと類似する。16~18は軒平瓦、19は銅製の簾笥等の把手部と思われる。20は小丸いレンズに黒い縁の小型のルーペである。

第V章 まとめ

第1節 絵図からみる調査地点

府内城・城下町の状況を示した絵図は多々残されている。中でもよく知られるのが以下の4点である。

①「豊後府内城之絵図」	正保元年（1644）作成	内閣文庫所蔵
②「付箋慶長十年 府内城下絵図」	製作年代不明	大分大学付属図書館蔵
③「豊後国府内城下町絵図」	天明5年（1785）	大分県立図書館蔵
④「清水流規矩元法分間絵図」	享和2年（1802）	大分県立図書館蔵

①は正保年間に幕府に提出を要求させられた城絵図であることから、ある程度正確に反映されていると思われる。②は、慶長十年であることから、最も初期段階に府内城下を描いたものと考えられてきた。しかし、正保の絵図と比較した場合、付箋とおり慶長十年とは到底言いがたく、少なくとも寛文7年（1667）以降に描かれたものと推測されている。③、④は①、②より100年以上後の府内城下の状況を記したものである。この2点は、三ノ丸内に屋敷を持つ藩士の名が記述されており、製作（写）された時の武家屋敷の様子を知る貴重な史料である。特に、④は三ノ丸外の、町屋にまで武家屋敷が広がっていることが見て取れる。

18次調査地点は、三ノ丸内の北廣小路の南側区画、西端に位置する。②から④の絵図には調査地は二つの区画に分けられ、②と③の絵図には、北側区画に「藏屋敷」・「倉」と書かれる。②の絵図の南区画は記載なく、③の絵図の南側には「石・・・」と人名が記される。④の絵図は北側には記載がなく、南側に「後藤・・・」の名が認められる。

これらのことから、18次地点は2区画に分けられており、少なくとも17世紀後半と18世紀後半は蔵（倉）として使用され、古い段階では「屋敷」が付けられていることから、複数の蔵が建てられていたことが推測される。ちなみに、「蔵」は大事なものを納め置く場所、「倉」は穀物を納める場所と意味が少し異なる。必ずしも表現の違いが、用途の違いを表すものではないが参考までに記しておく。18世紀後半（1785年）と19世紀初頭（1802年）は、南側区画は武家屋敷であったことが分かる。但し、③・④の絵図は写しであることから、描かれた年代と表示内容が必ずしも合致しないかも知れない。また、絵図を見ると、敷地西側に入口を示す記号があり、西にある南北通り側に正門が築かれていることが想定される。②の絵図には敷地の幅、奥行きが記されるが、北・南ともに表14間（約28m）とあるが、北区画の入り間数の記載は認められない。この表現方法の違いも、それぞれの敷地利用を表しているといえよう。

第58図 付箋慶長十年 府内城下絵図

第59図 天明5年（1785）の絵図

第60図 享和2年（1802）の絵図

第2節 時期別変遷

18次調査区は、武家屋敷で構成される三ノ丸内に位置する。今回の調査では、古代・中世・近世に該当する遺構群が確認された。主体となる近世の様子であるが、大きく3時期に区分され、その詳細は、17世紀代、18世紀代、幕末前後となる。

以下、時期別に概観についてふれる。

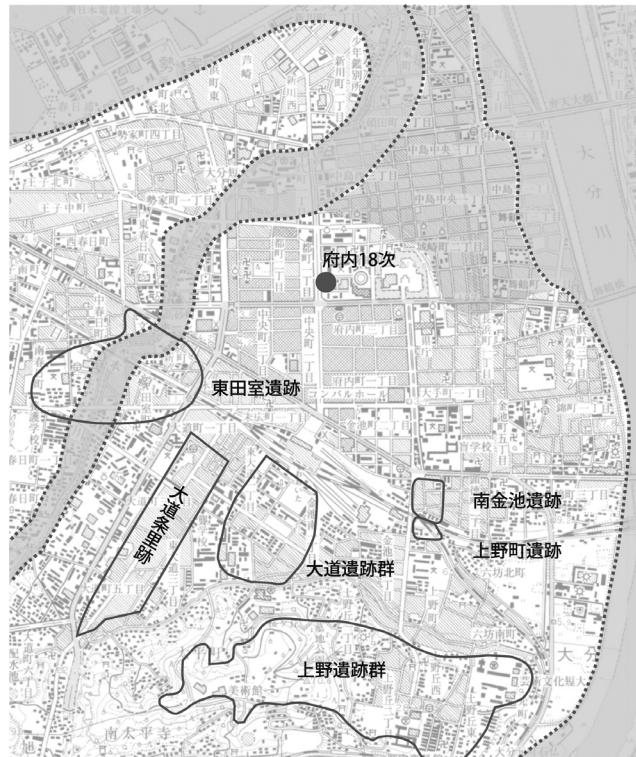
【古代】

この段階の遺構は井戸跡2基がある。井戸の構造は、SE085が分かる。現状径約2.5~2.8m、残存する深さ約0.7mを測り、平面円形を呈す。裏込め部と井筒部の2重のプランが認められ、現状径約2mの井筒部からは木製の削り貫き式井戸枠が出土した。井戸枠は丸太材をそのまま使用したものでなく、コの字状と逆コの字状に欠けた2つの材を円形になるように工夫し、重ね合わされている。樹種同定は実施していないが、クスノキではないかと推測している。SE085からは一定量の遺物が出土しており、多くは供膳形態が占め、灰釉陶器・黒色土器・須恵器・土師器で構成（土師器主体）される。詳細な時期であるが、土師器の年代観から9世紀前半～中頃に位置づけられるものと考えられる。

調査地周辺の状況であるが、立地と遺構の様子から次のようにエリアが分けられる。まず、国府エリアである上野遺跡群、その北西には国府周辺の生産基盤地である大道条里跡がある。大道条里北側には、河川（現住吉川）交通の要衝の地として東田室遺跡、低湿地に囲まれた微高地上に位置する大道遺跡群（出土遺物においては奈良三彩や「厨」と刻書された土師器、灰釉陶器が認められ、遺物の組成から判断すると、一般的な集落とは言い難い）。その大道遺跡群の東側には、南金池遺跡があり、ここからは大量の製塙土器が出土している。南金池遺跡の南側の上野町遺跡では、袋網漁網に使用されたと思われる大型土錘等が数多く出土している。このエリアは水辺を活用した生業（製塙・漁業）を営む場であったと考えられる。

井戸跡2基のみでは、調査地の位置づけに限界があるが、戦国・江戸時代の絵図、『大分市史』中巻を参考にすると、18次地点は海岸線に近く、陸地の先端部に立地していたことが復元される。よって、今の別府湾から豊後国内に入った場合、最初に見える施設であったと想像される。また、時代は下がるが府内城が築かれる際、その場所の選定にあたって荷降ろしの場であったことが理由とされていることから、調査地付近は港的な場として利用されていた可能性が高い。これらのことから推測すると、古代においても当該エリアは、表玄関としての役割を担っていたのではないかと考えられる。

府内城・城下町の中で、明確に古代の遺構が確認されたのは、今調査が初めてといってよいだろう。周辺の調査では古代の遺物は散見されるものの、帰属する遺構は近世のものであった。古代の遺構が発見されない要因として城下町形成段階で、ある程度破壊されていることが想像される。よって、井戸などの大型の遺構でない限り、



第61図 大分市街地の古代遺跡分布図（一部推定）

残っていないと考えられる。本調査においても、井戸跡の上位部分は近世の火災処理土坑により掘削されていた。もう一つ挙げるならば、城下町内での開発面積500m²規制がある。この規制により調査機会は減少し、残っていたものが消滅していることが危惧される。

【中世】

この段階で確認される遺構は、A区の井戸跡（SE080）、溝状遺構（SD090）が挙げられる。SE080は出土遺物は無いものの、構造が大友氏の城下町で確認されるものと類似する。SD090は近世前半期の遺物が埋土中に含まれるが、それはあくまでも埋没した段階であり機能していたのは中世であるとそれぞれ判断した。

本調査地の南側の11次調査では16世紀代の溝状遺構が発見されているが、SD090とは方向を全く異にし、同一のものとは考えづらい。SD090とSE080をセット関係にみるならば、地内は屋敷内部であり、SD090はその外郭施設の一部であると推測される。

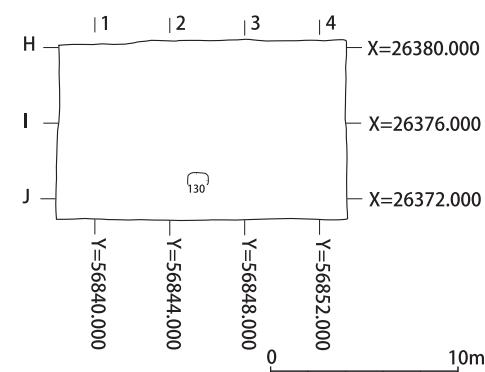
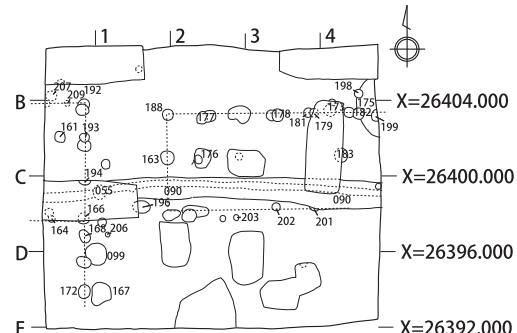
【近世前半：17世紀代】

この段階の遺構はA区で主に確認され、掘立柱建物SB100・SB120・SA135が挙げられる。SB100とSB120は規則的に配置される。SB100は2間×6間+α、身舎面積54m²以上の規模を有す東西棟で、SB120は南北3間、東西1間+αの規模をもつ建物である。SB100には一部礎盤が認められた。SA135は1間分のみしか見られないが、埋土や形態等が類似することから同一のものと判断した。

建物構造を見ると、SB100には間仕切り状の柱配置が認められ、その南側は柱間が広い部分がある。ここは出入り口部と推測され、その右側の広い空間は広間として使用されたのではないか。建物群の南側エリアは遺構分布が希薄な地点であり、広場的空間（庭か）と考えられる。遺物を概観すると、建物（SB100）を構成する柱穴より砂目段階の唐津皿や絵唐津皿が出土している。新旧関係で新しいSX075は17世紀後半頃を下限とする遺物が認められており、このことからSB100は17世紀前半～後半頃と位置づけられる。

B区では、当該期の遺構は石組み遺構（SV130）のみである（但し、出土遺物には志野焼や初期伊万里が含まれる）。SV130は18世紀後半の埋甕遺構・整地層により掘削・覆われた状態で検出された。埋土の状況から廃棄後、人為的に埋められた可能性が高い。覆土からは手捏ね土師質皿、唐津溝縁皿、焼塩壺などがあり、何れも17世紀前半代の範疇で捉えられる。時期が違うが、近辺の遺構の様子から判断すると、SV130はトイレとして使用された状況が看取される。

SB100・120・SV130を同一時期のものと仮定した場合、その併せた敷地面積は560m²（約170坪）を測る。実際は、本区外にも展開することが予想されるので、それ以上となることは確実である。また、その中でも、A区は建物が配置される表空間、B区は裏手空間として利用されたのではないかと考えられる。



第62図 近世前半段階 (1/400)

大友氏が除国されて松平治世に至るまでの約60年間に、福原氏・竹中氏・日根野氏と3代にわたり藩主が変わっている。福原氏も三ノ丸の形成に携わっているが、本格的に府内城と城下町の基礎を築いたのは竹中段階に入つてからで、その治世は慶長6年（1602）～寛永11年（1634）までである。竹中重義が長崎奉行を罷免され、府内を去った後に日根野吉明が来府する。日根野吉明は、府内に入ってから島原の乱、その後の監察を目的とした長崎との往復、松平忠直（一伯）の監視など、慌しく過ごしている。そのような中、初瀬井路の掘削、寺社の復興など民政にも力を注いでいる。明暦2年（1656）3月に逝去した後、臼杵藩主稻葉氏治下を挟み、萬治元年（1657）以降、大給松平氏が歴代の藩主となる。

建物群は、SD090との新旧関係から17世紀入って構築された可能性が極めて高く、柱穴の分布状況を見ると、長期間存在していたことは考えにくいため、その存続時期は極めて限定されるのではないかと思われる。先に挙げたように、SX075との関係の中で下限が17世紀後半とおかれることから、上記の流れをみると、竹中・日根野氏段階に位置づけることができる。その性格であるが、規模及び敷地面積の広さ及び城に近接するという立地条件から判断した場合、竹中・日根野氏に仕える家臣屋敷の一つとして評価できる。

また、もう一つ考えるならば14世紀前半に建てられた同慈寺との関係が挙げられる。同慈寺は、『豊府聞書』によると、慶長元年（1596）の地震により大損害を受けており、福原氏の段階になり補修され、竹中重利により再補修、興宗禪師が迎えられ復興し、松平氏の段階になって菩提所淨安寺として発足する。淨安寺は今の郵便局周辺が推定地とされており、結果、同慈寺も同地にあったと言われている。SB100等は17世紀前半頃には存在していることから、18次調査地点は災害後に復興された同慈寺と推測することも齟齬はなく、問題である淨安寺への繋がりも、松平氏入府に伴い三ノ丸内の整備が行われ、現在の比定地へと遷されたとして仮定することができる。

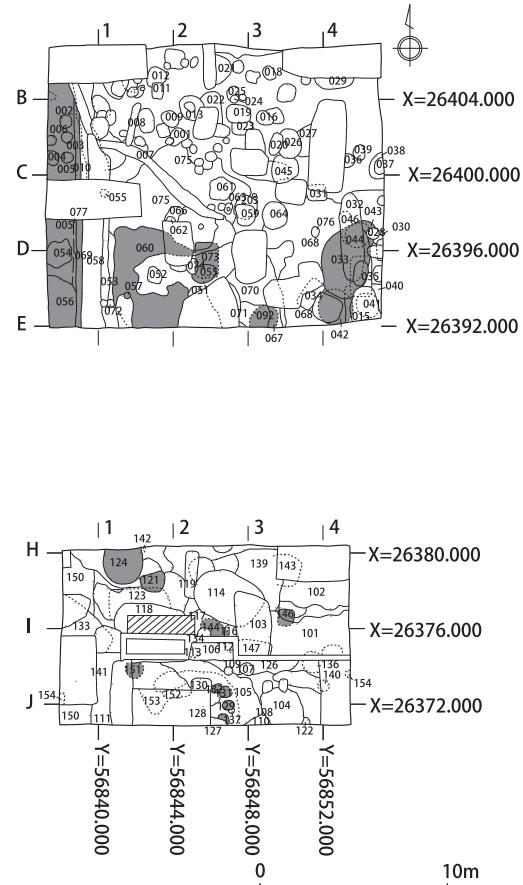
何れも推定の枠内であるが、直接的ではないものの出土遺物中に志野産の茶道具破片が散見しており、この点からも町屋や村とはやや異なる施設の存在を想起させる。

【近世後半①：18世紀後半～19世紀前半頃】

この段階は、SK060・121・124など廃棄遺構が顕著である。A区のSK060は焼土や瓦礫類を大量に廃棄しており、大規模な火災に伴うものと考えられる。出土遺物から18世紀末～19世紀前半頃と位置づけられる。文化7年（1810）に下柳町を火元として、中柳町・櫻町・西小路町・白銀町・魚町等に被害を及ぼした火災が起きている。『府内藩日記』には三ノ丸にも飛び火している旨の記載があることから、この火災後に行われた片付けの痕跡と判断されよう。

【近世後半②：幕末頃】

B区で確認される廃棄遺構が主体となり、その出土遺物中には焼き継ぎがなされたものが多く認められる。焼き継ぎがなされるものは、碗・鉢・土瓶など日常雑多品が多く、その時期も19世紀代に作られたものが主体となる。SK108から出土した肥前陶磁の蓋には朱書きで「瀬右衛



第63図 近世後半①段階（1/400）

門」という人名の焼継文字があり、SX104出土の瀬戸美濃産と思われる端反り碗には「長池 瀬右衛門」と、先に見た文字と同一の名を有す人名が記されている。

この「瀬右衛門」という人物についてであるが、出土遺物と時期が近い天明と享和の絵図を見ると、18次調査地点に重なる場所には「瀬右衛門」の名が見当たらないことから、焼き継ぎ職人の名ではないかと推測される。その場合、「長池」は府内城下の東にある長池町を指すものと思われる。

先に述べたとおり、確認されるものは廃棄遺構ばかりであり、建物跡や生活に関する遺構は一切発見されていない。よって、時代が明治へと変わるにあたって、土地の再編が行われる段階であったと考えられる。

【明治時代】

A・B区にわたり南北に延びる道路跡が該当する。道路構築土の中から、クロム青磁や型紙摺りの印判手染付が認められることから、そう判断される。但し、道路の構造より明治以前からも道路として使用されていることが分かる。

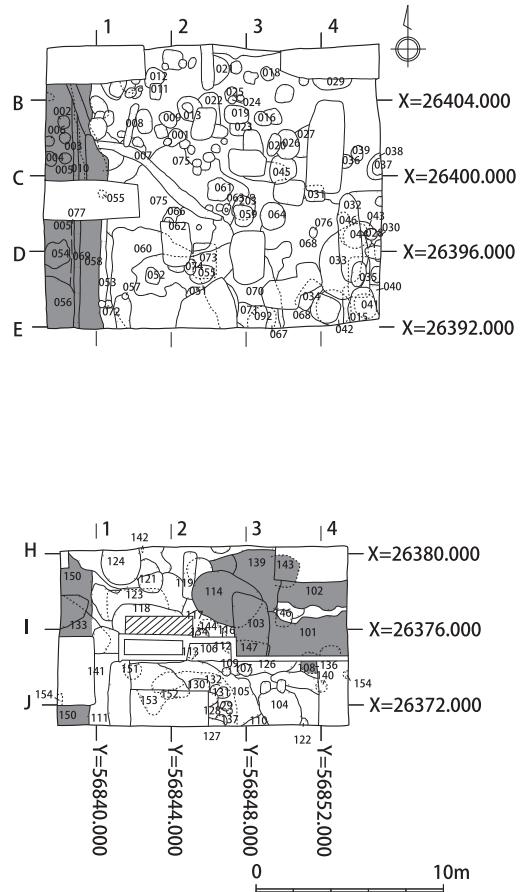
付箋慶長十年の絵図では調査区に接する地点の南北道は3間とあり、享和の絵図（1805）には5間とある（調査地点とはやや場所が異なる）ことから、道が拡張されたことが分かる。よって、本調査で確認された道路は、享和段階に拡幅されたものに該当する可能性が高く、明治になっても、ほぼ同じ規模・場所で踏襲、造り替えがされたと考えられる。

第3節 17世紀代の非ロクロ系の土師質土器について

非ロクロ系土師質土器は中世府内町から大量に発見される京都系土師器に連続する一群と考えられている。18次調査においても、非ロクロ系の土師質土器が数点出土している。これらは赤褐色の色調をなし、厚手のタイプのものと、薄手タイプで白茶色を呈す、大きく二つに分けられる。

まず、前者について検討してみる。このタイプの土師質土器を出土する遺構は、A区のSX075（報告では暗茶褐色土出土としている）とB区SK147がある。A区出土の第32図21は口径12.1cm、器高3.1cm、底部は平底状をなし6.6cm、器壁は最大で10mmを測る。口縁部上面は平たく、外側へと短くつまみ出る。第32図22は、口径13.2cm、器高2.8cm、底部平底状で6cm、器厚は底部が12mmと厚く、口縁部付近は5mmとなる。口縁部の形状は丸く仕上げられ、やや外反気味である。口縁部形態から大きく7種に分類できることができ（河野2000）、その分類と照らし合わせると、SX075はどの形態にも該当しないことが分かる。同じSX075出土の12（口径9.0cm、器高2.4cm、器厚8mm前後）は、e類からの系譜を辿ることができ、中世からの京都系土師器との連続性を窺わせるが、21、22に関してはより在地色の濃い非ロクロ系タイプといえよう。時期であるが、共伴する遺物から少なくとも17世紀中頃～後半の段階に位置づけることができる（SX075の分布が広範囲にわたることから若干の混入品があることを記しておく）。

SK147出土ものであるが、第49図9、10はe類にその流れを求めることができる。11は口縁が直立し、端部付

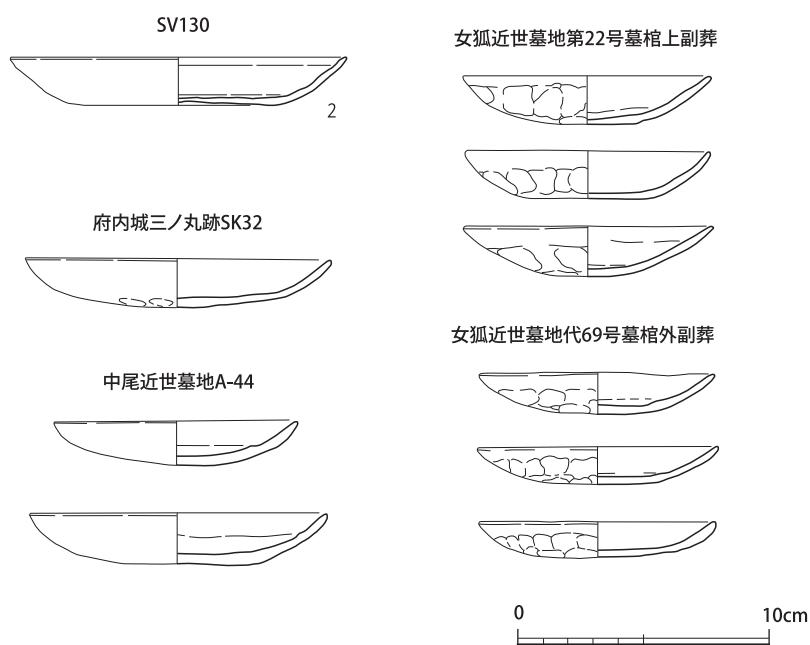


第64図 近世後半②段階 (1/400)

近は外反する。体部と口縁の境に明瞭な段を見ることがある。この段（境）は均一的であり型枠により整形された可能性を指摘できる。全体的形状は壊型を呈すため、16世紀後半～末段階に出現する京都系土師器壊タイプに系譜を望むことができるが、検討を要す。これらの時期であるが、初期伊万里の天目型染付碗との照合で17世紀前半～中頃と位置づけられる。

B区のSV130出土の非ロクロ系土師質土器皿（第44図2）は、口径17.8cm、器高2.6cm、底部10.0cmを測り、器壁は4～5mmと法量に対し非常に薄く作られる。底部と体部の境は丸く、明瞭ではない。口縁部はやや屈曲気味に内湾し、そのため内面に稜線が認められる。胎土は白（茶）色を呈し、混入物は少なく精製された粘土を使用され、内外面は丁寧にナデ仕上げである。このタイプの皿と類似資料が府内城三ノ丸遺跡から出土しており、非ロクロ（手捏ね）b類（吉田1993）として紹介され、17世紀前半～後半段階とされている。大分県教委が調査した中尾近世墓地や女狐近世墓地からも墓の副葬品として使われた手捏ねの皿が出土しており、18世紀前半～中頃の年代が付されている。SV130出土のものは、これら資料と比較すると法量が飛びぬけているものの、手捏ね整形・内湾器形・薄い器壁・精製土使用という共通点を残す。共伴する遺物から、その時期は17世紀前半と推測され、同タイプの資料の中では古相に位置づけられる。よって、18世紀代までの残る非ロクロ系タイプの祖形を本資料に求めることも可能だが、現在のところ出土数が少數であることから詳細な検討が必要である。

今回の調査により、中世から連続する京都系土師器と呼ばれるものとは別に、近世に入って新たに別系譜とされるであろう非ロクロ系土師質土器が存在することは明確になった。今後は、広域な範囲で同様の土師質土器の状況を探索し、更なる年代の特定・使用方法・特徴の把握に努めなければならない。



第65図 県内の遺跡出土非ロクロ系土師器質土器：近世（1/3）

府内城・城下町第18次A区遺構台帳① 第1面

S番号	遺構名	性 格	主な出土遺物	新旧関係	時 期
1	SK001	土坑			近世
2		埋甕遺構		5→2	近代
3		埋甕遺構		5→3	近代
4		埋甕遺構		5→4	近代
5	SF005	道路状遺構	刻名瓦 印判手染付		近世末・明治時代
6		埋甕遺構		5→6	近代
7	SD007	溝状遺構		7→8 97→7	近代
8		溝状遺構		7→8	
9	SK009	土坑			近世
10	SV010	側溝・土塀基礎			近世
11	SK011	土坑		12→11	
12	SK012	土坑	土師器坏	12→11	古代?
13	SK013	掘立柱建物		22→13	近世
14	SK014	土坑		22→14	近世
15	SX015	溜まり状?		40→41→15	近世
16	SK016	土坑		17→16	近世
17	SK017	土坑		17→16	近世
18	SP018	ピット	綠釉陶器 土師器坏		古代?
19	SK019	土坑		23→19	
20	SP020	ピット?	唐津皿	26→20	17世紀代?
21		土坑	土師器坏d		古代?
22	SK022	土坑		13、14→22	
23	SK023	土坑		23→19	ピットと番号重複
24		ピット		25→24	近世
25		ピット		25→24	近世
26	SK026	土坑		27→26→20	近世
27		土坑?		27→26→20	近世
28		ピット?		30、43→28	近世
29		土坑?			近世
30		ピット?		43→30→28	近世
31		土坑?			近世
32	SX032	溝状遺構	肥前染付碗・皿 関西系陶器	43→33→32	18世紀後半～19世紀前半
33	SX033	大型土坑	軒平瓦	33→32、40	S-44・46と同一
34	SK034	土坑	初期伊万里皿 青磁徳利		18世紀代
35	SX033	大型土坑	軒平瓦	S-33と同一遺構	18世紀後半
36	SP036	ピット	軒平瓦		近世
37		ピット?		38→37	
38		ピット?		38→37	
39		ピット?			
40	SX040	豎穴×溜まり状		33→40→41→15	
41	SX041	土坑?	軒丸瓦	40→41→15	近世
42	SE042	井戸跡	印判手染付	42→33→40	近代に掘り返し?
43	SX033	豎穴遺構	肥前産擂鉢	43→33→32 43→30→28	18世紀後半
44	SX033	大型土坑			S-33と同一
45	SX045	礫廻棄土坑	肥前産擂鉢 土師質大甕		18世紀代
46	SX046	大型土坑	青磁皿（買入多し）		近世後半?
47					
48					
49					
50		埋甕遺構	土師質大甕		18世紀代
51		溜まり状	綠釉陶器 土師器坏		18世紀後半～
52		溜まり状		60→52	
53	SD053	溝状遺構	クロム青磁皿		近代
54		溜まり状	軒平瓦	5→54	近代
55	SK055	土坑	肥前染付 軒平瓦	60、73→55	18世紀後半
56		攢乱坑?	玩具 瓦質管	5→56	近代～
57		ピット		60→57	
58	SD058	側溝・土塀基礎		67→58→53	幕末頃
59	SK059	土坑	丸瓦	203→59	近世
60	SK060	火災処理土坑	肥前染付皿 布袋徳利 瓦	60→55	18世後半～19世紀前半
61	SK061	土坑			近世
62		ピット		66→62	
63	SP063	柱穴			
64	SK064	土坑			近世
65					
66	SP066	柱穴	唐津皿（砂目積み）	66→62	17世紀前半
67	SX067	溝状?	軒平瓦	70→67	近世

S番号	遺構名	性 格	主な出土遺物	新旧関係	時 期
68	SX068	整地層？	焼締陶器擂鉢		近世
69	SD069	溝状遺構	印判手染付皿	77→69→58	明治時代～
70	SE092	土坑	京都系土師器 初期伊万里壺	92→71→70	18世紀代
71		整地×溜まり		92→71→67	18世紀代
72		溜まり状		53→72→58、60	
73	SK073	地下式土坑		73→74→55	18世紀代
74		ピット？		73→74→55	
75		整地層	非口クロ系土師質土器皿	75→60、66	17世紀前半～後半
76		ピット			
77	SD077	溝状遺構	クロム青磁皿	5→77→69	明治時代
78					
79					
80	SE080	井戸跡			中世
85	SE080	井戸跡	綠釉陶器 土師器坏	85→60	9世紀前半～中頃
92	SE092	井戸跡	肥前染付	92→70	18世紀代

府内城・城下町第18次A区遺構台帳 第2面

S番号	遺構名	性 格	主な出土遺物	新旧関係	時 期
90	SD090	溝状遺構	軟質施釉陶器 唐津皿(砂目積み)	201→90	16世紀代
91	SP091	ピット	呉器手碗		17世紀後半
93					
94	SK094	土坑	肥前染付		18世紀後半～19世紀代
95					
96		ピット			
97			土師器蓋・坏		古代
98					
99	SA145a	柱穴	油差し		17世紀後半
100	SB100	掘立柱建物			17世紀前半
160	SX160	溜まり状		192→160	近世？
161		柱穴			
162		柱穴			
163		柱穴		A1グリットのものと重複	
164	SB120e	掘立柱建物			17世紀前半
165					
166	SB120d	柱穴			
167	SX167	土坑？			
168	SA135a	柵跡			17世紀代？
169	SP169	柱穴			17世紀代？
170					
171					
172	SA135b	柵跡			17世紀代？
173	SP173	柱穴	軒丸瓦		近世
174	SX174	溜まり状		176→174	
175	SE175	井戸跡			9世紀前半～中頃
176		柱穴		176→174	
177	SB100b	掘立柱建物	土師器盤		17世紀前半
178	SB100d	掘立柱建物			17世紀前半
179	SB100e	掘立柱建物		181→179	17世紀前半
180					
181		柱穴		181→179	
182	SB100f	掘立柱建物	絵唐津皿	175→182	17世紀前半
183		柱穴			近世？
184		柱穴			近世？
185					
186		柱穴			近世？
187		柱穴			近世？
188	SB100a	掘立柱建物			17世紀前半
189		柱穴			近世？
190					
191		柱穴			近世？
192		柱穴		192→160	近世？
193	SB120b	掘立柱建物			17世紀前半
194	SB120c	掘立柱建物			17世紀前半
195					
196	SP196	柱穴？			17世紀代
197		柱穴			
198		柱穴		175→198	
199	SP199	柱穴	土師質焙烙 繩文土器	175→199	18世紀代 SB100？
200					

S番号	遺構名	性 格	主な出土遺物	新旧関係	時 期
201	SB100	掘立柱建物			17世紀前半
202	SB100	掘立柱建物			17世紀前半
203		ピット		第1面で番号が重複	
204	SP204	柱穴	瓦器椀		近世?
205					
206		ピット			
207	SP207	柱穴	肥前染付		近世
208		柱穴			
209		柱穴			

府内城・城下町第18次B区 遺構台帳①

S番号	遺構名	性 格	主な出土遺物	新旧関係	時 期
101	SX101	溝状×整地	初期伊万里大皿 肥前染付		19世紀前半
102	SX102	溝状×整地	ガラス製容器	146→101→103	近代?
103	SK103	廃棄土坑	焼き継ぎ磁器、肥前染付	147→103→101 114→103	幕末頃
104	SX104	廃棄土坑	肥前染付	105、122→104	18世紀後半～19世紀代
105	SX105	整地?	肥前染付	105→109	18世紀後半
106		整地?	肥前染付紅皿	112、113→106	18世紀～19世紀
107	SP107	ピット	ガラス製容器	126→107	近世?
108	SK108	土坑	焼き継ぎ磁器、土製玩具	S-136と同一	19世紀代
109		ピット		126→105→109	
110	SX110	整地?		110→126、104、105	
111	SX111	整地?	初期伊万里 国産陶器鉢	105→111 151～153→111	19世紀代?
112	SX112	土坑?	京・信楽系碗?	112→106	近世
113		土坑?		113→106	
114	SK103	廃棄土坑	焼き継ぎ磁器、肥前染付	117→116→114→103	幕末頃
115					
116	SK116	土坑?		117→116→114→103	
117	SX117	土坑?		134→117→116	
118		攪乱坑?		123→118	
119	SX119	溝状?		119→119	
120					
121	SK121	廃棄土坑	肥前染付 鬢水入れ 簪	123→121→124	18世紀後半～19世紀前半
122		埋甕遺構		122→104	
123	SK123	廃棄土坑	肥前染付	123→118、121	18世紀末～19世紀中頃
124	SK124	廃棄土坑	肥前染付 関西系陶器	121、142→124	18世紀後半～19世紀前半
125					
126	SX126	整地×溝状	肥前染付端反り碗	106→105、107、109→126	19世紀代
127		溜まり状		128→127	
128	SK128	土坑	萩産天目	128→127	19世紀代
129	SK129	土坑	堺産擂鉢	137→129	
130	SV130	石組み土坑	非口クロ系土師質土器皿		17世紀前半
131	SX131	埋甕遺構	土師質大甕	132→131	
132	SX132	埋甕遺構	土師質大甕	132→131	
133		溜まり状		150→133	
134	SX134	埋甕遺構	土師質大甕	134→117	
135					
136	SK108	土坑		S-108と同一	
137		ピット		137→129	
138					
139	SX139	溜まり状?		143→102→139→114	18世紀～19世紀
140	SP140	柱穴			
141	SX141	整地×溜まり状		150、151→141	
142	SP142	ピット	初期伊万里・唐津皿	142→124	近世前半
143	SK143	廃棄土坑		143→102→139	
144	SE144	井戸跡		144→117	
145					
146	SK146	土坑	肥前染付碗・手塙皿	146→101	19世紀代
147	SK147	土坑	非口クロ系土師質土器皿	147→101→103	17世紀前半頃
148					
149					
150	SF150	道路状遺構		154→150→133、141	
151	SK151	土坑	肥前染付碗	151→111	18世紀後半
152	SK152	土坑	唐津溝縁皿	152→111	17世紀前半～中頃
153	SK153	土坑		153→152→111	
154		土坑?		154→150	
155					
156		ピット		銅版出土	

府内城・城下町第18次A区出土遺物観察表

遺構番号	S番号(土色)	R番号	図版番号	種類	器種	口径(長・縦)	器高(横・幅)	底径(厚)	備考
	A区1トレ	R001	38図17	肥前磁器	碗		3.1+α		焼き継ぎ文字有り
	A区1トレ	R002	37図18	肥前磁器	碗		2.4+α		焼き継ぎ有り
	A区3トレ	R001	38図19	肥前陶器	瓶		4.1	(6.4)	
	A区B2検出時	R001	38図20	肥前磁器	皿		1.5+α		
	A区B4暗茶褐色土検出	R001	32図21	土師質土器	皿	12.1	3.1		非ロクロ系
	A区C3暗茶褐色土検出	R001	32図22	土師質土器	皿	(13.2)	2.8		非ロクロ系
SF005	A区S-5	R001	23図1	陶器	碗	(10.8)	3.3+α		刷毛目唐津
SF005	A区S-5	R002	23図2	瓦	棟瓦		20.9+α	1.85	「合」の刻印あり
SF005	淡茶灰砂礫土	R001	23図4	陶器	灯明具	(4.6)	5.98		18~19世紀代
SF005	淡茶灰砂礫土	R002	23図3	磁器	碗	6.8	3.2+α		
SF005	淡茶灰砂質土	R001	23図9	磁器	碗	(9.76)	4.15+α		端反り碗 19世紀代
SF005暗茶色土	A区S-5 暗茶褐色土	R001	23図5	磁器	碗		2.3+α	3.2	型紙刷り印判手 明治時代~
SF005暗茶色土	A区S-5 暗茶褐色土	R002	23図6	繩文土器	深鉢		6.75+α		
SF005路面 (灰色系砂質土)	A区S-5 道路	R001	23図8	磁器	皿	(10.6)	2.1	(6.0)	クロム青磁 近代以降
SF005路面 (灰色系砂質土)	A区S-5 道路	R002	23図7	磁器	蓋	(9.6)	2.8+α	3.8	19世紀代
SD007	A区S-7	R001	23図26	緑釉陶器	碗		2.5+α	(8.6)	
SD007	A区S-7	R002	23図27	陶器	鉢		4.7+α		絵唐津 17世紀前半
SK012	A区S-12	R001	24図1	土師器	环a	(13.6)	3.5	(8.6)	
SK012	A区S-12	R002	24図2	土師器	碗	(12.5)	3.0+α	(8.0)	
SK012	A区S-12	R003	24図3	土器	深鉢?		4.0+α		
SP018	A区S-18	R001	28図1	緑釉陶器?	碗				底部回転糸切 刻印有り
SP018	A区S-18	R003	28図3	土師器	环		3.75+α		
SP018	A区S-18	R004	28図4	土師	环		3.4+α		
SP018	A区S-18	R005	28図5	土師器	环		3.1+α		
SP018	A区S-18	R006	28図7	土師器	环蓋?		1.65+α		
SP018	A区S-18	R007	28図2	須恵器	环c		1.35+α	(7.2)	
SP018	A区S-18	R008	28図6	土師器	环		1.05+α		
SP020	A区S-20	R001	28図8	肥前陶器	皿		2.0+α		
SX021	A区S-21	R001	31図12	土師器	环d	(12.9)	3.2	5.7	
SX021	A区S-21	R002	31図11	土師器	环d		3.2+α		
SX021	A区S-21	R003	31図13	土師器	移动式カマド?	8.1+α	11.8+α	1.0前後	
A区S-22	R001			磁器	碗		2.9+α		
A区S-29	R001			陶器	擂鉢		6.45+α	9.5	
A区S-31	R001			陶器	鉢+皿		2.8+α		
A区S-31	R002			磁器	蓋	(10.6)	3.15	(5.6)	
A区S-31	R003			磁器	皿	(11.1)	1.4+α	(5.6)	
A区S-31	R004			磁器	紅皿	(5.0)	1.2	(2.0)	
SX032	A区S-32・S-44	R001	29図5	肥前磁器	皿	13.0	3.4	8.0	18世紀後半~19世紀前半
SX032	A区S-32	R002	29図3	肥前磁器	碗	(9.4)	5.9	(3.0)	1740~1780年代
SX032	A区S-32	R003	29図1	肥前磁器	碗	(10.0)	4.0+α		18世紀後半
SX032	A区S-32	R004	29図4	磁器	そば猪口	(7.1)	6.25	(4.8)	18世紀後半
SX032	A区S-32	R005	29図2	肥前磁器	碗	10.8	3.2+α		18世紀後半 青磁染付
SX032	A区S-32	R006	29図8	陶器	鍋	17.7	6.9+α		18世紀後半
SX032	A区S-32	R007	29図7	肥前陶器	鉢		3.8+α		
SX032	A区S-32	R008	29図6	肥前陶器	碗×皿		1.8+α	5.0	17世紀初め 貝目積み痕
SX032	A区S-32	R009	29図14	瓦	軒平瓦	4.8+α	3.9	1.55	
SX032	A区S-32	R010	29図13	瓦	軒平瓦	2.4+α	4.15	1.9	
SX032	A区S-32	R011	29図12	瓦	軒平瓦	2.25+α	3.6	1.3	
SX032	A区S-32	R012	29図11	瓦	軒平瓦	4.8+α	4.8	1.9	
SX032	A区S-32	R013	29図9	瓦	軒丸瓦	7.0+α	5.35+α	1.4~1.5	
SX032	A区S-32	R014	29図10	瓦	丸瓦	26.7	7.65+α	1.65~2.2	
SX033	A区S-33	R001	29図15	陶器	鉢×皿		3.65+α		
SX033	A区S-33	R002	29図16	陶器	擂鉢	(32.0)	6.15+α		螺産?
SX033	A区S-33	R003	29図21	瓦	軒丸瓦	3.25+α	8.75+α	2.4~2.6	
SX033	A区S-33	R004	29図20	瓦	軒丸瓦	3.5+α	15.0+α	1.85~2.35	
SX033	A区S-33	R005	29図17	瓦	軒丸瓦	2.3+α	7.8+α	1.1~1.6	
SX033	A区S-33	R006	29図19	瓦	軒平瓦	3.15	14.5	2.2~2.3	
SX033	A区S-33	R007	29図18	瓦	軒平瓦	2.6+α	11.0+α	1.35~1.75	
SX033	A区S-33	R008		瓦	軒平瓦	12.0+α	3.6	1.7	同一個体②
SX033	A区S-33	R009	30図25	瓦	軒平瓦	8.55+α	4.5	1.8	
SX033	A区S-33	R010	30図24	瓦	軒平瓦	4.85+α	3.6	1.6	
SX033	A区S-33	R011	30図23	瓦	軒平瓦	2.15	2.5+α	1.7	
SX033	A区S-33	R012		瓦	軒平瓦	10.35+α	3.65	1.55	同一個体①
SX033	A区S-33	R013	30図22	瓦	軒平瓦	6.15+α	4.65	1.65	
SX033	A区S-33	R014	30図26	瓦	軒平瓦	5.5+α	3.55	1.5	同一個体①
SX033	A区S-33	R015	30図27	瓦	軒平瓦	16.5+α	3.75	1.6	同一個体②
SK034	A区S-34	R001	24図4	磁器	染付皿	13.3	4.2	5.4	初期伊万里
SK034	A区S-34	R002	24図5	磁器	徳利		4.4+α		18世紀代
SK035	A区S-35	R001	24図6	瓦	軒平瓦	4.8+α	4.15	2.05	
SP036	A区S-36	R001	28図9	瓦	軒平瓦	7.85+α	4.85	2.05	
SK041	A区S-41	R001		陶器	鉢		2.03+d	(4.8)	
SK041	A区S-41	R002	24図7	瓦	軒丸瓦	2.85+α	13.9+α	2.1	
SE042	A区S-42	R001	22図1	磁器	皿		3.3		型紙刷り印判手 明治時代~
SE042	A区S-42	R002	22図2	陶器	碗		5.3+α	5.5	全体明白緑釉
SX033	A区S-43	R001	30図28	肥前陶器	擂鉢		9.5+α		
SX033	A区S-43	R002	30図29	焼締陶器	擂鉢		2.45+α		
SX033	A区S-44	R002	30図30	瓦	軒平瓦	3.2	12.9+α	1.85	
SX045	A区S-45	R001	30図33	肥前陶器	擂鉢		5.5+α		18世紀代
SX045	A区S-45	R002	30図31	磁器	染付碗		2.85+α		
SX045	A区S-45	R003	30図32	肥前陶器	皿		2.65+α	(7.9)	
SX045	A区S-45	R004	30図45	土師質	大甕	(56.0)	8.25		18世紀代

遺構番号	S番号(土色)	R番号	図版番号	種類	器種	口径(長・縦)	器高(横・幅)	底径(厚)	備考
SX045	A KS-45	R005	30図36	瓦	軒丸瓦	4.75+α	10.0+α	2.0	
SX045	A KS-45	R006	30図35	瓦	軒丸瓦	8.0+α	6.85+α	2.0	
SX046	A KS-46	R001	30図37	磁器	皿	(13.6)	3.5	(8.5)	産地不明
SX051	A KS-51	R001	28図10	緑釉陶器	皿		1.2+α	(7.8)	防長系
SD053	A KS-53	R001	23図22	クロム青磁	碗		2.9+α		近代
SD053	A KS-53	R002	23図23	磁器	皿?		1.02+α	4.8	焼き継ぎ有り
SD053	A KS-53	R003	23図24	磁器	染付そば猪口	(7.3)	2.25+α	(6.8)	焼き継ぎ文字有り
SD053	A KS-53	R004	23図25	ガラス製品	把手×脚		1.5+α		
SX054	A KS-54	R001	31図1	瓦	軒平瓦	14.2+α	4.2	1.65	
SK055	A KS-55	R001	24図8	磁器	筒型碗青磁	7.43	6.35	3.9	1770~1780年代
SK055	A KS-55	R002	24図9	磁器	碗	8.0	5.3+α		
SK055	A KS-55	R003	24図11	肥前陶器	碗		2.0+α	4.6	17世紀前半 砂目積み
SK055	A KS-55	R004	24図10	国産陶器	向付?		2.6+α		志野産
SK055	A KS-55	R005	24図12	瓦質	焜炉	(25.4)	6.4+α		19世紀代
SK055	A KS-55	R006	24図16	瓦	軒平瓦	11.15+α	3.2	1.35	同一個体③
SK055	A KS-55	R007	24図14	瓦	軒平瓦	5.05+α	4.0	1.9	
SK055	A KS-55	R008	24図15	瓦	軒平瓦	10.15+α	3.7	1.6~1.65	
SK055	A KS-55	R009	24図13	瓦	軒平瓦	6.25+α	4.75	1.25	
SK055	A KS-55 淡灰茶土	R001	24図17	磁器	皿?		2.45+α		
SK055	A KS-55 淡灰茶土	R003		瓦	軒平瓦	6.7+α	3.3	1.3	同一個体③
SK055	A KS-55 淡灰茶土	R004	24図20	瓦	軒平瓦	19.6+α	4.85	1.85~1.9	
SK055	A KS-55 淡灰茶土	R005	24図19	瓦	軒平瓦	13.0+α	4.5	1.55~1.6	
SK055	A KS-55 淡灰茶土	R006	24図18	瓦	軒丸瓦	2.3	8.0+α	1.05~1.45	
SX056	A KS-56	R001	31図2	磁器	急須	2.5	2.65	2.4	玩具
SX056	A KS-56	R002	31図4	瓦質	土管	(11.0)	18.8+α		
SX056	A KS-56	R003	31図3	瓦質	土管	(15.0)	19.75+α		
SD058	A KS-58	R001	23図10	磁器	碗	(8.5)	4.85	(3.0)	端反り碗 19世紀代
SD058	A KS-58	R002	23図11	陶器	擂鉢		4.3+α	(20.8)	産地不明
SD058	A KS-58	R003	23図14	瓦	軒平瓦	4.9+α	4.8	1.6	
SD058	A KS-58	R004	23図12	瓦	軒平瓦	2.7+α	4.85	1.5	
SD058	A KS-58	R005	23図13	瓦	軒平瓦	2.75	2.6+α	1.95	
SD058	A KS-58	R006	23図18	金属製品	煙管	5.2	2.0		
SD058	A KS-58	R007		土師質土器	环		3.25+α		
SD058	A KS-58	R008	23図17	瓦	軒平瓦	13.5+α	3.6	1.55	
SD058	A KS-58	R009	23図16	瓦	軒平瓦	11.9+α	3.45	1.5	
SD058	A KS-58	R010	23図15	瓦	軒平瓦	6.85+α	3.5	1.4	
SK059	A KS-59	R001	24図21	瓦	丸瓦	27.0	13.0	6.1	
SK060	A KS-60	R001	25図2	磁器	肥前産碗		2.3+α	3.2	18世紀代
SK060	A KS-60	R002	25図6	磁器	肥前染付碗		5.95+α		大振りの碗か?
SK060	A KS-60	R004	25図8	磁器	肥前染付皿	14.2	3.8	8.5	18世紀末~19世紀前半
SK060	A KS-60	R005	25図4	磁器	肥前染付碗		3.1	4.5~4.6	1700~1750年代
SK060	A KS-60	R006	25図9	磁器	仏飯具		2.3+α	3.24	18~19世紀代
SK060	A KS-60	R007	25図5	陶胎染付	陶胎染付碗		5.0		肥前産 18世紀代
SK060	A KS-60	R008	25図3	磁器	碗?		2.5~2.9+α	5.0	産地不明
SK060	A KS-60	R009	25図7	磁器	肥前染付皿		1.75+α		初期伊万里
SK060	A KS-60	R010	25図1	磁器	肥前盆	(4.8)	2.6+α		19世紀代
SK060	A KS-60	R011	25図11	陶器	肥前産鉢		3.1+α		18世紀代 刷毛目唐津
SK060	A KS-60	R012	25図15	磁器	人形足部		3.0+α		力士人形?
SK060	A KS-60	R013	25図12	焼締陶器	備前産 徳利		13.8+α		18世紀代 布袋徳利
SK060	A KS-60	R014	25図16	建築部材	壁土		6.0+α		
SK060	A KS-60	R015	25図17	建築部材	壁土		3.4~4.3		
SK060	A KS-60	R016	25図10	陶器	肥前産鉢		5.35+α		18世紀代 刷毛目唐津
SK060	A KS-60	R017	25図13	土師質土器	蓋	2.3	1.95~2.05	6.3	燒塗壺蓋
SK060	A KS-60	R018	25図14	弥生土器	壺		5.6+α	6.8	弥生前期
SK060	A KS-60	R019	25図19	瓦	鬼瓦?	12.9	7.35	4.95	
SK060	A KS-60	R020	26図24	瓦	軒丸瓦	2.45+α	9.5+α	1.4~2.15	
SK060	A KS-60	R021	26図25	瓦	軒丸瓦	9.9		2.15	
SK060	A KS-60	R022		瓦	軒平瓦	2.95		1.85	
SK060	A KS-60	R023	25図18	不明銅製品		5.3+α	10.3+α	0.1	
SK060	A KS-60	R024		瓦	軒丸瓦	1.8	9.75+α	1.7	
SK060	A KS-60	R025	26図28	瓦	軒丸瓦	3.0	9.6+α	1.75	
SK060	A KS-60	R026	26図30	瓦	軒丸瓦	3.6	13.35	2.5~3.2	
SK060	A KS-60	R027	26図29	瓦	軒丸瓦	24.0	11.55+α	1.9	
SK060	A KS-60	R028	26図27	瓦	軒丸瓦	1.95	9.35+α	1.95	
SK060	A KS-60	R029	26図26	瓦	軒丸瓦	3.0	13.15+α	2.15	
SK060	A KS-60	R030	26図23	瓦	軒丸瓦	9.1+α	13.6	2.0	
SK060	A KS-60	R031	26図22	瓦	丸瓦	20.08+α	17.15	2.35	
SK060	A KS-60	R032	26図21	瓦	丸瓦	10.5	15.6	2.0	
SK060	A KS-60	R033	25図20	瓦	平瓦	32.1	28.5	1.9	
SK060	A KS-60	R034	27図32	瓦	軒平瓦	16.25	15.8	1.55~1.65	
SK060	A KS-60	R035		瓦	軒平瓦	11.25	13.25	1.65	
SK060	A KS-60	R036	27図40	瓦	軒平瓦	11.1	15.2	1.85~1.9	
SK060	A KS-60	R037	27図41	瓦	軒平瓦	11.25	11.7	1.65	
SK060	A KS-60	R038	27図33	瓦	軒平瓦	14.4	11.15	1.8~1.85	
SK060	A KS-60	R039	27図38	瓦	軒平瓦	6.65	12.65	1.95~2.1	
SK060	A KS-60	R040	27図36	瓦	軒平瓦	6.8+α	4.45	1.8~1.9	
SK060	A KS-60	R041	27図37	瓦	軒平瓦	4.75+α	4.45	1.65	
SK060	A KS-60	R042	27図35	瓦	軒平瓦	4.15		1.75	
SK060	A KS-60	R043	27図34	瓦	軒平瓦	4.3+α	4.55	1.7	
SK060	A KS-60	R044	27図31	瓦	軒平瓦	5.7+α	4.65	1.7~1.75	
SK064	A KS-64	R001	27図44	陶器	鉢?		2.7+α		
SK064	A KS-64	R002	27図43	肥前磁器	鉢?		5.4+α	4.8	
SP066 (SB100j)	A KS-66	R002	33図6	石製品	砥石		4.9+α	4.6	結晶片岩
SP066 (SB100j)	A KS-66	R001	33図5	肥前陶器	皿	12.2	3.8	4.3	17世紀前半 砂目積み
SX067	A KS-67	R002		石製品?	砥石	11.65	7.05	1.7	
SX067	A KS-67	R001	31図5	肥前陶器	碗		3.0+α	(4.0)	
SX067	A KS-67	R002	31図10	瓦	軒平瓦	6.45+α	3.25	1.4	
SX067	A KS-67	R003	31図9	瓦	軒平瓦	6.45+α	3.5	1.5~1.6	
SX067	A KS-67	R004	31図8	瓦	軒平瓦	10.95+α	3.25	1.5	
SX067	A KS-67	R005	31図7	瓦	軒平瓦	4.35+α	3.85	1.6	

遺構番号	S番号(土色)	R番号	図版番号	種類	器種	口径(長・縦)	器高(横・幅)	底径(厚)	備考
SX068	AIXS-68	R006	31図6	瓦	軒丸瓦	2.45	12.6+α	0.9~1.45	
SX068	AIXS-68	R001	32図1	焼締陶器	擂鉢	(17.0)	3.2+α		壇座?
SD069	AIXS-69	R002	32図2	瓦	軒平瓦	12.4+α	3.7	1.6~1.7	
SD069	AIXS-69	R001	23図19	クロム青磁	碗	(10.4)	3.4+α		近代~
SD069	AIXS-69	R002	23図20	陶器	小壺	(6.6)	2.6+α		
SE092	AIXS-70	R003	23図21	磁器	皿	12.4	3.35	7.5	明治時代~
SE092	AIXS-70	R001	22図6	陶器	皿		2.1+α		
SE092	AIXS-70	R002	22図5	磁器	皿		1.7+α	9.0	18世紀前半
SE092	AIXS-70	R003	22図4	磁器	瓶		4.6+α		17世紀前半
SE092	AIXS-70	R004	22図3	磁器	鉢?		6.9+α		18世紀代
SE092	AIXS-70	R005	22図8	京都系土師器	皿		2.2+α		16世紀後半~
SE092	AIXS-70	R006	22図7	京都系土師器	皿		1.4+α		16世紀後半~
SE092	AIXS-70	R007	22図9	土製品	土鍤	2.4	2.7	2.2	
SE092	AIXS-70	R008	22図15	瓦	軒平瓦	7.55+α	3.45	1.55	
SE092	AIXS-70	R009	22図12	瓦	軒丸瓦	2.0+α	9.25+α	1.35	
SE092	AIXS-70	R010	22図13	瓦	軒丸瓦	1.85	5.25+α	1.38	
SE092	AIXS-70	R011	22図14	瓦	軒平瓦	9.2+α	3.75	1.6~1.65	
SE092	AIXS-70	R012	22図11	瓦	軒丸瓦	10.45+α	12.65+α	2.15	
SE092	AIXS-70	R013	22図10	瓦	軒丸瓦	18.6+α	7.8+α	1.85~2.1	
SE092 (S-70暗茶褐土)	AIXS-70躊躇	R001	22図17	京都系土師器	皿		2.5		16世紀後半~
SE092	AIXS-70暗茶灰土	R001	22図16	陶器	碗		3.2+α	3.4	
SE092	AIXS-70上位の層	R001	22図18	磁器	碗		3.0+α	3.4	18世紀代
SK073	AIXS-73	R001		磁器	碗		1.85+α	4.0	
SX075	AIXS-75	R001	32図7	肥前陶器	擂鉢		3.4+α		
SX075	AIXS-75	R002	32図14	土製品	焼塙壺	4.9	10.2	3.6	17世紀前半
SX075	AIXS-75	R004	32図18	繩文土器	浅鉢		3.3+α		繩文晚期?
SX075	AIXS-75	R005	32図17	土製品	土鍤	8.95	3.35		
SX075	AIXS-75	R006	32図15	土製品	土鍤	4.7	1.45		
SX075	AIXS-75	R007	32図16	土製品	土鍤	4.6	1.6		
SX075	AIXS-75	R008	32図3	肥前磁器	染付碗		6.0+α		
SX075	AIXS-75	R009	32図6	肥前磁器	瓶	(3.0)	7.6+α		
SX075	AIXS-75	R010	32図4	肥前磁器	染付小皿	(8.9)	1.9	(5.7)	
SX075	AIXS-75	R011	32図5	青磁	碗?		2.1+α		
SX075	AIXS-75	R012	32図8	肥前陶器	皿		2.95+α	(5.54)	17世紀前半 終唐津
SX075	AIXS-75	R013	32図9	肥前陶器	皿		2.6+α	(4.6)	17世紀前半 終唐津
SX075	AIXS-75	R014		須恵器	甕×壺		3.7+α		
SX075	AIXS-75	R015	32図10	瓦質土器	浅鉢?		3.5		中世?
SX075	AIXS-75	R016	32図12	京都系土師器	皿	(8.6)	2.4+α		
SX075	AIXS-75	R017	32図11	京都系土師器	皿		2.2+α		
SX075	AIXS-75	R018	32図13	土師質土器	大甕		7.9+α		18世紀代
SX075	AIXS-75	R019	32図19	瓦	軒丸瓦	8.0+α	7.5	1.6~1.9	
SX075	AIXS-75	R020	32図20	瓦	丸瓦	34.0	15.15+α	2.2	
SD077	AIXS-77	R001	23図28	クロム青磁	皿	10.6	2.1	6.0	明治時代~
SD077	AIXS-77	R003	23図29	ガラス製品	薬瓶?				近代?
SE085	AIXS-85	R002	23図30	銅製品	キセル	7.4	1.05		幕末~近代
SE085	AIXS-85	R001	34図9	土師器	甕		6.3+α		
SE085	AIXS-85	R002	34図3	須恵器	甕		3.0+α		
SE085	AIXS-85	R003	34図5	土師器	碗		1.6+α	(9.9)	
SE085	AIXS-85	R004	34図8	土師器	甕		3.4+α		
SE085	AIXS-85	R005	34図7	土師器	蓋		1.45+α		
SE085	AIXS-85	R006	34図4	土師器	碗×环		1.4+α		
SE085	AIXS-85	R007	34図2	須恵器	环c		2.0+α	(7.4)	
SE085	AIXS-85	R008	34図6	土師器	环a	(12.1)	3.15	(6.9)	
SE085	AIXS-85	R009		土師器	环a	12.1	3.15	6.9	
SE085	AIXS-85	R010	34図1	白磁	碗		1.4+α		
SE085	AIXS-85 井筒灰色粘土	R001	34図18	黒色土器A類	碗		2.4+α		
SE085	AIXS-85 井筒砂屑	R001	34図20	土師器	环a	(11.2)	4.55+α		
SE085	AIXS-85 井筒砂屑	R002	34図20	土師器	甕		2.6+α		
SE085	AIXS-85 井筒砂屑	R003	34図22	土師器	蓋		2.2+α		
SE085	AIXS-85 井筒砂屑	R004	34図23	土師器	环a		2.4+α		
SE085	AIXS-85 井筒砂屑	R005	34図21	土師器	蓋		1.8		
SE085	AIXS-85 井筒内	R001	34図12	須恵器	甕		20.25		
SE085	AIXS-85 井筒内	R002	34図16	土師器	环		3.0+α	5.9	
SE085	AIXS-85 井筒内	R003		土師器	碗		3.1	8.1	
SE085	AIXS-85 井筒内	R004	34図13	土師器	环	(12.0)	3.4+α		
SE085	AIXS-85 井筒内	R005	34図15	土師器	环d		2.0+α		
SE085	AIXS-85 井筒内	R006	34図11	須恵器?	蓋		1.4		
SE085	AIXS-85 井筒内	R007	34図10	黒色土器A類	碗		3.3+α		
SE085	AIXS-85 灰茶土	R008	34図17	土師器	製塙土器?		2.2+α		
SE085	AIXS-85 灰茶土	R001	35図46	弥生土器	甕	(21.0)	9.95+α		
SE085	AIXS-85 灰茶土	R002	35図29	土師器	蓋a	13.8	2.1	10.5	
SE085	AIXS-85 裏込め	R003	35図30	土師器	蓋a	14.2	2.5	10.3	
SE085	AIXS-85 裏込め	R001	35図39	磁器	碗?		3.55+α		
SE085	AIXS-85 裏込め	R002	35図33	土師器	蓋		2.4		
SE085	AIXS-85 裏込め	R003	35図38	黒色土器A類	碗		3.2+α		
SE085	AIXS-85 裏込め	R004	35図41	土師器	环a		1.0	7.1	
SE085	AIXS-85 裏込め	R005	34図25	灰釉陶器	碗×环		1.2+α		
SE085	AIXS-85 裏込め	R006	34図24	灰釉陶器	碗		1.4		
SE085	AIXS-85 裏込め	R007	34図28	焼締陶器	壺		4.85+α		
SE085	AIXS-85 裏込め	R008	35図35	土師器	环a	(13.8)	3.4	(10.2)	
SE085	AIXS-85 裏込め	R009	35図31	土師器	蓋	(13.3)	2.35		
SE085	AIXS-85 裏込め	R010	35図36	土師器	环a	(14.6)	3.2	(9.8)	
SE085	AIXS-85 裏込め	R011	35図42	土師器	环a		1.2+α	6.6	
SE085	AIXS-85 裏込め	R012	35図40	土師器	环a?		1.8+α	(8.5)	
SE085	AIXS-85 裏込め	R013	35図34	土師器	环	(14.3)	3.1+α		
SE085	AIXS-85 裏込め	R014	35図37	土師器	环		3.85+α		
SE085	AIXS-85 裏込め	R015	35図32	土師器	蓋		2.05+α		
SE085	AIXS-85 裏込め	R016	35図43	土師器	碗		1.95	7.6	
SE085	AIXS-85 裏込め	R017	34図27	須恵器	平瓶?	6.3	3.35		

遺構番号	S番号(土色)	R番号	図版番号	種類	器種	口径(長・縦)	器高(横・幅)	底径(厚)	備考
SE085	A区S-85 裏込め	R018	34図26	陶器	鉢	2.3+α			
SE085	A区S-85 裏込め	R019	35図44	土器	甕	(20.0)	6.3+α		
SD090	A区S-90	R020	35図45	土師器	企救型甕	(22.1)	4.6+α		
SD090	A区S-90	R001	37図1	青磁	皿	2.7+α	(4.2)		龍泉窯系
SD090	A区S-90	R002	37図2	焼締陶器	擂鉢	3.3+α	(13.9)		備前産
SD090	A区S-90	R003	37図8	石製品	石臼	7.8+α			
SD090	A区S-90	R004	37図7	瓦	軒丸瓦	4.6			
SD090	A区S-90	R005	37図4	黒色土器A類	皿	(12.9)	1.8+α		用途不明
SD090	A区S-90	R006		土師	碗	(13.4)	1.6		
SD090	A区S-90	R007	37図6	土師	蓋	(13.4)	1.6		
SD090	A区S-90	R008	37図5	土師器	皿(高台付)	(12.0)	3.3	(6.7)	
SD090	A区S-90	R009		綠釉陶器	碗	1.4+α			
SD090	A区S-90 灰茶土	R001	37図9	陶器	碗	4.9+α			軟質施釉陶器 17世紀代
SD090	A区S-90 灰茶土	R002	37図10	繩文土器	深鉢	4.0+α			
SP091	A区S-91	R001		肥前陶器	碗	(11.4)	8.0	5.0	17世紀中頃～後半
SP091	A区S-91	R002		土器(縄文)	深バチ	4.3+α			
SK094	A区S-94	R001	37図11	肥前磁器	碗	(7.2)	5.4	(3.0)	18世紀前半～中頃
SK094	A区S-94	R002	37図13	瓦	軒丸瓦	9.8			
SX097	A区C3 S-97	R003	37図12	磁器	蓋	(8.3)	2.6		18世紀後半～19世紀代
SX097	A区C3 S-97	R001	37図14	磁器	碗	2.9+α	(3.6)		
SX097	A区C3 S-97	R002	37図21	白磁	碗	2.6+α			大宰府分類V類
SX097	A区C3 S-97	R003	37図3	土師器	环d	(11.8)	3.25		
SX097	A区C3 S-97	R004	37図19	土師器	环×碗	(13.9)	3.0+α		
SX097	A区C3 S-97	R005	37図15	土師器	蓋	(13.3)	2.0		
SX097	A区C3 S-97	R006	37図16	土師器	蓋	(12.7)	2.2		
SX097	A区C3 S-97	R007	37図17	土師器	环a	3.2			
SP099 (SA145a)	A区D2 S-99	R003	33図8	肥前陶器	瓶	3.8	5.4+α		17世紀末～18世紀後半
SP099 (SA145a)	A区D2 S-99	R001	33図10	肥前陶器	水注	11.9+α	5.6		17世紀末～18世紀後半
SP099 (SA145a)	A区D2 S-99	R002	33図9	肥前陶器	花入	2.8	6.9+α		17世紀末～18世紀後半
SP169	A区S-169	R002	33図13	京都系土師器	皿		2.6		17世紀代
SP169	A区S-169	R003	33図12	肥前陶器	絵唐津×向付		1.4+α		17世紀前半代 絵唐津
SP173	A区S-173	R002		磁器	碗	2.8+α	(3.4)		
SE175	A区S-175	R001		瓦	軒丸瓦	14.3	12.8	1.5	
SE175	A区S-175	R001	36図3	綠釉陶器	碗	1.7+α			
SE175	A区S-175	R002	36図2	綠釉陶器	碗	2.3+α			
SE175	A区S-175	R003	36図1	綠釉陶器	碗	0.9+α			
SE175	A区S-175	R004	36図13	土師質	环	1.2+α			
SE175	A区S-175	R005	36図17	土師質	环	2.6+α			
SE175	A区S-175	R006	36図12	土師質	环	1.3+α			
SE175	A区S-175	R007	36図7	須恵器	甕	3.3+α			
SE175	A区S-175	R008	36図16	土師器	碗	1.7+α			
SE175	A区S-175	R009	36図8	須恵器?	环c	1.1+α			
SE175	A区S-175	R010	36図5	黒色土器B	碗	2.7+α			
SE175	A区S-175	R011	36図11	土師器	蓋	1.5+α			
SE175	A区S-175	R012		土師器	カマド?	2.6+α			
SE175	A区S-175	R013		土師器	鉢	4.3+α			
SE175	A区S-175	R014		土師器	甕	3.2+α			
SE175	A区S-175	R015	36図15	土師器	环d	(12.4)	2.6+α		
SE175	A区S-175	R016	36図26	土製品	土鍤	4.5	1.1+α		
SE175	A区S-175	R017	36図25	土製品	土鍤	4.1	1.1		
SE175	A区S-175	R018	36図19	土師器	皿	(14.10)	1.8		
SE175	A区S-175	R019	36図14	土師器	环	2.7+α			
SE175	A区S-175	R020	36図6	瓦器	碗	3.1+α			
SE175	A区S-175	R021	36図4	黒色土器A類	碗A類	3.1+α			
SE175	A区S-175	R022	36図20	土師質土器	环	(7.4)	0.9+α		
SE175	A区S-175	R024	36図10	土師質土器	环	3.0+α			中世
SE175	A区S-175	R025	36図18	土師質土器	环	2.8+α			
SE175	A区S-175	R026	36図24	土製品	土鍤	3.5	1.0+α		
SE175	A区S-175	R027	36図9	須恵器	甕	10.0+α			
SE175	A区S-175 灰茶土	R002	36図28	土師器	碗?	2.8+α			白色研磨
SE175	A区S-175 灰茶土	R001	36図27	土師器	环	1.5			
SP177 (SB100b)	A区S-177	R003	33図3	土製品	土鍤	3.0+α			
SP177 (SB100b)	A区S-177	R001	33図2	土師器	盤	(19.0)	1.65		
SP177 (SB100b)	A区S-177	R002	33図1	土師器	盤	(16.0)	1.10		
SP182 (SB100f)	A区S-182	R001	33図4	肥前陶器	皿?	1.4+α			17世紀前半 絵唐津
SP194 (SB120c)	A区S-194	R003	33図7	肥前陶器	碗	3.7	1.0+α	1.05	
SP196	A区S-196	R001	33図15	京都系土師器	皿	0.9+α			
SP199	A区S-199	R002	33図17	繩文土器	鉢	3.4+α			18世紀～19世紀
SP199	A区S-199	R001	33図16	土師質土器	培焰	3.9+α			
SP204	A区S-204	R001		綠釉陶器	碗	2.8+α			
SP207	A区S-207	R002		土師器	不明土製品	3.5+α			
A区カクラン1	R001			磁器	碗	4.4+α			
A区カクラン1	R001	38図5	瓦	平瓦	17.35	12.3	1.45～1.6	「細瓦師永治良・」刻有り	
A区カクラン1	R002	38図4	瓦	平瓦	6.95	3.95	1.65	「永治良・」刻印有り	
A区カクラン1	R003	38図7	瓦	棟瓦	14.3	8.4	1.6～1.7	「引合」の刻有り	
A区カクラン1	R004	38図6	瓦	平瓦	10.2	5.4	1.4～1.45	「引合」の刻有り	
A区カクラン1	R005	38図2	ガラス製品	インク瓶	4.7	3.8	5.3	フェキのり容器	
A区カクラン1	R006	38図1	ガラス製品	インク瓶	1.90	4.55	3.10	poplar6の商品名有り	
A区カクラン1	R007	38図3	ガラス製品	グラス?		4.0+α			
A区カクラン2	R001	38図8	肥前陶器	皿×碗		2.0+α			
A区カクラン8	R001	38図9	青磁	皿(輪花)					龍泉窯系
A区カクラン8	R002	38図10	土製品	移動式カマド	11.4+α	6.7+α	6.0		
A区カクラン9	R001	38図14	国産陶器	マグカップ					
A区カクラン9	R002	38図12	磁器	染付皿	?	3.3	5.4		
A区カクラン9	R003	38図11	青花?	皿		1.8+α			
A区カクラン9	R004	38図13	土師質土器	皿	(14.0)	2.15+α			
A区カクラン12	R001	38図15	肥前磁器	青磁盤		1.6+α			蛇の目釉剥ぎ
A区カクラン12	R002	38図16	国産陶器	壺×徳利		6.3+α	5.4		

遺構番号	S番号(土色)	R番号	図版番号	種類	器種	口径(長・縦)	器高(横・幅)	底径(厚)	備考
A区淡茶灰土	R001	39図9	肥前陶器	皿	(12.8)	3.6	4.2	17世紀前半 絵唐津	
A区淡茶灰土	R002	39図7	磁器	香炉?	(6.8)	4.3+α			
A区淡茶灰土	R003	39図8	磁器	蓋	(7.4)	2.2+α			
A区淡茶灰土	R004	39図6	青花	碗	2.05+α			小野分類E群	
A区淡茶灰土	R005	39図5	磁器	湯のみ碗	6.5	5.2	5.3		
A区淡茶灰土	R006	39図10	瓦	軒平瓦	5.5	10.95	1.4~1.45		
A区淡茶灰土	R007	39図11	繩文土器	深鉢	5.4+α				
A区表土	R001	39図12	磁器	小皿	(6.20)	2.75	(3.20)	赤絵 肥前産?	
A区表土	R002	39図15	瓦	平瓦	9.0	8.2	1.45~1.55	「細瓦師永治良・」刻有り	
A区表土	R003	39図13	肥前磁器	杯×皿	(10.2)	3+α		近代以降	
A区不明	R004	39図14	青磁	碗	2.2+α				
A区不明	R001	39図3	磁器	壺	(6.9)	3.6+α			
A区不明	R002	39図2	肥前磁器	碗	(10.1)	5.0+α			
A区不明	R003	39図1	磁器	皿	20.3+α				
A区不明	R004	39図4	国産陶器	壺	12.4	16.65	9.6		

府内城・城下町第18次B区出土遺物観察表

遺構番号	S番号(土色)	R番号	図版番号	種類	器種	口径(長・縦)	器高(横・幅)	底径(厚)	備考
SX101	B区S-101	R001	52図26	肥前陶器	甕	(36.0)	(23.4)		17世紀~18世紀
SX101	B区S-101	R002	52図29	瓦質土器	甕×鍋	28.0	3.6+α		
SX101	B区S-101	R005	52図25	関西系陶器	行平	(7.8)	(6.65)		18世紀後半
SX101	B区S-101	R007	51図16	肥前磁器	染付鉢	12.8	6.35	6.2	19世紀代 焼き継ぎ有り
SX101	B区S-101	R011	52図30	瓦質土器	焜爐	(12.0)			19世紀
SX101	B区S-101	R012	51図19	肥前磁器	染付仏飯具	3.7	6.5	4.7	18~19世紀
SX101	B区S-101	R014	52図27	福岡陶器	擂鉢	25.6	9.3	13.5	18世紀代
SX101	B区S-101	R015	51図15	肥前磁器	青磁染付碗	11.0	6.05	4.0	18世紀後半
SX101	B区S-101	R016	52図21	陶器	碗	(11.7)	5.15	4.7	
SX101	B区S-101	R017	52図17	国産磁器	天目茶碗	10.8	7.05	4.6	17世紀代
SX101	B区S-101	R018	51図14	肥前磁器	染付皿	13.2	3.5	7.75	18世紀後半~19世紀代
SX101	B区S-101	R019	52図19	国産磁器	天目茶碗	(11.2)	7.1	(4.2)	17世紀代
SX101	B区S-101	R020	51図9	肥前磁器	碗	6.8	5.0		18世紀前半~後半
SX101	B区S-101	R021	51図10	瀬戸美濃産磁器	碗	8.3	4.6	3.0	
SX101	B区S-101	R022	52図24	陶器	托	7.5	1.0	3.75	
SX101	B区S-101	R023	51図17	肥前磁器	大皿	(34.0)	4.85	(16.5)	17世紀代 初期伊万里
SX101	B区S-101	R024	51図12	肥前磁器	染付碗	8.8	3.05	3.9	焼き継ぎ有り
SX101	B区S-101	R025	51図18	肥前磁器	色絵皿	2.0+α			
SX101	B区S-101-①	R003	51図15	肥前磁器	染付鉢	16.0	5.4		19世紀代 焼き継ぎ有り
SX101	B区S-101-①	R004	52図28	福岡陶器	擂鉢	7.35	13.7		18世紀代
SX101	B区S-101-①	R006	51図8	肥前磁器	碗	(6.8)	5.15	3.3	18世紀前半~後半
SX101	B区S-101-①	R008	51図13	肥前磁器	染付蓋	(8.7)	2.3		焼き継ぎ有り
SX101	B区S-101-①	R010	52図33	石製品	砥石	7.25	4.3	0.8	
SX101	B区S-101-①	R013	51図20	肥前磁器	染付仏飯具	6.1	6.1	3.8	18~19世紀
SX102	B区S-102	R001	52図31	ガラス製品	瓶	3.0+α			
SX102	B区S-102	R002	52図32	ガラス製品	瓶蓋(栓)	(4.05)	(2.1)		
SK103	B区S-103 灰茶土	R001	45図3	肥前磁器	青磁染付碗	5.1	5.0+α		18世紀?
SK103	B区S-103 灰茶土	R002	45図2	肥前陶器	碗	4.4+α	5.8		
SK103	B区S-103 灰茶土	R003	45図4	肥前陶器	折線皿	(14.8)	3.9	(4.6)	
SK103	B区S-103 灰茶土	R004	45図1	肥前磁器	染付碗	3.9+α			17世紀前半 初期伊万里
SK103	B区S-103 灰茶ブロック土	R001	45図8	肥前磁器	染付碗	(9.5)	5.0	(3.6)	焼き継ぎ有り
SK103	B区S-103 灰茶ブロック土	R002	45図9	肥前陶器	火入れ?	(20.4)	4.8+α		
SK103	B区S-103 灰茶ブロック土	R003	45図15	陶器	加工陶器片	(5.7)		(1.85)	
SK103	B区S-103 灰茶ブロック土	R004	45図6	磁器	染付碗	0.95+α		(2.7)	瀬戸美濃産か
SK103	B区S-103 灰茶ブロック土	R005	45図5	肥前磁器	青磁染付碗	(7.8)	3.5+α		18世紀後半
SK103	B区S-103 灰茶ブロック土	R006	45図11	瓦質土器	浅鉢	3.1+α			
SK103	B区S-103 灰茶ブロック土	R007	45図7	肥前磁器	染付碗	3.4+α		3.3	
SK103	B区S-103 灰茶ブロック土	R008	45図10	肥前陶器	徳利?	13.2+α	8.6		
SK103	B区S-103 灰茶ブロック土	R009	45図13	土師質土器	七輪	14.2+α			18世紀代
SK103	B区S-103 灰茶ブロック土	R010	45図14	土師質土器	七輪	7.1+α			18世紀代
SK103	B区S-103 灰茶ブロック土	R011	45図12	土師質土器	皿	8.6	2.3		非ロクロ系
SX104	B区S-104	R001	55図25	信楽系陶器	蓋	(6.0)	2.9		
SX104	B区S-104	R002	54図17	肥前磁器	染付そば猪口	3.6+α	6.1		18世紀後半~19世紀前半
SX104	B区S-104	R003	54図18	肥前磁器	染付筒型碗	(7.5)	5.2+α		18世紀後半
SX104	B区S-104	R004	54図14	肥前磁器	紅皿	5.2	1.1	1.9	19世紀代
SX104	B区S-104	R005	54図21	肥前磁器	染付碗	5.0+α			
SX104	B区S-104	R006	54図19	磁器	染付丸碗	(7.9)	5.4+α		
SX104	B区S-104	R007	54図24	肥前磁器	染付皿	(10.2)	2.45	5.2	19世紀代
SX104	B区S-104	R008	54図22	肥前磁器	染付碗	(11.4)	6.5	(4.4)	18世紀後半~19世紀
SX104	B区S-104	R009	54図20	国産磁器	染付碗	(8.7)	4.7	(3.2)	瀬戸美濃産?
SX104	B区S-104	R010	54図16	国産陶器(関西)	碗	8.3	5.0	2.4	19世紀代
SX104	B区S-104	R011	54図15	肥前磁器	染付盃?	(6.9)	3.4	2.8	19世紀代 焼き継ぎ文字
SX104	B区S-104	R012	55図30	関西系陶器	土瓶	5.7+α		(6.6)	18世紀代
SX104	B区S-104	R013	55図29	関西系陶器	土瓶	3.5+α			18世紀代
SX104	B区S-104	R014	55図32	瀬戸美濃産陶器	火入れ?	6.3+α			
SX104	B区S-104	R015	55図31	志野焼	向付?	3.0+α			17世紀前半
SX104	B区S-104	R016	55図33	肥前陶器	灯火具?	(10.4)	2.0	(4.0)	
SX104	B区S-104	R017	54図23	肥前磁器	皿		2.9		17世紀代
SX104	B区S-104	R018	55図26	肥前陶器	大皿	4.3+α		(9.2)	17世紀前半 絵唐津
SX104	B区S-104	R019	55図27	肥前陶器	擂鉢	3.0+α			
SX104	B区S-104	R020	55図28	福岡産陶器	擂鉢	3.3+α			
SX104	B区S-104	R021	55図34	石製品	砥石	8.8	3.3	1.1	
SX105	B区S-105	R001	50図14	関西系陶器	鉢?	(7.3)			18世紀後半
SX105	B区S-105	R002	50図1	肥前磁器	染付丸碗	(8.6)	5.75		18世紀後半~19世紀代
SX105	B区S-105	R003	50図15	京・信楽系陶器	蓋	11.0	2.2	1.5	
SX105	B区S-105	R004	50図8	陶器	碗(湯のみ)	(6.75)	5.55		
SX105	B区S-105	R005	50図13	肥前陶器	火入れ	5.7+α			17世紀前半

遺構番号	S番号(土色)	R番号	図版番号	種類	器種	口径(長・縦)	器高(横・幅)	底径(厚)	備考
SX105	B XS-105	R006	50図10	陶器	碗	5.9+α	5.0		
SX105	B XS-105	R007	50図13	磁器	染付碗	(7.5)	(4.65)		
SX105	B XS-105	R008	50図12	肥前磁器	染付碗	3.4	3.4	18世紀後半	
SX105	B XS-105	R009	50図11	肥前陶器	溝線皿	13.2+α	3.45	4.6	17世紀前半 砂目積み
SX105	B XS-105	R010	50図17	福岡産陶器	擂鉢		(6.1)	(10.2)	18世紀代
SX105	B XS-105	R011	50図16	監査系陶器	土瓶蓋	13.2	3.0	5.9	18世紀後半
SX105	B XS-105	R012	50図9	肥前陶器	碗	11.2+α	7.3	5.0+α	17世紀後半～呉器手碗
SX105	B XS-105	R013	50図4	青磁	碗	(12.7)	(6.3)		龍泉窯系
SX105	B XS-105	R014	50図7	萩窯陶器	天目茶碗	2.4+α	3.4		19世紀代
SX105	B XS-105	R015	50図6	萩窯陶器	天目茶碗	3.7+α			19世紀代
SX105	B XS-105	R016	50図5	肥前磁器	青磁皿	(11.0)	2.6		17世紀末～18世紀代
SX105	B XS-105	R017	50図19	土師質土器	壺×皿	2.1+α			非クロロ系
SX105	B XS-105	R018	50図12	肥前陶器	皿	1.8+α	4.6		17世紀前半
SX105	B XS-105 燐土ブロック	R001	50図18	肥前陶器	土瓶	(10.6)	9.1+α		18世紀後半～
SX106	B XS-106	R001	53図1	肥前磁器	染付盃	6.4	3.2	2.5	18世紀後半～19世紀
SX106	B XS-106	R002	53図2	肥前磁器	小碗	(6.8)	3.3	(2.6)	18世紀後半～19世紀
SX106	B XS-106	R003	53図3	土師質	壺×甕	7.8	7.2	1.0	墨書きあり
SP107	B XS-107	R001	44図6	ガラス製品	薬瓶	4.2+α			「HOGN」の陽刻あり
SK108	B XS-108	R001	46図31	肥前磁器	蓋		3.0	11.6	19世紀代 焼き継ぎ有り
SK108	B XS-108	R002	46図37	銅製品	キセル(煙口)	(4.5)	1.4		19世紀代
SK108	B XS-108	R003	46図38	石製品	不明	6.0	1.8	0.6	硯の破片か
SK108	B XS-108	R004	46図32	肥前陶器	鉢	21.4	8.05	10.2	焼き継ぎ有り イッチン掛け
SK108	B XS-108	R005	46図35	土製品	土人形(裾部)				
SK108	B XS-108	R006	46図33	土製品	土人形(胴部)				
SK108	B XS-108	R007	46図34	土製品	土人形(腰部)				
SK108	B XS-108	R008	46図36	土製品	馬×牛玩具(脚部)				
SX110	B XS-110	R001	50図21	瓦質	こね鉢	(30.4)	9.7	22.8	
SX110	B XS-110	R002	50図20	肥前陶器	甕	5.0			
SX111	B XS-111	R001	51図5	土製品	人形	8.5	4.2	3.1	
SX111	B XS-111	R002	51図2	肥前磁器	白磁瓶	2.2	5.75+α		
SX111	B XS-111	R003	51図3	九州産陶器	鉢	(19.8)	10.6	8.0	
SX111	B XS-111	R004	51図4	瓦質	火鉢	7.6+α			19世紀代
SX111	B XS-111	R005	51図1	瓦器	椀	(3.8)	1.3+α		豊前産か
SX111	B XS-111 灰色土	R001	51図6	陶磁器	皿	(13.6)	2.5	(4.6)	17世紀前半 初期伊万里
SX111	B XS-111 灰色土	R002	51図7	陶磁器	皿	(12.4)	2.3+α	(5.4)	17世紀前半 初期伊万里
SX112	B XS-112	R001	55図35	関西系陶器	碗	(10.9)	7.2	(4.4)	18世紀後半頃
SK103	B XS-114	R001	45図24	肥前磁器	染付皿	24.0	1.55+α	(16.2)	焼き継ぎ有り
SK103	B XS-114	R002	45図26	肥前磁器	青磁染付瓶	5.5+α			18世紀代
SK103	B XS-114	R003	45図27	磁器	染付器種不明	3.5	1.7+α	3.2	用途・产地不明
SK103	B XS-114	R004	45図16	肥前磁器	染付筒型碗	(5.5)	4.2	(3.0)	18世紀後半
SK103	B XS-114	R005	45図25	磁器	紅皿	(4.0)	1.7	(1.3)	19世紀代
SK103	B XS-114	R006	45図18	磁器	青磁皿?	(13.7)	1.9+α		产地不明 精製品
SK103	B XS-114	R007	45図23	肥前磁器	染付蓋	2.4+α			焼き継ぎ文字有り 19世紀代
SK103	B XS-114	R008	45図21	肥前磁器	染付碗	11.3	6.45	4.7	19世紀代
SK103	B XS-114	R009	45図20	肥前磁器	染付碗	11.1	6.25	4.2	18世紀後半～19世紀代
SK103	B XS-114	R010	45図17	肥前磁器	染付筒型碗	(6.4)	5.2	3.4	18世紀後半
SK103	B XS-114	R011	45図19	肥前磁器	碗	5.6+α			
SK103	B XS-114	R012	45図22	肥前磁器	染付蓋	(8.1)	2.6	3.4	18世紀後半～19世紀代
SK103	B XS-114	R013	46図28	関西系陶器	土鍋	5.8+α			18世紀後半
SK103	B XS-114	R014	46図29	肥前陶器	擂鉢	4.6+α			18世紀代
SK103	B XS-114	R015	46図30	瓦質製品	不明	14.5	5.5	1.2～1.3	
SX118	B XS-118	R001	55図36	瓦	軒平瓦	9.3+α	4.45	1.65	
SK121	B XS-121	R001	46図63	肥前磁器	碗	(11.4)	5.10+α		18世紀後半
SK121	B XS-121	R002	47図66	肥前磁器	蓋	10.8	2.35		19世紀代
SK121	B XS-121	R003	47図69	肥前磁器	蓋	6.7	1.65		
SK121	B XS-121	R004	47図70	肥前磁器	小型瓶	1.6	6.9	2.6	
SK121	B XS-121	R005	47図75	肥前陶器	碗	(8.0)	4.8+α		
SK121	B XS-121	R006	46図55	肥前磁器	筒形碗	7.6	5.55+α		18世紀後半
SK121	B XS-121	R007	46図50	肥前磁器	碗	(8.4)	3.95	3.0	
SK121	B XS-121	R009	46図62	肥前磁器	碗(肥前)	9.2	5.9	3.4	18世紀後半
SK121	B XS-121	R010	47図74	陶器	碗(湯のみ)	3.4+α	4.4		福岡産か
SK121	B XS-121	R011	47図75	肥前陶器	皿(内野山窯)	1.8	4.6		18世紀代
SK121	B XS-121	R012	46図43	肥前磁器	紅皿(肥前)	4.8	1.55	1.5	19世紀代
SK121	B XS-121	R013	46図42	肥前磁器	紅皿(肥前)	4.6	1.3	1.5	19世紀代
SK121	B XS-121	R014	46図44	肥前磁器	紅皿(肥前)	5.1	1.1	2.0	19世紀代
SK121	B XS-121	R015	46図45	肥前磁器	紅皿(肥前)	4.8	1.35	1.5	19世紀代
SK121	B XS-121	R016	46図61	関西系陶器	染付碗	(9.0)	5.2+α		18世紀後半
SK121	B XS-121	R017	46図52	京・信楽系陶器	染付碗	4.4	(3.4)		18世紀後半
SK121	B XS-121	R018	46図51	京・信楽系陶器	蓋?	(7.0)	3.75	(2.8)	18世紀後半
SK121	B XS-121	R019	47図73	萩窯陶器	天目茶碗	3.0+α	4.1		
SK121	B XS-121	R020	47図72	萩窯陶器	天目茶碗	3.4+α			
SK121	B XS-121	R021	46図46	肥前磁器	紅皿	5.9	1.7	2.4	18世紀後半～19世紀代
SK121	B XS-121	R022	46図47	肥前磁器	紅皿	5.4	1.5	3.0	18世紀後半～19世紀代
SK121	B XS-121	R023	46図59	関西系陶器	碗	(8.2)	6.3	3.4	18世紀後半
SK121	B XS-121	R024	47図76	肥前陶器	碗?	3.4+α	3.8		
SK121	B XS-121	R025	47図78	肥前陶器	皿?(唐津)	0.9+α			砂目積み 白色釉
SK121	B XS-121	R026	47図77	肥前陶器	碗	2.1+α	(5.7)		
SK121	B XS-121	R027	46図53	肥前陶器	碗(端反碗)	8.8	5.0	3.2	19世紀代
SK121	B XS-121	R028	46図54	肥前陶器	碗(端反碗)	(8.8)	5.35	(3.01)	19世紀代
SK121	B XS-121	R029	46図56	肥前磁器	筒形碗	7.4	5.9	4.5	18世紀後半
SK121	B XS-121	R030	47図85	焼締陶器	擂鉢	9.6+α			堀×備前
SK121	B XS-121	R031	47図82	肥前陶器	香炉(青磁)	4.3+α	(6.6)		19世紀代
SK121	B XS-121	R032	47図89	瓦質土器	小壺	3.3+α			
SK121	B XS-121	R033		肥前陶器	小壺	5.3+α			
SK121	B XS-121	R034	46図49	肥前陶器	皿	(7.2)	3.5	(2.9)	
SK121	B XS-121	R035	46図48	肥前磁器	染付紅皿	3.7			18世紀後半
SK121	B XS-121	R036	48図99	銅製品	かんざし?				
SK121	B XS-121	R037	48図97	土製品	ガン貝?	3.1	3.7		鳥形 色絵
SK121	B XS-121	R038	47図67	肥前陶磁	染付皿(波佐見)	13.6	3.2	7.2	18世紀中葉～末葉
SK121	B XS-121	R039	46図58	関西系陶器	碗	(9.0)	6.4	3.4	

遺構番号	S番号(土色)	R番号	図版番号	種類	器種	口径(長・縦)	器高(横・幅)	底径(厚)	備考
SK121	B S-121	R040	47図83	肥前陶器	火入れ?	(13.0)	10.6	8.8	18世紀代 陶胎染付
SK121	B S-121	R041	47図88	関西系陶器	土鍋	(19.55)	16.05	(8.3)	18世紀後半
SK121	B S-121	R042	47図87	九州系陶器	土瓶		6.6+α	(9.6)	18世紀代
SK121	B S-121	R043	47図86	九州系陶器	土瓶		4.6+α		18世紀代
SK121	B S-121	R044	46図64	肥前磁器	広東碗	(11.8)	6.2	(6.6)	18世紀後半~19世紀代
SK121	B S-121	R045	46図65	肥前磁器	広東碗	(11.4)	5.9	(6.4)	18世紀後半~19世紀代
SK121	B S-121	R046	47図71	肥前磁器(青磁)	花瓶?	1.7	8.7+α		
SK121	B S-121	R047	47図68	肥前磁器	皿	12.0	3.3	(7.6)	
SK121	B S-121	R048	46図57	肥前陶器	青磁 丸碗	(8.6)	5.1	3.3	
SK121	B S-121	R049	47図90	肥前陶器	醤水入れ	5.5+α	8.5+α	4.8(MAX)	
SK121	B S-121	R050	47図81	肥前陶器	鉢(刷毛目唐津)				
SK121	B S-121	R051	47図80	肥前陶器	鉢(刷毛目唐津)		6.6+α		
SK121	B S-121	R052	47図79	肥前陶器	甕		3.7+α		
SK121	B S-121	R053	47図84	焼締陶器	擂鉢		5.2+α		堺×備前
SK121	B S-121	R054	48図96	銅製品	鉈?	径2.3×2.7			
SK121	B S-121	R055	48図100	石製品	碁(砂岩製)	5.3+α	4.1+α	2.6	
SK121	B S-121	R056	47図93	土師器土器	培烙	29.6	6.6	(9.0)	18世紀後半~19世紀代
SK121	B S-121	R057	47図91	土師質土器	大甕		13.4+α		
SK121	B S-121	R058	47図92	土師質土器	培烙	(29.2)			18世紀後半~19世紀代
SK121	B S-121	R059	47図94	土師質土器	培烙	(33.6)			18世紀後半~19世紀代
SK121	B S-121	R060	47図95	土師質土器	培烙×蓋	(21.6)	2.8	(21.4)	
SK121	B S-121	R061	48図98	土製品	人形				
SX123	B S-123	R001	55図43	肥前磁器	染付碗(広東碗)	(9.6)	5.05	(5.2)	18世紀後半~19世紀代
SX123	B S-123	R002	55図40	肥前磁器	染付筒型碗	(7.0)	5.7		18世紀後半
SX123	B S-123	R003	55図44	肥前磁器	染付皿	(13.1)	4.1	(7.5)	18世紀後半
SX123	B S-123	R004	55図39	肥前磁器	青磁染付碗	7.2	6.2	(3.2)	18世紀後半
SX123	B S-123	R005	55図42	肥前磁器	染付碗	8.6	4.95	3.6	18世紀後半
SX123	B S-123	R006	55図38	肥前磁器	紅皿	5.6	1.75	2.7	18世紀後半~19世紀
SX123	B S-123	R007	55図37	肥前磁器	紅皿	(5.4)	1.5	(2.0)	19世紀代
SX123	B S-123	R008	55図47	肥前陶器	徳利		(5.0)	8.3	底部に刻印あり
SX123	B S-123	R009	55図41	肥前陶器	碗		2.4+α		18世紀後半
SX123	B S-123	R010	55図50	繩文土器	淺鉢(西平式?)		5.8+α		
SX123	B S-123	R011	55図48	京・信楽系陶器	土瓶	(7.8)	6.0		イッキン掛け
SX123	B S-123	R012	55図49	土製品	亀形土製品	2.7	6.4		
SX123	B S-123	R013	55図45	志野焼	向付		2.6+α		17世紀前半
SX123	B S-123	R014	55図46	国産陶器	擂鉢		4.9+α		肥前産か
SX123	B S-123	R015	56図53	瓦	丸瓦	17.7+α	14.95	2.2	「助ノ永」刻印あり
SX123	B S-123	R016	56図52	瓦	平瓦	29.7	15.0+α	1.8~1.9	「助ノ永」刻印あり
SX123	B S-123	R017	56図51	瓦	平瓦	18.6+α	13.65+α	1.4	「細和」の刻印あり
SK124	B S-124、S-121	R001		肥前磁器	染付皿	(0.95)			
SK124	B S-124	R002	48図19	瓦質	七輪	13.8	8.8	12.5	18世紀後半~19世紀代 1
SK124	B S-124	R003	48図18	瓦質	七輪	14.4	3.5		18世紀後半~19世紀代 1
SK124	B S-124	R004	48図15	肥前磁器	碗	(10.6)	6.9	(4.6)	18世紀代
SK124	B S-124	R005	48図13	関西系陶器	土瓶蓋	7.0	2.05		18世紀代
SK124	B S-124	R006	48図10	肥前陶器	壺×瓶	(12.2)	5.5+α		
SK124	B S-124	R007	48図8	肥前磁器	染付皿		1.9+α	(10.0)	18世紀後半~19世紀代
SK124	B S-124	R008	48図9	肥前磁器	色絵皿	(2.5)			
SK124	B S-124	R009	48図2	肥前磁器	筒型碗	7.4	5.2		18世紀後半
SK124	B S-124	R010	48図3	関西系陶器	碗	9.85	5.2	2.8	18世紀後半?
SK124	B S-124	R011	48図6	肥前磁器	碗		3.0+α	4.2	
SK124	B S-124	R012	48図4	京・信楽系陶器	碗	8.9	5.1	2.8	
SK124	B S-124	R013	48図15	肥前陶器	壺?	(7.45)			17世紀代
SK124	B S-124	R014	48図11	肥前陶器	鉢	4.75	6.1		
SK124	B S-124	R015	48図12	関西系陶器	土鍋	(14.5)	(5.8)		18世紀後半
SK124	B S-124	R016	48図14	瀬戸美濃産陶器	壺	(6.65)	4.5+α		
SK124	B S-124	R017	48図17	焼締陶器	皿?	11.2	1.9		備前?
SK124	B S-124	R018	48図20	瓦質	火鉢?	(5.45)			
SK124	B S-124	R019	48図22	瓦	軒丸瓦	瓦当部径14.2			文様区径10.1
SK124	B S-124	R020	48図21	瓦	軒平瓦	(5.95)	3.4	1.3	
SK124	B S-124	R021	48図23	土製品×玩具	魚形土製品				
SK124	B S-124	R022	48図1	肥前磁器	紅皿	4.45	1.35		19世紀代
SK124	B S-124	R023	48図16	陶器	栓	2.6	2.6	2.6	产地不明
SK124	B S-124	R024	48図24	銅製品	煙管吸口	6.4	1.2~0.4		19世紀代
SX126	B S-126	R001	53図5	関西系磁器	碗		3.6+α	(5.2)	18世紀後半
SX126	B S-126	R002	53図4	肥前磁器	碗		2.8+α	(3.4)	19世紀代
SX126	B S-126	R001	53図9	肥前磁器	碗	(7.2)	5.5	(2.5)	焼き継ぎ文字有り
SX126	B S-126	R002	53図8	肥前磁器	染付小碗	9.4	5.2	3.3	焼き継ぎ文字有り
SX126	B S-126	R003	53図13	肥前磁器	瓶	8.4	7.9		
SX126	B S-126	R004	53図15	関西系陶器	香炉?	10.4(11.2)	5.2	5.0	18世紀後半
SX126	B S-126	R005	53図14	志野焼	向付		3.6+α		17世紀前半
SX126	B S-126	R006	53図12	信楽系陶器	土瓶	5.4	2.5		
SX126	B S-126	R007	53図17	関西系陶器	土瓶	8.5	12.3	8.2	18世紀後半
SX126	B S-126	R008	53図16	產地不明陶器	土瓶	7.2	(6.2)		焼き継ぎあり
SX126	B S-126	R009	53図7	肥前磁器	碗		5.4	5.0	
SX126	B S-126	R010	53図10	肥前磁器	蓋	10.6	2.9	3.7	18世紀後半~19世紀代
SX126	B S-126	R011	53図11	肥前磁器	染付角皿	(21.1)	5.1	(12.7)	19世紀代 焼き継ぎ有り
SX126	B S-126	R012	53図3	関西系陶器	小碗	10.0	4.8	(3.0)	
SX126	B S-126	R013	53図6	產地不明陶器	碗?		3.2+α		精製品
SX126	B S-126	R014		繩文	鉢	(5.9)			
SK128	B S-128	R001	49図1	萩窯陶器	天目茶碗		3.9+α		19世紀代
SK129	B S-129	R001	49図2	焼締陶器	擂鉢	9.5	6.35+α		堺×備前
SV130	B S-130	R001	44図2	土師質土器	皿	(17.8)	2.6	(10.0)	17世紀前半 非ロクロ系
SV130	B S-130	R002	44図4	瓦質土器	短頸壺		6.8+α		
SV130	B S-130	R003	44図1	肥前陶器	溝縁皿		2.7+α		17世紀前半
SV130	B S-130	R004	44図3	土製品	焼塙壺		6.6+α		17世紀前半
SV130	B S-130	R005	44図5	瓦	軒平瓦		3.0		
SX134	B S-134	R001	56図56	国産陶器	擂鉢		5.7+α		
SX134	B S-134	R002	56図54	肥前陶器	鉢		4.35+α		
SX134	B S-134	R003	56図55	焼締陶器	擂鉢		7.0+α		堺×備前
SX134	B S-134	R004	56図57	土師質土器	不明		2.2+α	9.6	用途不明

遺構番号	S番号(土色)	R番号	図版番号	種類	器種	口径(長・縦)	器高(横・幅)	底径(厚)	備考
SX134	B区S-134	R005	56図58	土師質土器	大甕		16.55+ α		18世紀代
SK108	B区S-136	R001	46図39	肥前磁器	染付碗	(6.4)	3.4+ α		19世紀代
SK108	B区S-136	R002	46図40	関西系陶器	碗		2.1+ α	(3.8)	
SK108	B区S-136	R003	46図41	瓦製品	軒平瓦				
SX139	B区S-139	R001	54図4	肥前磁器	筒型碗	(7.20)	5.85	(4.00)	18世紀後半
SX139	B区S-139	R002	54図6	肥前磁器	染付碗		2.95+ α		19世紀代?
SX139	B区S-139	R003	54図5	肥前磁器	皿		2.65+ α		
SX139	B区S-139	R004	54図1	肥前磁器	染付紅皿	(5.46)	2.50	1.80	18世紀後半~19世紀
SX139	B区S-139	R005	54図2	肥前磁器	染付紅皿	(4.9)	2.85	3.0	18世紀後半~19世紀
SX139	B区S-139	R006	54図7	肥前陶器	染付角鉢		3.5+ α		19世紀代
SX139	B区S-139	R007	54図9	志野焼	向付		3.5+ α		17世紀前半
SX139	B区S-139	R008	54図3	肥前磁器	小皿	(6.4)	3.4	(2.4)	
SX139	B区S-139	R009	54図12	国産陶器	箱庭道具	7.5+ α	2.3+ α		橋形を模した箱庭道具
SX139	B区S-139	R010	54図10	焼締陶器	壺×甕	(39.28)	5.3+ α		
SX139	B区S-139	R011	54図11	焼締陶器	擂鉢		6.6+ α		堺×備前
SX139	B区S-139	R012	54図13	石製品	砥石	13.8	7.4	8.1	砂岩製
SX139	B区S-139	R013	54図8	焼締陶器	擂皿	(7.4)	1.6	(2.8)	福岡産か?
SP142	B区S-142	R001	44図8	肥前磁器	染付鉢		6.2 α		
SP142	B区S-142	R002	44図9	肥前磁器	染付碗	(10.6)	6+ α		17世紀前半 初期伊万里
SP142	B区S-142	R003	44図7	肥前磁器	染付猪口?	(4.2)	1.9+ α	2.05	
SP142	B区S-142	R004	44図10	肥前陶器	溝縁皿	(14.6)	3.25+ α		17世紀代
SP142	B区S-142	R005	44図11	土師質土器	皿	(9.4)	1.8	5.6	17世紀代 非ロクロ系
SP142	B区S-142	R006	44図12	土製品	魚形玩具				
SK146	B区S-146	R001	49図3	肥前磁器	染付碗	(12.50)	6.60	(4.75)	18世紀前半~中頃
SK146	B区S-146	R002	49図4	肥前磁器	染付皿		2.05+ α	7.8	18世紀後半
SK146	B区S-146	R003	49図5	肥前青磁	大皿×盤		2.9+ α	6.8	18世紀代
SK146	B区S-146	R004	49図6	鉄製品	包丁?	17.3	5.9(MAX)	0.8	
SK147	B区S-147	R001	49図7	肥前磁器	染付碗	(11.3)	5.3+ α		17世紀前半 初期伊万里
SK147	B区S-147	R002	49図9	土師質土器	皿	(8.8)	2.5+ α		非ロクロ系
SK147	B区S-147	R003	49図10	土師質土器	皿	(11.6)	3.2+ α		非ロクロ系
SK147	B区S-147	R004	49図11	土師質土器	皿	(11.0)	3.8		非ロクロ系
SK147	B区S-147	R005	49図13	骨片		5.6	3.3	0.6~0.7	
SK147	B区S-147	R006	49図12	瓦	軒平瓦	6.05+ α	3.05	1.55	
SK147	B区S-147	R007	49図8	関西系陶器	蓋	6.65	2.50	3.58	18世紀代
SK151	B区S-151	R001	49図15	肥前磁器	肥前系筒型碗	(6.8)	5.2	(2.8)	18世紀後半
SK151	B区S-151	R002	49図14	肥前磁器	碗		3.8+ α		
SK151	B区S-151	R003	49図16	肥前磁器	碗		0.9+ α	(3.8)	18世紀後半
SK152	B区S-152	R001	49図17	肥前陶器	皿(唐津)	(12.7)	3.0	4.8	17世紀代?
B区淡茶灰土	R001	57図2	磁器	色絵碗	8.7	4.3	3.2	昭和時代 金太郎の絵有り	
B区淡茶灰土	R002	57図1	磁器	ミニチュア皿	3.7	1.25	1.5	玩具	
B区淡茶灰土	R003	57図7	肥前磁器	皿	(14.2)	3.25	(6.0)	17世紀代 初期伊万里	
B区淡茶灰土	R004	57図6	磁器	鉢×皿		2.57+ α		陽刻あり	
B区淡茶灰土	R005	57図8	肥前磁器	染付皿		(2.4)	4.5		
B区淡茶灰土	R006	57図5	肥前磁器	染付碗	9.1	3.3	4.9	19世紀代	
B区淡茶灰土	R007	57図3	国産磁器	染付皿		2.3+ α	3.0	19世紀代 濑戸美濃?	
B区淡茶灰土	R008	57図12	関西系陶器	皿	(10.40)	4.4+ α		18世紀後半 墨書有り	
B区淡茶灰土	R009	57図14	瓦質土器	皿?		2.1+ α			
B区淡茶灰土	R010	57図20		虫めがね	縦7.0	幅3.4			
B区淡茶灰土	R011	57図10	肥前磁器	色絵大皿		3.2+ α	(8.0)	17世紀代	
B区淡茶灰土	R012	57図19	銅製品	把手	3.7	7.4	0.6		
B区淡茶灰土	R013	57図11	磁器	染付皿	2.7	4.0	0.3		
B区淡茶灰土	R014	57図13	陶器	壺?	10.4	3.8	4.4		
B区淡茶灰土	R015	57図4	肥前磁器	染付碗		3.9+ α		焼き継ぎ有り	
B区淡茶灰土	R016	57図15	土師質土器	壺	(16.6)	2.8		17世紀前半	
B区淡茶灰土	R017	57図18	瓦製品	軒平瓦					
B区淡茶灰土	R018	57図17	瓦	軒平瓦	8.1	4.1	1.8		
B区淡茶灰土	R019	57図16	瓦	軒平瓦					
B区淡茶灰土	R020	57図9	肥前磁器	皿	(12.6)	2.8+ α		17世紀前半 初期伊万里	



A区全景（第1面）



A区全景（第2面）



A区全景（第1面）その2



SE042土層観察時（北より）



SE080完掘時（北より）



SE092土層観察時（北より）



SF005、010検出状況（南より）



SF005全景（南より）



SF005全景



SF005土層（北より）



SF005土層縦断面（東より）



SV010砂利検出状況（東より）



SV010完掘状況（北より）



SV010完掘状況（南より）



SK060土層観察時（東より）



SK060土層詳細（北東より）



SK060完掘状況（東より）



SK073土層観察時（南より）



SK073完掘状況（西より）



SK073完掘状況（南より）



SK073使用イメージ（西より）



SX033白色粘土検出時（北より）



SX033礫出土状況（西より）



SX033礫出土状況2（南西より）



SE085井筒検出状況（南西より）



SE085井筒近景



SE085作業風景



SE175土層観察時（西より）



SE175完掘時（西より）



SD090完掘状況（東より）



調査区東壁土層全景（西より）



調査区東壁土層詳細（西より）



B区全景（西より）



B区全景（南より）



B区全景（北より） 詳細①



B区全景（北より） 詳細②



SW128～132検出（南より）



SV130黄色土詳細（南より）



SV130完掘状況（南より）



SK124土層（南より）



作業風景



府内18次遠景



第24図4



第29図6



第32図21（左）・22（右）



第33図5



第34図34



第44図1（下）・4（左）・3（右）



第44図2



第45図3（左）・12（右）



第46図16



第47図75



第53図16



第53図6



第53図8



第54図12



第54図15



第57図12

報告書抄録

ふりがな 書名	ふないじょう・じょうかまちあと7 府内城・城下町跡7
副書名	ホテル建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
卷次	
シリーズ名	大分市埋蔵文化財発掘調査報告書
シリーズ番号	第93集
執筆者名	佐藤道文
編集機関	大分市教育委員会
所在地	〒870-0046 大分市荷揚町2番31号 TEL 097(534)6111
発行年月日	西暦2009年3月31日

ふりがな 遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード	北 緯	東 経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村					
ふないじょう・じょうかまち 府内城・城下町	おおいたしにあげまち ばん 大分市荷揚町26番	44201	33度14分27秒	131度36分40秒	2007.7~ 2007.8	404m ²	ホテル建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
府内城・城下町跡 第18次調査	近世城下町	平安時代 戦国時代 江戸時代	掘立柱建物跡 井戸跡 道路状遺構 廃棄遺構	肥前染付 非ロクロ系土師質 土器 志野焼	古代の井戸跡2基確認 17世紀代の規格的に配置された 掘立柱建物 近世後半の大型廃棄遺構あり

要約	今回の調査では、17世紀代の掘立柱建物が確認される。竹中・日根野氏段階のものと位置づけられ、城下町が形成された頃の様子が分かる貴重な所見が得られた。また、近世の城下町内では初となる古代の井戸跡が発見され、周辺に何らかの施設があることが想定され、その性格が注目されるところである。
----	---

